業務資料No. 743

東北ブラジルの農業と日本人

ワルデマール・バレンテ

昭和60年3月

国際協力事業団

東北ブラジルの農業と日本人

ワルデマール・バレンテ

JICA LIBRARY
1025343[3]

昭和60年3月

国際協力事業団

国際協力事業団	
受入月日 '85. 5. 31	703
	81
登録No. 11522	EPS

ま　え　が　き

本調査報告書は，社団法人　日本ブラジル中央協会（会長　田付景一）が，ブラジル共和国レシーフェ市のジョアキン・ナブーコ財団（FUNDAÇÃO　JOAQUIM NABUCO）理事長フェルナンド・メーロ・フレイレ氏並びに著者ワルデマール・バレンテ氏より日本語への翻訳・刊行の許可をうけ，元クリチバ総領事　和田規矩男氏に依頼し翻訳したものである。

関係各位が，ブラジル東北地域農業における日本人を理解する上で本書をご活用頂ければ幸いである。

昭和60年3月

国際協力事業団
移住計画調査部長

目　　次

はじめに …… 1
1. ブラジルに於ける移住問題 …… 3
2. ブラジルに於ける日本人移住 …… 17
3. 東北ブラジル農業に於ける日本人 …… 25
3.1 現在まで未調査の題材を開拓する調査 …… 25
3.2 方法論的指針 …… 28
3.2.1 対象地域 …… 28
3.2.2 目　的 …… 29
3.2.3 資料の蒐集 …… 29
3.2.4 作業グループ …… 30
3.2.5 期間，困難及び不測の事態 …… 31
3.3 分析及び解釈 …… 32
3.3.1 調査した農業入植地 …… 32
3.3.2 調査した地域，歴史，地理的特徴 …… 36
3.4 調査対象家族の特徴 …… 40
3.4.1 家族の数的構成 …… 40
3.4.2 人種的類型 …… 41
3.4.3 性　別 …… 44
3.4.4 家長への経済的依存度 …… 45
3.4.5 年　齢 …… 47
3.4.6 家族内の地位 …… 48
3.4.7 配偶関係 …… 49
3.4.8 出生地 …… 52
3.4.9 話す言語 …… 52
3.4.10 教育程度及び教育状態 …… 56
3.4.11 主要な職業 …… 58
3.4.12 宗教，仏教正統派，カトリック教及び混合主義形態 …… 61

3.5　動機（家長のみ）…… 72
3.5.1　移住発生率の高い年 …… 72
3.5.2　「魅力」の理由及び配置 …… 72
3.5.3　嫌気の理由 …… 76
3.6　費やした努力と対比した満足感 …… 81
3.7　技術的，経済的状態 …… 83
3.7.1　使用可能な面積及び使用中の面積 …… 83
3.7.2　住居用家屋を含む改良工事 …… 84
3.7.3　機　具 …… 87
3.7.4　労働力及び就労可能人口 …… 89
3.7.5　金融的援助，生産及び販売 …… 89
3.7.6　農業技術及び実践 …… 97
3.8　衛生及び医療・保健状態 …… 99
3.8.1　家庭用水の水源地及び浄水処理 …… 99
3.8.2　排泄物及び塵芥の処理 …… 100
3.8.3　食料事情及び料理の仕方 …… 101
3.8.4　健康と疾病，治療と予防，呪医と医者 …… 103
3.9　文化的適応と混合主義，適応と同化 …… 105
3.9.1　組織化過程（直接的相互作用）…… 105
3.9.2　ブラジルの伝統的祭り，訪問及び会合 …… 108
3.9.3　学校心理文化的統合の要素 …… 110
3.9.4　間接的相互作用 …… 112
3.10　異民族間結婚 …… 114
3.11　カトリック教への改宗及び大衆宗教の影響 …… 116
3.12　反同化 …… 118
3.12.1　日本人の伝統的祭り及び祝賀会 …… 118
3.12.2　日本の典型的衣服 …… 120
附　属 …… 123
注 …… 132

参 考 文 献 …… 150
欧 文 索 引（五十音順）…… 160
著者の著作 …… 167

は　じ　め　に

粘り強く，ほとんど強情とも云えるものをもって，困難とごたごたした長い歩みの後，一つの仕事「東北ブラジルの農業と日本人」調査報告書の最終段階に到達した。この調査は文部省との協定の予算を当にすることができず，ジョアキン・ナブーコ社会調査研究所自体の自由になる資金にもほとんど縁がなかった。

批判的観察眼をもって読まれる方々に一言予告して置きたい。東北ブラジル（以下東北伯と略記）農業に於ける日本人の生活及び活動に関する組織的な調査の範疇では，最初の研究であり，形式ばらないアプローチも無視しなかった。

本研究は文化的適応及び混血の問題を狙った調査である。接触を始めた新しい居住環境及び文化の諸条件に対応した移住者の正確な行動を有りのままの自然さで示す一種のスナップ写真である。ブラジル文化の諸要素を受入れ，そして東北伯人が，地域発展のため有用且つ健全として受入れて来た諸要素との云わば共生的混合の内で，活発にブラジル文化に働きかけている。

感謝の言葉を若干申し述べなければならない。この調査が後援を受けたジョアキン・ナブーコ社会調査研究所の理事長で，社会・人類学者ジルベルト・フレイレに対し，テーマの示唆について，示唆は，全ての示唆が与えるのに適した機会があるように，適切で時宜を得たものであった。また，同研究所の二人の所長に対し，フィールド作業の時，この研究機関の所長であったマウロ・モッタ及び現所長フェルナンド・デ・メーロ・フレイレ。その管理下で，種々の事情による中断の後，この調査は再開され，完了した。この段階で，我々は資料を補足するため，バイア州及びリオ・グランデ・ド・ノルテ州の入植地を再訪しなければならなかった。さらに研究所文書資料部，同部長エティルマ・コーチーニョ女史並びに活動的で才智ある専門員及び司書達に対し，イナルド・モンテイロ・シルベストレ女史は有能な司書で，或る期間我々に配属され，時にタイピストの役割をするのみならず，特に，優れた達人である図書管理法技術に基づき，調査に補助的に使われる参考文献カードを組織した。作業チーム内で，交代しつつ，或はフィールド調査に於て或は検討及び表作成に於て，重要な協力をしてくれた調査員達で，マリア・エウジェニア・デ・メネゼス，ジョアン・エリオ・メンドンサ，エリザ・ベラゾ，グラジエラ・ブルスキー，ルイ

ザ・アラウジョ，エリザ・コリエール，マリア・デ・ファティマ・キンタス，カルロス・アルベルト・アゼベード，ビルジリア・ベイショート及びジャニルザ・カバルカンチ・デ・ローシャ・リマ。統計部長ルイス・パウロ・サンパイオ・ピーレス・デ・カストロ及び研修員ウィルソン・ジョゼー・デ・サンターナによる図表の作成について。また，調査の過程に於て援助を与えられた諸団体・機関，移植民院（ＩＮＩＣ），農業振興院（ＩＮＤＡ），農地改革院（ＩＢＲＡ）（以上現在は廃止），土地分譲・植民会社（ＣＲＣ），ブラジル地理統計院（ＩＢＧＥ），東北開発庁（ＳＵＤＥＮＥ），漁業開発庁（ＳＵＤＥＰＥ），在レシフエ日本国総領事館，特に中川忠総領事在任期間，各州農務局，日本移植民会社（ＪＡＭＩＣ），諸登記所の総裁，理事，所長。日系の社会学者斎藤広志によるその激励と受入れた示唆について。屢々仕事を中断して我々に気持良く接してくれた東北伯の農業植民地で働く日本人に対し。農業植民地に在勤する農業技師及び教員に対し。佐藤武雄氏に対し，同氏は，ペルナンブコ州に於ける最も古い日本人で，レシフエ市に在住し，州に於けるＶＡＲＩＧ航空の最初の代理人で，貴重な情報を提供され，日本語の註解をポルトガル語に翻訳した。イラセマ・カンピーナ・ロドリーゲスについては，根気の良いタイピストとして，私の最低の字，それは修正や追加が一杯あり，本当にみみずのはった集りのようなものを解釈してくれた。

更に，カルロス・マルルシオ・デ・アラウジョは，論文を最終的に注意深く打直し，編集・複製課長シルベイラ・ベンツエン・ペッソア及びマリア・ダ・コンセイソン・ルーナ・ロドリーゲス，マリア・ド・カルモ・デ・オリベイラ・イ・シルバ，ローザ・マリア・ダ・セ・マルチンス，ロムロ・フレイレ，アルナルド・トビアスは，印刷面の責任を負った。

最後に，人類学者パリー・スコット（アメリカ人），ダニエル・ペラン・ダ・ロシャ・ピッタ（フランス人）及びカルメラ・オスカノーア・カルデナス（ペルー人）は要約を夫々英語，仏語及び西語に素晴しい翻訳をしてくれた。

全ての人々に私のお礼と感謝の意を表する。

1. ブラジルに於ける移住問題

広大な領土の国，特に農村地帯に有望な農産加工業の可能性のある巨大な空間を有するブラジルは，その諸問題に対する最も重要な回答の一つを移住に見い出している。特に人口の定着及び開拓の問題を農業のみならず工業に向けられた労働力で解決して来た。

マヌエル・ディエゲス・ジュニオールは，その優れた論文の中で，移住または移住者の役割の特定の様相について優れた専門的論文の貢献を認めつつも，「ブラジルの移住に必要としている研究が歴史的または地理的にも社会学的または人類学的にも未だなされて居ない」と断言しているのはもっともである。(注1)

このブラジル人類学者の労作は，実際のところ，極めて重要なものである。断片的に且つ不十分なやり方でしか行われなかったこの研究の実施に，彼の研究の大部分は対応するものである。著者は，謙遜して，単なる小さな寄与にすぎず，全面的なものでもまた決定的なものとも認めてはいないが，同論文は，ブラジルに於ける移住の詳細な研究をまた含んでいる。歴史的に，移住の前段階及び開始から，1950年迄の決算を行い，更に地理的，社会教育的及び政治的観点から問題を検討している。広い意味で，また，人類学的である。一般的計画の中で，移住の役割，特に都市化及び工業化の過程に於ける移住者の役割に焦点を合せ，論文は正確，詳細であることを示している。その上，新しい研究，調査にとり，示唆と道標に富んでいる。

ブラジルに於ける移住の歴史は，ブラジルの形成について，文化的適応の面に於てもまた混血の面に於ても，適切に知るため不可欠のものである。そのため，19世紀の始めから，或は強く或は弱く，最初は非ポルトガル・ヨーロッパ人集団が，次いでスペイン系アメリカ諸国人，アメリカ南部人，中東諸国人，特にジョルダン，レバノン及びシリア人が貢献した。

アジア人そのものの中では，初めに中国人が多く，主として東北伯，特にペルナンブコ州に於て，洗濯屋の主人として知られた。中国人は，自身が有能な衣類の洗濯職人であり，アイロンをかける技術に優れていた。その後が，日本人であった。ここでは，アフリカ黒人移住者の存在を無視することはできない。彼等が，ブラジルに来たのは，奴隷制度下にあったので，受動的移住と云う強制的形態であった。

インディオそのものも，ブラジルの移住の歴史の中では，地理的移動の過程から除外することはできない。多くの場合，主としてツピー族の間における著しい遊動生活が特徴であった。国内移住の範疇に完全に当て嵌まる過程である。(注2)

ブラジル国が構成された後，19世紀の初期から，外国移住者の流れは，ポルトガル人を主としていたヨーロッパ植民移住の過程の補足として始まった。

新しい要素が，ここかしこで，文化景観の画面の内で混合し始めた。また，ブラジルの各地で，人種的に異なったタイプの移住者がブラジル人の肉体的形成に影響しつつある。例えば，皮膚，毛髪，眼の色である。人類学者が肌色と呼ぶ色を基礎とするこの一連の要素においても，また形態生理学の各種の様相においてもである。

前世紀の初めからブラジルに入って来た移住者の中で，ドイツ人とイタリア人が特に南部に於て目立っている。また，ポーランド人，オランダ人，中国人が，東北伯，特にペルナンゴ州に於て目立っている。ロシア人は殆んど全ブラジルに及んでいる。日本人は，特に南部，とりわけサン・パウロ州に，また北部に於て，アマゾナス州及びパラ州に今世紀の初めから入った。東北伯（ペルナンブコ州，バイア州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州）ではより近年のことである。

移住は，常にブラジルの重要な問題であり，19世紀の末に顕著な地位を占め，第一次世界大戦（1914年―1918年）の直前に一層注目を集め，1919年から1939年に躍進した後，ブラジル政府の最も強力な関心事の一つとなるに到った。(注3)

当初は，イルマール・ペンナ・マリニョの記述によれば，「中心的考え方は国土の物理的占有の考えであった。」ブラジルの空間の空白を埋めると云うことが関心事であった。移住政策は純粋に人口面の問題に対処することを基本的な目的としていた。数的基準が優位を占めていた。重要なことは，人口稀薄を減少するため充分な数の人間を受入れることであった。或る程度は質的判断―農業を動かし且つ始まりつつあった工業を促進する―を考えていたことは否定できない。しかしながら，眼目は住民を増やすことであった。(注4)

初期には，移住者は冒険家であった。或る種の小説作者の幻想のモデルとなり得る英雄に近かった。この時代には，移住は主として経済的要素で代表される追い出す力に専ら由来していた。例えば，所謂「生活圏」の狭隘性に凝結した重大な経済的・社会的問題に苦斗していた人口密度の高い国々で起っていたことであった。ヨ

ーッパ諸国だけの名を挙げても，イタリア，ドイツ，スペイン，ポルトガルはこの事例であった。類似の現象が日本に於てもまた或る時期に，労働市場の明らかな不足と云う悪条件を加えて起っていた。

移住の手続はいかなる種類の規制もなしに行われていた。無秩序な混乱した手続であった。問題の正確な重要性を知ろうとすらしていなかった。

援助も指導も無しに，外国人は自国を出て，他国に向い，そこでは契約または合意に基づく何等の便宜も無かった。全く盲滅法に，就労先すら約束されずに，誰れも知らずに移住者は未知の国に到着していた。(注5)

生活を向上したいという願望は，受入国に存在するという利益についての漠然とした，そして屢々誤った情報によって養われていた。

現在は，移住は一つの規制に従っている。移住者は，労働契約に出会うことを知っていて祖国を出て行く。出身国は，悲しい送還という出費の危険を賭して，移住者が冒険をするために出て行くことを許さない。政府は，関係当局を通じて，移住が好成果に終るのに不可欠な諸保証で自国民を取り巻くのである。

移住者の運命に対する現在の関心は，国際的政策の一部となって居り，ヨーロッパに政府間移住委員会が設置された後は特にそうである。(注6)

移住者は，今日，人の移動が出身国，受入国及び移住者にとり満足な結果が得られるよう出生国並びに移住関係国際機関の援助を受けている。

移住は，特に政治的，経済的問題である外，極めて重要な広範な社会文化問題である。極めて高い意義のある掛り合いを含む問題である。その一つは，諸国民の平和と安全に関する問題，諸国家間の良好な関係に関する問題である。国際政治に結び付いた重要な含蓄のあるものである。

現在ブラジルは計画移住の段階にある。指導された移住の段階である。ブラジルが受入れることを望んでいるのは技能労働者である。都市労働のみならず農業労働に対してもである。それ故，移住の量は，或る場合，減少していることに気付く。そして，反対に，技術的・職業的資格はより高くなっている。

ブラジルの場合，その広大な領土と限られた人口潜在力からして，人的占有の類型として現われる所謂植民移住に良く適合している。(注7) それでも，この型の移住一基本的に量が特徴の一を認めるとして，移住者の経済的のみならず社会文化的重要

性を軽視することはできない。移住者は，単なる人口要素として考えられなくなり，本質的に経済的に，また，広い意味で文化的に重要な要素として注目されなければならないことを強調しなければならない。移住者を受入れ，その地域社会の一つに移住者を統合する国にとっても，また，移住者の流出による経済的損害及び社会文化的不適合に直面する移住者が出て行く国にとってもである。

大きな人的潜在力を吸収する余地を有するとは云え，ブラジルは農業及び工業で利用するため専門的またはより良い資格を有する労働者に対しより関心を有している。それでも，労働市場での需要を見失なっていない。移住者は，即時生産を生みだす資本である。労働市場の型に適合しないため働かずにいると，労働力は失なはれるか遊んでいることになり，養成した国にもまた損失となる。損失は，送還の運賃の出費で大きくなる。

所謂植民移住においては，人は農業労働の能力を備えていなければならない。農業耕作者として技術的に能力を備えていなければならず，補足的に牛飼い或は蓄産者として能力を有していなければならない。特に職業的経験を有しなければならない。指摘すべき重要な点は，農業入植地制度では，移住者は一般的に云って受入国の援護を受けると云うことである。割当区画を貰って，住居を定めた入植地で，金融的及び技術的援助を同時に受ける。また，最も広い意味での医療・衛生，教育，社会・文化の援護を受ける。或る場合には，援助は国際機関が維持している。援助は，適応しようとする努力を見失うことなく，異なった生態的現実に対する適応に注意を払わなければならない。特に計算に入れて置かなければならないのは，移住者の出身地と定着させられる地方または地域の間の生態的及び文化的諸条件間の或る種の類似性または相似性を利用することである。

現在の移住政策では，役に立たない植民者は入国を認められない。肉体的及び精神的健康状態が悪く，全面的または部分的に労働が不能なものである。受入国もまた指導及び援護の義務を手抜きしない。

ブラジルに於ては，移住植民者を定着させる仕事が，連邦の範囲では，往時は外務省を通じて，また，今日廃止されている移植民院（ＩＮＩＣ），農業振興院（ＩＮＤＡ），農地改革院（ＩＢＲＡ），これ等は最近植民農地改革院（ＩＮＣＲＡ）に吸収された，を通じて，州の範囲では，州農務局及び土地分譲・植民会社（ＣＲＣ）—

夫々バイア州及びペルナンブコ州の場合の如く一の犠牲において行われた外，外来人を地域社会に正しく同化させようと云う関心も存在している。このような状況においては，入植地が文化的に同化不能な異体になること，または人種的少数集団として孤立することを防ぐことである。(注8) いずれの場合でも，ブラジルの政治的統一のみならず，第二次世界大戦中に起ったように，領土保全自体を危険にさらすものである。第二次世界大戦の際，ブラジルは，ドイツ人及びイタリア人移民社会があたかもドイツまたはイタリアに在るが如く生活するのを無邪気にも認めた。ドイツ人移民社会に於て，それはより顕著に起った。同化せず，ブラジル文化の系譜に統合しなかった。ジルベルト・フレイレが適切に描いたように(注9)，ブラジル文化から離れて挑戦的なまでにヨーロッパ風の生活を守って，抵抗力のある同化不能な固い塊或は異体として，社会から外れて居た。母国語のみを話し，ドイツ人移民社会で生じたように，ドイツ語で新聞，雑誌を発行し，使う言語はドイツ語，教科内容，授業方式，教育規範は全くドイツ式の学校を維持し，出身国の文化，価値及び象徴一例えば国旗及び国歌一の標準を保持し，ブラジルの国歌及び国旗すらも採用せず，屢々敬意すら払わなかった。

1939年から1945年の第二次世界大戦中，サンタ・カタリーナ州のドイツ人入植移住地は，その前は潜在的な危険であったが，ブラジルにとり極めて有害な現実となった。広範且つ活発なスパイ網に組織化され，直接活動したのみならず，間接的にブラジル人の間にナチ・ファシズムに対する敬服と熱意を持った帰依者を作り，その構成員がブラジル国民と云う仮面の下に変装しているため，見付け出すことが困難な国内戦線を形成し発展させることを許すこととなった。祖国自体の内部で自国民と混同されるこの型の敵に対し，民衆の世論は，スペインに於てフランコ独裁体制樹立の際起きたと同じ様に「第五列」の名を付けた。(注10)

ブラジルの現在の移住政策は一医師，衛生技師，人類学者，社会学者，統計学者，人口学者，経済学者，地理学者，各種の専門分野の技術者の協力を得て問題を解決することを期待して一移住者を，単にその経済的価値一そのこと自体かなり意味のある様相である一即ち生産力として発展する可能性を有する資本に移住者を変えることができるものとしてのみ考えるのではなく，また，ゆっくりしたものであっても常に前進する同化の過程で，移住者の心理社会的統合の条件を考慮に入れ，同化

する能力を念頭に置いている。要するに，移住者のブラジル化の可能性を評価するのである。

今日ブラジルに於ては，移住政策は入植地制度の下で，外国人の同化を主要且つ必須の目的と見做している。少なくとも，混合した形で，あれをとり，これをやる形で，各種の影響力の混合が特徴である形で，外来文化の価値ある要素を疎略にせず，土着の要素が優位を占めるブラジル下位文化を形成することである。

そのためには，外国人が自発的に来ようと計画移住の規範に従っていようと，都市部へであろうと農村部へであろうと問題ではない。

ブラジル当局には移住者に広範な援護を供与する責務がある。このようにすれば，気候的適応に必要な当初の仕事はより容易になる。出身地とブラジルで住居を定めようとする地域との間にたまたま存在する生態的・文化的類似性によって適応は容易となる。それ故，移住者の出身地を知ることは重要である。かかる作業は心理社会的同化を容認するのみならず著しくその過程を短縮する。

外国人を同化し，ブラジルの経済発展のための協力要素となすのみならず，また社会に編入することにより，あらゆるブラジル社会・文化活動に誠実に参加することにより有益な要員となるようにすることが，現在のブラジルの移住政策の大きな関心事をなすものである。(注11)

移住者は，ブラジルに於て同化しようと云う善意と決意を有するならば，他の国では殆んど出会うことのない可能性を見出すのである。ブラジルでは色の偏見なしに，人種的差別の問題なしに，アパルトヘイトなしに，人種隔離政策なしに，白人，黒人，黄色人，あらゆる色合いの混血人が，経済的にまた社会・文化的に向上する同等の機会を有して民主的に生活している。開発及び利用のため，殆んど無尽蔵の植物，動物，鉱物の天然資源の世界が，或る場合には未だ手を付けられずに，手の届くところにある。このように，進歩と発展の手段として移住を利用しようとする諸国と対比して，ブラジルは凌駕されない且つ匹敵すらされない国である。その受容性は，奥地開発の政策が，職業活動の選択の範囲を広範に提供するように実施されているため，今や拡大しつつある。

ブラジルの広大な領土自体，種々の気候，乾燥地帯と湿潤地帯，高地地域と低地地域，大きな峡谷，高原及び平原，広大な海岸地帯，鬱蒼たる森，大きな草木の殆

んど無い原野(注12)を含んで，外国人に生態的により適した場所を指示して，気候地理的適応を容易にするため，移住政策の成功に有利な要素となっている。能力や性向を出身地に関連した条件として，やろうとする仕事の種類及び適応過程において注意深く活用しなければならない。

このような状況において，正直に働く移住者は，心よく受入れてくれるブラジルのような国に於て，普通の人間的野心を構成するもの，即ち機会が同じであり，全ての人が生活，労働，向上の同じ可能性を有する平等主義体制の内で，社会的，経済的安穏，平和，幸福を獲得することができる。

移住政策が，その目的を十分に実現したと見做されるためには，国内的にもまた国際的にも関心のある対策が実施されなければならない。

近年には，移住者がより楽に適応すると思われる場所へ移住者を誘導するのを容易にするような措置が採られた。かくして，移住者の適応努力を助ける就業先を確保する。都市の工業に予定されている外国人についてもまた農業地帯の農業労働に定着しようとする外国人についてもである。かかる措置は，同化しようとする努力を最大限に配慮し，移住者が入り込んだ地域社会に正しく適合するようにさせる。

受入を容易にする税関法規の改正を行い，移住者は或る種の要件を免除されるようにした。かくて，移住者は，身廻り品の外，就こうとする活動により農機具その他を，普通徴収される税を免除されて持込むことが許された。

人間的接近—これは混血及び同化を促進する—に伴う諸問題は，マヌエル・ディエゲス・ジュニオールが指摘した如く，ブラジルの研究者達の関心の対象であったことを想起する価値がある。(注13)彼はこの事実に対し，その一般的な面のみならず，特に移住に関係する点に注意を喚起した。ブラジルに於ては，理論的或は方法論的面のみならず適用面或は実際面に興味がある。(注14)このような状況において，関連ある労作を列挙する価値がある。これ等の中，バストス・デ・アビラ神父の著書のブラジルに於ける移住に関する第三部第一章がある。(注15)本世紀の20年代以来，ブラジルに於ける移住問題は，その生物学的のみならず政治・文化的な各種の関連の面で，ブラジル研究者の真剣な検討の対象となっていた。時々ブラジルに於ける外国人の存在の有益性または有害性につき，一般的にまた特に日本人につき人種及び文化の接触を考慮して論争が起った。この点に関しては，ブラジルの二人の人類学研

究の先駆者を特記することが適当である。ロケット・ピントは混血を弁護し，云われるところの害悪は人種的要素からではなく，交配した劣性遺伝子から生ずるものであることを指摘した。オリベイラ・ビアンナは混血を非難し，混血の結果生れる産物の退化に混血が無条件に責任があると判断した。(注16)

第1表　主要港，空港及び監視所別入国移住者百分率
ブラジル1954年—1959年（低減順）

摘要	年					
	1954	1955	1956	1957	1958	1959
サントス	59.84	59.89	63.04	57.64	57.13	61.28
リオ・デ・ジャネイロ	35.52	35.43	31.99	36.28	35.64	31.51
サン・パウロ	0.96	1.46	1.65	1.83	2.85	3.26
ベレン	2.36	1.78	1.23	1.93	1.35	1.21
レシフェ	0.55	0.42	0.77	0.73	0.80	0.88
サルバドール	0.41	0.42	0.73	0.60	0.43	0.58
リオ・グランデ	0.06	0.17	0.04	0.58	0.52	0.57
その他	0.30	0.44	0.55	0.41	1.30	0.71
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

出所 INIC

第2表　ブラジル入国移住者主要国籍及び主要特徴
（性及び家族構成）別（1959年）

国籍	総計	性別		家族構成		
		男	女	家長	扶養家族	単身
ドイツ	890	449	441	139	291	460
中国	537	365	172	75	200	262
スペイン	6,712	4,084	2,628	1,056	1,997	3,659
フランス	475	234	241	91	212	172
ギリシャ	751	468	283	106	214	431
イギリス	431	236	195	82	186	163
イスラエル	493	269	224	112	245	136
イタリア	4,233	2,467	1,766	722	1,466	2,045
日本	7,123	4,181	2,942	1,128	4,689	1,306

出所 INIC

第3表　ブラジル入国移住者，主要国籍別及び主要特徴
（年令層）別（1959年）

国籍	総計	年令層					
		0－6	7－11	12－17	18－59	60以上	申告洩
ドイツ	890	95	39	33	671	52	—
中国	537	64	63	28	375	7	—
スペイン	6,712	676	391	560	4,897	218	—
フランス	475	82	54	21	288	30	—
ギリシャ	751	44	39	44	572	52	—
イギリス	431	66	29	17	305	14	—
イスラエル	493	58	44	45	317	29	—
イタリア	4,233	374	281	317	3,035	226	—
日本	7,123	1,055	1,041	696	4,171	160	—
ジョルダン	402	10	3	28	360	1	—
レバノン	1,061	93	76	119	731	42	—
米国	1,462	334	115	97	873	43	—
ポルトガル	17,345	2,055	1,552	2,415	10,771	551	1
その他(1)	2,605	323	192	172	1,753	162	3
合計	44,520	5,299	3,919	4,592	29,119	1,587	4

出所　INIC
(1)　無国籍者を含む。

第4表　ブラジル入国移住者，主要国籍別及び主要特徴
（配偶関係）別（1959年）

国籍	総計	配偶関係				
		独身	既婚	死別	離別	申告洩
ドイツ	890	472	391	18	9	—
中国	537	250	279	8	—	—
スペイン	6,712	3,911	2,595	203	2	—
フランス	475	224	231	18	2	—
ギリシャ	751	472	246	21	2	—
イギリス	431	196	220	12	3	—
イスラエル	493	216	243	30	4	—

国籍	総計	配偶関係				
		独身	既婚	死別	離別	申告洩
イタリア	4,233	2,444	1,626	158	5	—
日本	7,123	4,551	2,422	150	—	—
ジョルダン	402	245	156	1	—	—
レバノン	1,061	681	342	38	—	—
米国	1,462	699	735	22	3	3
ポルトガル	17,345	10,944	5,889	479	32	1
その他(1)	2,605	1,346	1,148	89	18	4
合計	44,520	26,651	16,523	1,257	80	9

出所 INIC
(1) 無国籍者を含む。

第5表 ブラジル入国移住者，主要国籍別及び主要特徴（年令層及び識字化）別（1959年）

国籍	総計	年令層（満年令）			識字化 (1)	
		0－6	7－11	12才以上(2)	読めず	読める
ドイツ	890	95	39	756	102	788
中国	537	64	63	410	97	440
スペイン	6,712	646	391	5,675	1,038	5,674
フランス	475	82	54	339	95	380
ギリシャ	751	44	39	668	63	688
イギリス	431	66	29	336	67	364
イスラエル	493	58	44	391	73	420
イタリア	4,233	374	281	3,578	554	3,679
日本	7,123	1,055	1,041	5,027	1,590	5,533
ジョルダン	402	10	3	389	29	373
レバノン	1,061	93	76	892	209	852
米国	1,462	334	115	1,013	350	1,112
ポルトガル	17,345	2,055	1,552	13,738	3,672	13,673
その他(3)	2,605	323	192	2,090	399	2,206
合計	44,520	5,299	3,919	35,302	8,338	36,182

出所 INIC
(1) 全ての年令の児童を含む。
(2) 申告洩れを含む。
(3) 無国籍者を含む。

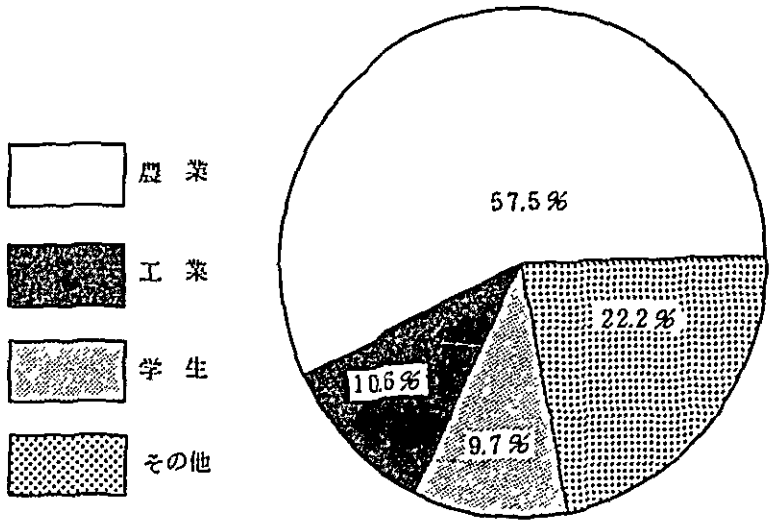
第6表　ブラジル入国移住者，主要国籍別及ば主要特徴（職業）別（1959年）

国籍	総計	職業別							
		農業者		工場労働者		技能者	家事	商業	その他
		一般	有資格	一般	熟練				
ドイツ	890	3	2	23	83	90	440	103	146
中国	537	45	—	12	95	8	285	67	25
スペイン	6,712	454	19	126	2,377	49	3,152	141	394
フランス	475	7	—	5	24	55	288	25	71
ギリシャ	751	21	—	33	276	9	368	17	27
イギリス	431	1	1	—	18	68	221	32	90
イスラエル	493	7	—	12	104	11	294	22	43
イタリア	4,233	233	15	316	1,052	93	2,071	87	366
日本	7,123	6,305	—	6	32	72	618	63	27
ジョルダン	402	362	—	1	10	—	28	1	—
レバノン	1,061	196	—	4	279	8	499	36	39
米国	1,462	1	—	9	34	156	930	94	238
ポルトガル	17,345	1,300	8	652	1,179	8	10,362	2,679	1,157
その他(1)	2,605	273	1	40	242	163	1,291	208	387
合計	44,520	9,208	46	1,239	5,805	790	20,847	3,575	3,010

出所　INIC

(1)　無国籍者を含む。

日本で営んでいた活動



第7表　ブラジル入国移住者，主要国籍別及び主要特徴（入国条件）別（1959年）

国籍	総計	入国の特徴	
		計画移住	自発移住
ドイツ	890	20	870
中国	537	—	537
スペイン	6,712	2,196	4,516
フランス	475	—	475
ギリシャ	751	475	276
イギリス	431	1	430
イスラエル	493	1	492
イタリア	4,233	3,149	1,084
日本	7,123	807	6,316
ジョルダン	402	—	402
レバノン	1,061	1	1,060
米国	1,462	—	1,462
ポルトガル	17,345	5	17,340
その他 (1)	2,605	167	2,438
合計	44,520	6,822	37,698

出所・INIC
(1) 無国籍者を含む。

第8表　ブラジル入国移住者主要特徴別摘要
（1959年）

摘　　要	移　住　者	
	数	%
総　　数	44,520	100
性　　別		
男	25,293	56.81
女	19,227	43.19
年令層別		
0 — 6	5,299	11.90
7 — 11	3,919	8.80
12 — 17	4,592	10.31
18 — 59	29,119	65.42
60 以上	1,587	3.56
申告洩	4	0.01
配偶関係別		
独身	26,651	59.87
既婚	16,523	37.11
死別	1,257	2.82
離別	80	0.18
申告洩	9	0.02
職業別		
農業者	9,208	20.68
有資格農業者	46	0.10
熟練工	5,805	13.04
一般工場労働者	1,239	2.78
技能者	790	1.77
家事	20,847	46.48
商工業	3,575	8.03
その他	3,010	6.76
家族構成別		
家長	7,390	16.60
扶養家族	18,329	41.17
単身	18,801	42.23

出所 INIC

第9表　移住者国籍別総摘要

（1959年）

国籍	移住者数	国籍	移住者数	国籍	移住者数
ドイツ	890	グアテマラ	2	米国	1,462
アラブ	11	オランダ	255	ノルエー	37
アルゼンティン	247	ホンジュラス	1	パナマ	3
オーストラリア	10	ハンガリー	34	パキスタン	1
オーストリア	69	インド	4	パラグアイ	40
ベルギー	63	インドネシア	52	ペルー	8
ボリビア	78	イギリス	431	ポーランド	120
ブルガリア	4	イラン	56	ポルトガル	17,345
カナダ	83	イラク	8	ルーマニア	31
チリー	52	アイルランド	19	サルバドル	1
中国	537	イスラエル	493	シリア	103
コロンビア	16	イタリア	4,233	スェーデン	72
コスタリカ	1	ユーゴスラビア	61	スイス	157
キューバ	17	日本	7,123	南アフリカ	16
デンマーク	46	ジョルダン	402	チェコスロバキア	5
ドミニカ	2	レバノン	1,601	チュニジア	12
エジプト	42	リビア	2	トルコ	15
エクアドル	4	リヒテンシュタイン	1	ウルグアイ	101
スペイン	6,712	ルクセンブルグ	4	ベネズェラ	40
フインランド	22	モロッコ	11	ベトナム	1
フランス	475	メキシコ	6	無国籍	6
ギリシャ	751	ニュージーランド	7	不明	537

出所　INIC

2. ブラジルに於ける日本人移住

北アメリカ—ハワイ諸島，米国及びカナダ—に於ける移住は，1866年に非合法且つ無秩序に始まり，ハワイでは3年後に公式になり，米国へと続けられ，1880年以後日本人労働者の入国が—カナダを含めて—活発になり始めたとは云え，南米に於ては，日本人の到来は1899年に始まった。丁度，米国及びハワイ諸島への移住の流れが激しいときであった。南米で最初に日本人を受入れた国はペルーであった。

日本人移住の流れが南米，特にブラジルを目指した時，日本にはこの面で長い経験が既にあったことは確かである。(注17)

南米向け移住は，米国の日本人移住に対する統制政策が徐徐に強化され，東洋人に門戸を閉め，1924年「排除法」で完全に閉鎖されるに到ったとき，大きくなった。(注18)

後年，米国の考え方は移住に対して変って来た。移住全般について変った。例えば，1947年，新聞の論文で，ロバート・カーサーは，ニューヨーク社会研究所社会学部長ヘンリー・ミラー博士の科学的報告に基づき，次の通り書いている。「……全ての国（アメリカ諸国を指している）に於て，為政者は，外国人の移住は国内経済を弱体化し，国家としての政治的独立性を危殆に瀕せしめ，自国労働者の生活水準を低下させ，または自国労働者を就業先から追い出すと云う古いスローガンは時代後れの反対の結果を生ずる偏見と考えるようになりつつあるように見える。」次いで，前記社会学者に依拠して，同記者は次のように続けている。「移住者が定着した場所は，国内で最も豊かになるに到ったことを州は保証している。報告は外国人の比率が最も高い10州は，比率の最も低い10州の数倍の1人当り所得を有していると指摘している。」(注19)

日本人移住の動きの完全な展望を得るためには，明治時代（1868年—1912年）の幕明けを印し，日本歴史の現代期を始めた「1868年以降日本で起った工業化，都市化の全体像」を考慮に入れる必要があるとフランシスカ・イザベル・シュリグ・ビエイラ女史が言明するのはもっともである。この新時代とともに，1600年から1868年まで続いた所謂「鎖国時代」は終った。(注20)

同化及び心理文化的統合過程に対する日本人の云われている抵抗については，文化的のみならず人種的差異とともに—この点についてのT・リン・スミスの考察(注21)は公正である—ブラジルに於ける日本人移住の歴史を研究する者に相当の注意を要求する。

斎藤広志(注22)は，米国及びハワイ諸島に於ける日本人移住の流れとペルーに向った流れとを比較し，種々類似点を見出している。類似点の一つは，移住の一時的な性格である。移住は，家族と離れた単身者の犠牲により甘蔗及び棉花の大農園の賃金労働者として，肉体労働により金を貯める目的をもって行われたことである。更に，日本人は中国人労働者—苦力—の代りであった。中国人労働者は，ペルー政府の差別政策のため移住者として続けることを阻止されたのであった。(注23)

ブラジルに於ける日本人移住は，1908年に始まった。最初の日本人達は笠戸丸に乗船して，6月18日にサントス港に到着したのである。新移住者は，農作業の知識及び農村生活に適応した習慣を持っているのが主なる特色であった。ブラジルは，彼等の内にイタリア人に代り得る労働力を見た。イタリア人は一時的移住者のタイプを最も良く代表していた。所謂「渡り鳥」は，東洋に於ては日本人がそのように見做されていたが，ブラジルに於ては，わが国の移住政策の規範に適合せざるを得なかった。重大な経済危機から立直ったばかりのコーヒー園主にとって，日本人はコーヒー農業に最も適合する労働者であった。(注24)この最初の集団は，165家族で，斎藤によれば，契約移住者781人と自由移住者12人，総計793人であった。マリア・アメリア・グァラシァーバ尼は，1908年6月18日笠戸丸でブラジルに入った日本人先駆者は779人であったと云い(注25)，リン・スミスは800人と計算している。(注26)この移住を規制する契約は，1907年11月6日サン・パウロ市に於て，皇国殖民会社社長水野龍とサン・パウロ州農務長官カルロス・ボテリョ間で署名締結されていた。サン・パウロ州政府は，その移住会社を通じて船賃の一部を負担した。(注27)

前記契約には，3年間に契約労働者（コロノ）の条件で，3,000人，即ち年平均1,000人の送付が含まれていた。これは，実際上，具体的な成果のあったブラジルに於ける日本人移住の最初の試みであった。その前に，1894年に，吉佐移民会社—日本の最初の移民会社—はサン・パウロのブラード・ジョルダン社と日本人労働者をサン・パウロに導入する話し合を行った。(注28)この動きは，友好条約或はブラジル

と日本間に外交関係が無いため不成功に終わった。

斎藤は，「1895年日本とブラジル間に修好通商航海条約が調印され，正常な関係が樹立され，それとともに移住の可能性が開かれた。」と書いている。(注29)

プラード・ジョルダン社との交渉が再開され，吉佐移民会社は取極に従い，20才から35才間の農村労働者を送ることを約束し，第一陣は1,500人から2,000人であった。吉佐移民会社は，東洋移民会社に引継がれ，同社は契約に定める人数の全数の募集を早速始めた。

思わぬコーヒー価格の下落により，サン・パウロに経済危機が起り，プラード・ジョルダン社は契約を破棄するに到った。

同じ目的をもって，他の試みが行われたが同様成果が無かった。例えば，1897年及び1901年である。

1908年以降，ブラジルに来た日本人移住者は，ペルー及びハワイ諸島に向った者と目的に関しては或る面で類似していた。短期間の滞在を希望し，手取り早い成功と祖国への帰国計画を夢見ていた。しかしながら，状況はブラジルに於て同じには見えなかった。ブラジルの賃金水準は遥かに低かった。事態をさらに悪くしたのは，移住者が家族を構成して来ることをブラジルが要求したことである。

1897年から1900年迄続いたコーヒーの危機が克服されると，サン・パウロ洲の農園主達は日本人コロノを農作に使うことに強い関心を示した。この時期，イタリア人移住者の流れが止まっていたと云うことを想起する価値がある。

当時の在ブラジル日本全権公使杉村（濬）は，1905年の報告書で，当時の繁栄するコーヒー状勢と日本人コロノの導入の可能性を強調した。

同報告書の次の一節は転載の価値がある。

「イタリア人コロノの移住の停止の結果，サン・パウロ州は労働力の深刻な不足に直面している。サン・パウロ州政府も農園主一般もわが国労働者を受入れることに関心を示している。従って，わが国移住者をこの州に導入することは，迫害が増大している米国に送るよりも遥かに興味があり且つ望ましいと信ずる。勿論旅費は，米国に比べ，距離が遠いため，より多くかかるであろう。幸いに，サン・パウロ州政府は，船賃を全部または一部補助しようと申し出て居り，これは或る程度，前記の不利を相殺するものである。オーストラリアで入国を禁止され，米国で差別され，

カナダで迫害され，今やハワイ諸島及び太平洋の諸島で制限され，わが国労働者は，サン・パウロ州に於て稀れな幸福と真の楽園を見出すであろう。」(注30)

1906年及び1907年の間に，20人以上の日本人が色々な目的に動かされてブラジルに来た。その一人が水野龍であった。彼はブラジルへの移住者の第一陣（1908年6月18日）を連れて来た皇国植民会社の創立者であった。

水野は，日本に帰って，報告書に次の通り書いている。「サン・パウロ州政府はヨーロッパ人コロノと全く同じ条件で，日本人労働者に対し全ての保証と保護を与えるであろう。更に，独身移住者に対し補助を保証している。他方，ヨーロッパ人に対してはこの補助は与えられていない。」(注31)

日本人の近代農業技術の知識及び農村慣習は，このタイプの移住者をブラジルの様な広大な領土と農業の将来性の大きい国の必要にとりかなり有利なものたらしめた。

1908年から1914年まで，合計10陣のブラジルに対する日本人移住は正常に進行し，移住者が最も多かったのは1913年，1,775家族，6,946人であった。

1908年6月18日の第一陣の日本人コロノはアルタ・モジアナ地方のコーヒー園に配耕された。これ等農園中，デュモン，フロレスタ，グァタパラ，カナアン・デ・サン・マルチーニョを特記する価値がある。特別に選ばれた若干のコーヒー園に配耕することにより，政府は新移住者の適応の状態を追跡することが容易であり，同時にその導入の難点と利点をより良く観察することができる訳である。(注32)

1910年6月28日旅順丸で，日本人移住者の第二陣がサントス港に到着した。467家族，総計906人であった。1912年から1914年までさらに八隻の日本船が13,289人を乗せてサントス港に入港した。日本人移住者は，サン・パウロ州政府の補助を受けたコロノとしてやって来た。

コーヒー農園に定着するのに困難を示さなかったヨーロッパ人コロノに日本人は匹敵することはできなかった。(注33)それ故，サン・パウロ州政府は契約の履行を停止する決定をした。かくして，ブラジルに対する日本からの移住の流れは事実上止まってしまった。

停止の約2年後，日本の移住会社は合同し，ブラジル移民組合を結成し，サン・パウロ州政府と若干の交渉を行った後，新しい免許を獲得した。それは，1917年

から4年乃至5年の期限で，4,000人乃至5,000人の移住者の入国を目的とし，補助金支払の条件は同じであった。(注34)

新しい契約とともに，1917年に海外興業会社（KKK）が生れ，ブラジルに対する日本人移住の独占をほぼ達成した。ブラジルを目的地とする移住政策は，日本政府の正式の認証を受け始めた。この会社は，移住者に援護を与えることを，また，募集及び配置を行うことを目的としていた。

サン・パウロ州政府から土地の譲度を受け，リベイラ・デ・イグァペ河岸に開拓が始められ，今日ジポラバとなっている。更に，開拓は，レジストロ，セッチ・バーラス，キロンボ，ジュケラ等に延びて行った。この地域にブラジルに於ける日本人入植移住地の最も大きな一つが出現した。(注35)

第一次世界大戦の終了とともに，1920年になって，コーヒー園の必要を満たすためにヨーロッパ人労働省の渡来が困難であったので，サン・パウロ州政府は契約を更新するかどうか決断がつかなかった。日本人達が一ケ所に定着しないこと及び適応が困難なことが特徴であった。更に，契約を更新しない理由を知ろうとしていた日本国総領事に対する回答に於て，サン・パウロ州農務長官が説明したところによれば，日本人コロノは金銭的手段を有し，ほぼ一年後には独立することができるので，一人当り17ポンドの補助を与えても合わない。他方同じ金額がヨーロッパ人コロノ（ポルトガル人，スペイン人その他）に対してはより長期について与えられていると云うことであった。(注36)

海外興業の強い要請に鑑み，サン・パウロ州政府は，1920年に3,000人，1921年に600人の移住者に補助を与えることを決定した。この時（1921年）以降免許は完全に取消されてしまった。

1925年，日本政府は，日本に重大な結果をもたらすこの問題を解決するため，移住する労働者に補助を与えるようになった

1925年から1935年の期間は，ブラジルに対する日本人移住が最も集中した時期であったと見做すことができる。この11年間に在サン・パウロ日本国総領事館が記録した統計(注37)によると，139,059人の日本人がブラジルに入国した。この期間中で，1933年が抽んでており，その年24,494人の日本人がブラジルに入国した。

移住者に補助を与えると云う日本政府のこの決定は，ブラジルに於ける日本人移

住を増加させた。今回は，主導権は消極的移住政策を積極的政策に代えた日本政府に移った。これ以後，ブラジルは，日本の過剰人口の一部を吸収することのできる移住労働者の目的国に過ぎないものでなくなり，投資市場としてもまた考えられるようになった。(注38)

1908年から1925年—この年日本政府が補助の責任を引受けた—の期間は，ブラジルに於ける日本人移住の歴史に於て，試験期間または第一期と呼ばれるものである。

第二期は，1926年から1941年の15年間続いたが，補助を引受けた日本の介入が特徴であった。この期間において，最も移住の集中した年は1928年から1934年であった。この時から，制定された割当制にともなう制限の外，第二次世界大戦が押しつける諸困難が続いて起って来た。

ブラジルに於ける日本人移住の第二期に含まれた1928年—1934年の時期の重要性を種々の事実が示している。その中には，海外興業の責任の下にコロノを配置することの外，日本政府が与える財政的支持がある。そのため，1927年若干の組合が創立された。各県に海外協会ができ，中央機関として「海外協会連合会」またの名を「海外移住組合連合会」と云うのが東京に本部を置いてできた。サン・パウロにその代理者として支部「ブラジル拓植組合」（ブラ拓）が出現した。

このような団体に，農業コロノの募集及び配置の責任があった。1928年から，サン・パウロ州及びパラナ州に於て大きな面積の土地がブラ拓の主導の下に農業植民地創設のため購入された。これ等の中には，バストス移住地（アルタ・パウリスタ地方），チエラ移住地（ペレイラ・バレトス郡）（ノロエステ線），アリアンサ移住地（ミランドポリス郡）（ノロエステ線）及びトレス・バラス移住地（アサイ郡）（北パラナ）があり，これ等は日本人コロニア発展の重要な中心となった。

農牧部門に於ける公的投資と並んで，私企業もブラジルに移動した。このような状況の下で，いくつかのコーヒー園が創られた。

南米拓植会社の創立は，パラ州政府から譲渡された土地に，1929年始まったアマゾン地方での日本人入植の基礎として役立った。アカラ，モンテ・アレグレ及びカスタニャルの3入植地が早速出現した。

もう一つの会社，アマゾン興業株式会社は，1928年創立され，土地の譲渡を得

て，アマゾナス州マウエスの開拓が始められた。その他の入植地が生れつつあったが，その中には，1930年パリンチンス（アマゾナス州）に作られた高拓（高等拓植学校）移住地があった。

1930年から，日本人はアマゾンに資本を投資するようになった。この頃には，第一期に入国した移住者は既に経済的に独立して居た。コーヒー及び棉花の栽培に従事していた。それは主としてサン・パウロ州で生じていた。商業及び工業部門は日本人資本の投資の対象となった。少しづつ，ブラジルと日本間の経済関係は発展して来た。繊維を日本に輸出するお陰で棉花栽培は，借地人として行動するコロノを通じて非常な発展をした。

日本の繊維工業企業は，棉花の精製及び輸出のため，1936年からブラジルに精綿工場を設置しつつあった。

1934年に制憲議会は，二分制限法と呼ばれた法案を可決したが，この法律は日本が「反日的」と見做したもので，割当制を通じて，ブラジルへの移住者の入国を制限することを目的とし，日本人の場合，年2,849人となった。(注39)

第二次世界大戦とともに日本人移住は完全に崩壊し，1953年から再開されたに過ぎない。(注40)

戦後の日本人移住者の間には，配置の方式を考慮に入れると二つの主要な種類が見出される。農業コロノと労働者である。夫々の比率が完全に変化した。戦前は，後者は4％以下と云う重要性のないもので，前者は96％であった。戦後は，後者が56.4％，前者が43.6％と云う割合になった。

1973年に新聞が報じた統計によると，日本人及び2世を合せ約70万人の日本起原の人がブラジルに居り，三分の二以上がサン・パウロ州に住んで居り，近年日本人の入国は益々増加している。(注41)ついでに云えば，全ての人が耕したり，商売したり或は工業家として定住する訳ではなく，単に観光旅行者の資格で入国する者もある。日本人が求める国はブラジルだけではないことを指摘することは適切であろう。北米やヨーロッパもまたそうである。軍事的敗北後，40年足らずで日本は米国に対する工業製品の最も強力な輸出国の一つとなった。ヨーロッパに於ては，日本人観光旅行者は強い通貨収入の大きな源泉となっている。

第10表　1962年—1971年間に永住資格で入国した日本人移住者

1962年	1965年	1968年	1971年	合　計
3,257	903	597	260	5,017

第11表　1965年—1971年間に帰化した日本人

1965年	1968年	1970年	1971年	合　計
570	249	215	735	1,769

出所　地理統計院，ブラジル統計概要，1972年版

3. 東北ブラジル農業に於ける日本人

3.1 現在まで未調査の題材を開拓する調査

色々な面で魅力のあるこの調査は，ジョアキン・ナブーコ社会調査研究所運営理事会会長たる社会・人類学者ジルベルト・フレイレの示唆の結果である。彼は，その知識と経験をもって，実地調査で集めた具体的資料を基礎とした社会調査を特に目的とするこの機関の研究員を元気づけ刺激するのである。

南米諸国に対する日本人移住は19世紀末に始まり，1894年頃にはサン・パウロ州に日本人労働者を導入しようとする試みが失敗したことがあるとは云え，1908年に至ってようやく受入国と送出国間の取極の結果，日本人移住者の第一陣がブラジルに到着し，サン・パウロ州がこれを受入れることになった。(注42)

一般的に云ってブラジルに於ける，また特にサン・パウロ州に於ける日本人に関する文献目録は，人類学者，社会学者，歴史家，人口学者，経済学者，政治家，農業技師，生物学者，人文学者の調査研究を含め，広範である。一応の概念を得るためには，サン・パウロ人文科学研究所が，1967年発行した「ブラジルに於ける日本人及びその子孫」（解説付文献目録）と云う本を一瞥すれば充分である。同書には，雑誌及び新聞の記事を除いて，658の出版物が登録されている。(注43)

このような出版物の内には，日本人を非難するもの一相変らずの「黄禍」論に過ぎない一のかたわら，日本人の存在を擁護する出版物がある。その著者達は，ほぼ常に客観的に，時にやゝ印象派的であるとはいえ，日本人は科学及び技術の色々な分野での経験，それは大部分地理的情況一文化の刺激要素一自体の結果を有し，ブラジル人に有益であるべきであると見ている。農業及び牧畜に関連する科学的，技術的経験は有益である。特に農業に関連しては，一般に養鶏を組合せている。稀れにしか現れないが，養蚕を，また，日本人が特に優れていることを示す養魚を除外することはできない。

さらに近年には，日本人は工業を指向して来たが，工業の内には，厳密に電子の分野のみならず光学工業，動力学的産業を含み，また所謂大型重工業，例えば造船をも忘れずに含んでいる。(注44)

ブラジルの南部のみならず東北部においても日本人が従事して反響を呼んでいる専門分野，食養生法を想起することもまた適当である。日本の食餌を基礎とし，日本人の料理長が調理を指導する日本の食物を専門としてブラジル国内に広がっているレストランの数は少くない。この食餌療法式料理は，今日ブラジルで流行している自然食食事法と適合するものである。

医学に於ても，また，日本人は単に有能な職業人であるのみならず，立派な科学者であることを示し，科学者として熱帯病の研究に於て頭角を現わしている。

「信仰の国」と見られている日本は，自然に対する崇拝にその驚くべき精神力を集中している。

自然の色々な面を常に現わしている絵画及び版画に於て，日本人の魂は素晴しい感受性を示している。物の変りやすい色合い，動きやすい霧，月の反照，雪の輝き，短い期間の開花，動物の生活，人の態度や身振り，これ等全てが不安定な，変り易い形で現れ，日本の民衆の心に殆んど神秘的ともいえる鑑賞の対象となる。(注45)

移ろいの哲学を体現する仏教に，日本人は宇宙の生命の一瞬を楽しむインスピレーションを見出していることは疑いない。西洋人以上に自然をより深く且つ激しく感じているように見える。日本人の間には，多神論はより大きく浸透しているように見える。(注46)

第二次世界大戦後，西洋の生活の習慣，慣行，風習，様式に適応したとはいえ，なお自然に対する愛を，自国外でも保持している。特にブラジルの自然のようなさまざまな，豊かな，異なった，多様な形態と色彩の面を持った自然に対する愛がある。

そこから，大規模工業に使用される高度の技術のかたわら，日本人移住者が，受入国，特に自然の資源が溢れるばかりに豊かなブラジルのような国において，農業労働に引き付けられる理由がある。

一般的に南部での，そして，主としてサン・パウロ州及びパラナ州の日本人に焦点を置いた研究及び調査は，その著作者が，直接且つ或る程度参加して観察し，或いは質問票を通じて，また，面接質問を行って集めた資料を分析，解釈していることを考えると，主観的要素をできる限り離れているその結論が正確である点で貴重である。文献目録は，この点において，指摘した如く，その重要性においてもその量におい

ても優れている。

サン・パウロ市は，ブラジルに於ける日本人労働力の殆んど全部を吸収していた。茶，コーヒー及び棉花栽培に於て日本人は優れた労働力であった。養蚕についてはいうまでもない。サン・パウロ州は経済発展するのに有利な農業を基礎とした条件を提供した。特に，日本人のような優れた労働力を有していた。ブラジルに居る日本人の75％はサン・パウロ州に居た。(注47)

パラナ州に20％が，残りの5％がマット・グロッソ州，ミナス・ゼェラエス州，リオ・デ・ジャネイロ州，グァナバラ州及びアマゾンに居た。

現在，この分布比率は変っている。一部には，日本人の数が新移住者の到着により近年増加したこと，他方では，南部の農業入植地のような年数はないが，日本人が移住の勘定の内で重きをなし始めた東北伯が計算に入っていなかった。(注48)

東北伯に於ては，農村人口の内に日本人が顔を出すようになったのは，40年代からである。日本人は，援護を与える任務を有する機関の監督の下に，農業入植地に集団していたことは指摘する価値がある。これ等の機関は，廃止された移植民院（INIC），特にブラジル日本人植民部（SCJB），各州農務局，土地分譲・植民会社（CRC），農業振興院（INDA）であり，また農地改革院（IBRA）であり，最近は植民農地改革院（INCRA）である。これは，最後の二機関を吸収したものであった。援護機関の保証を得て，銀行融資のお蔭で，コロノは，中・長期支払で，土地を購入した。金融的援助の外，技術的援助もまた受けた。これら援助のみならず，教育及び医療・衛生の援助を受けた。本調査では，個々に移住する日本人は，二次的にしか関心がなかった。彼等は，殆んど常に商業及び工業活動に従事するが，時には公務員になったり，または領事館に勤めたりした。或る時は，自由職業に従事し，あるいは自国政府の派遣者として，外交或いは準外交の業務，例えば文化担当官または商務官の公務についた。

現在まで，東北伯，特に農村部，人口における日本人の存在は，全く初めての研究題目である。この題目に興味を持つ研究者は，文献情報により何等直接助けを受けることはできない。文献は殆んど皆無であり，僅かに人類学者ベリシモ・デ・メーロの研究論文(注49) の例外がある。その内に，短いが示唆に豊んだリオ・グランデ・ド・ノルテ州ニジア・フロレスタ郡（元のパパリ郡）のピウン農業入植地に関

する章がある。

実地調査に於ては，狙った目的，文化面に特に重点を置いた目的，に鑑み，社会的事実の調査研究に適切な方法論を利用した。それは，次に述べる調査計画概要に見られる通りである。

一般的にいって，インタビュー及び調査票の記入に際し，日本人の応待振りは暖いものであったということができる。ある場合には，被面接者がポルトガル語を話さないため，通訳の立会が必要であった。バイア州南部からセアラ州まで僅かに2回，不機嫌に，ほとんど喧嘩腰で迎えられたことを記録するのみである。両方とも朝鮮の元戦斗員で，戦争神経症で，精神的抑圧と精神的外傷を，自己防衛の仕組の一種として，移住者として受入れてくれた国に対する抵抗と反抗の形に晶化させるに至った。10年以上ブラジルに住んで居るに拘らずポルトガル語を話さなかった。そのことは，同化に対する抵抗を意味する。重要性はないにしても，外見的には非同化過程を代表するものである。

前記の場合，被面接者一家長一のみが，粗野なまたは敵意のある態度を示したことを強調する必要がある。両家族とも，その他の人達，子供達も妻達も調査員に応接する態度に暖かい誠意が在った。彼等，家長達に，戦争の傷痕が，より有害な心理社会的影響が残っていたのである。

3.2　方法論的指針

3.2.1　対象地域

本件調査は，バイア州からセアラ州まで一自然地域の生態学的概念に基づく東北伯に於て一道路にして8,000キロを超える道程であったが，それは拠点となった都市のみを計算に入れ，日本人入植移住地内そのものの脇道や這入り道を計算に入れないものであった。この広範な地域内に，一部が日本人，一部がブラジル人で，両者が同じ責任，義務，権利，特典を有する混合入植地が所在する四州，即ち，バイア州，ペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州がある。

3.2.2 目 的

本調査は，目的として，未開拓の分野を切開く正直な努力として，蒐集し，分析し，解釈した具体的な資料により，統計的基準のみならず，社会・人類学的，歴史的，心理社会的基準に照して，人種的偏見もまた文化的反感も無しに，東北ブラジルの農村人口の中で，自然環境及びブラジル人との関係において，日本人がどのように行動するかを知り，その同化力の大小，影響能力または融和能力を知ることであった。(注50) 社会・経済的診断のみならず，広く人類文化的診断をし，結局，その同化の過程及び混血の過程，空間的のみならず社会・文化的定着及び移動を知ることであった。

3.2.3 資料の蒐集

最初に，資料の蒐集が殆んど人口調査の性格となったので，標本採取法，従って確率基準の使用が必要でなくなったということを明らかにすることは重要である。

調査の科学的指針内で，特に文化的面を狙いとして，専門的または補足的文献の調査を含めるのみならず巧みに行った観察，しばしば行事に参加するまでして観察し，調査票を直接記入し，インタビューを行い，組織的調査を実施した。ここで忘れることができないのは，調査票では，質問の若干は調査の性質からして，内面行動の文化的型を狙ったものであったため，生物型性向ではないにしても，少なくとも人種及び文化が歴然と異なる調査員と対面して，はにかみの反応のため，ちょっとしたインタビューに切り変え，求める回答を得なければならなかったということである。他の分野では突き合わせのため有効である専門的文献的探究は，ないがしろにできない予備的作業であった。(注51) 同様に，ある種の機関，特に一般的に移住に関係した機関及び特定的には日本人移住に関連した機関への照会があった。これ等機関の中には次のものがある。在ペルナンブコ州の日本国総領事館及び東北伯各州所在のその代理人，書簡による日本国大使館，東北伯開発庁（SUDENE），漁業開発庁（SUDEPE），農業振興院（INDA），農地改革院（IBRA）ーこの最後の二つは植民農地改革院（INCRA）の創設により廃止され，吸収されたー地理統計院（IBGE），土地分譲・植民会社（CRC），(注52) 日本人生活協同組合，レシフェに於ては，東北漁業会社（PENESA）及びブラジル漁業会社（INBRAPE），登記

所，そこには銀行融資が登記されている。

ブラジルに，主として東北伯に多年住んでいた日本人も重要な情報源であった。ペルナンブコ州に於て，この事例があった。伝統あるアイスクリーム店主ゲンバ（玄場）（既に死亡），タケオ・サトウ（佐藤武雄）北海道生れ，調査時ブラジルに35年在住し，最初はパラ州で植民会社で働いていた。最終的に住みついたレシフェ市では，VARIG航空会社の最初の代理人となり，その後魚仲買人となり，経済的に豊に生活している。ブラジルが大変好きで，ブラジル婦人と結婚し，三人の娘があり，その内二人はブラジル人と結婚している。カトリック教徒で，時々日本を訪ねるが，日本に帰ることは考えていない。(注53)

ツカサ・アサノ（浅野司）は，ペルナンブコ州に於ける柔道の導入者であり，アマゾンのジュルベバ（茄科の植物）の茎にトマトを接木する技術の導入者であったが，今日は有名なマッサージ師である。ピカバウ・アマレロ附近の農園で野菜や果物の外，養鶏をし，胡椒を栽培している。彼の娘ユリコ・アサノ（浅野百合子）は，レシフェ州立高校，現シゼナンド・シルバ高校で，私の最も優秀な生徒の一人であった。

統計方法は，数量化の形で資料を集めることができるが，適切に実施されたとしても，他の方法論的基準を省略することはできない。この事例として写真記録化一所謂視覚法で，スライド，図写及びフイルムを含んでいる一は，日本文化の存在の物的人類学面（鶏舎，材料，建設及び運営の技術及び型式，農業方式，その内には灌漑，日本の小型耕転機，トバタ型，を使っての土壌の手入，接木法，農業技術及び機具，家屋の型，東北伯に於ける日本人の生活及び文化の場面や情景）のみならず，混血により多少変ってきた多様な特徴のある人種型をも記録にとどめるためである。

3.2.4　作業グループ

作業グループは一調査の途中で時々変更があったが一最初は，ジョアキン・ナブーコ社会研究所所属の専門職員6名，1名の調整主任と5名の調査補佐員（これは，場合によりまた調査が行われる州により変った）であった。

グループは，可能な限り，カメラマンと農村用タイプの自動車を利用した。運転手とカメラマンは，調査場所により，時にジョアキン・ナブーコ社会研究所に所属

する者であり，時に調査を支援する機関または団体に所属する者である。

既にブラジル文化に同化した日本人の協力は一般的に役立った。時に，直接的に情報提供者として一古い移住者の場合一別の時には，間接的に通訳として，調査票の記入に，またインタビューの実施に利用された。このように，できる限り，若干の日本人の側での心理部抑圧及びポルトガル語の知識の不足から生ずる問題を避けるように努めた。

3.2.5　期間　困難及び不測の事態

広範な調査地域内で，日本人農業入植地は，多くの場合，出入の困難な場所にあり，資料の蒐集は約24ケ月の期間で終了した。この調査が取極に基く資金供与を得られず，人類学部の直接且つ全面的な責任で行われたため，予算の不足から生じた諸困難を想起することは時機を得ないことではない。また，雨の多い時期が，しばしば洪水を来し，人の移動を全く不可能にし，そのため実地調査を続けることが出来なくなった結果，時間を無駄にしたことも忘れることはできない。例えば，バイア州に於て，数日間エスプラナーダで孤立させられたことがあり，イツベラ及びウナでも同じ目にあった。ペルナンブコ州及びリオ・グランデ・ド・ノルテ州でも同じ問題が生じた。

日本人農業入植地は，バイア州では，州の南部に所在する郡であるイツベラ及びウナで見られるように，遠く離れ且つ近づき難い地域にある。さらに，明らかにして置くことが重要なことは，私自身，バイア州及びリオ・グランデ・ド・ノルテ州の入植地に必要不可欠と思われた情報を補足するため，また，最初の接触の際，カメラマンが居なかったため撮ることができなかった写真を撮るため再度訪ねなければならなかったということである。このような不測の事態の外，調査の期間を長引かせたのは，調査の初期及び実地調査期間中参加した調査補佐員の異動のため，集計及び製表が中断したことも忘れてはならない。このような異動は，計画に参画していなかった調査員の手に移った仕事を遅らせ，時として彼等に仕事に馴れるための苦しい努力を強いることとなった。このような問題は，しばしば繰り返され，人が変ると包みが見当らなくなり，従って仕事の進行が遅れるということがあったことを記して置く価値がある。必ずしも計画を熟知しているとは限

らない調査補佐員が行った手作業による集計及びこれに続く調査結果及びパーセンテージをともなう図表作成が，相当難かしいことを示した分析の遅れる原因のかなりの部分を占めた。

これ等全てのことが，調査の期間を過度に長びかせ，報告の作成を遅らせた。報告書は，社会調査の方法及び技術の優れた専門家が推薦するような方式のもので，僅かな技術家や専門家にのみ開かれた特殊な言葉による数字や表に限られるべきものではない。反対に，当局や政府の要人のみならず，社会的・人間的問題及びその現実の直接的研究の結果である解決策及び勧告に参与すべき大衆にも判り易いものでなければならない。この場合，現実とは東北伯の現実である。報告書は，東北伯の現実の正直な描写でなければならない。

調査で蒐集した資料の分析に入る前に全般的な視野の下で，ブラジルに於ける移住問題の一般的状勢及び特に日本人移住を展望することが重要であると考えた。

3.3　分析及び解釈

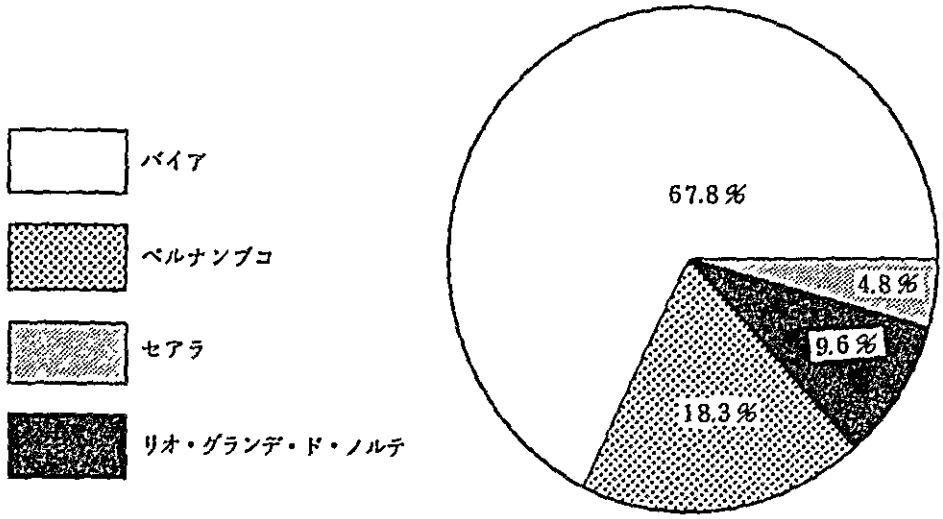
3.3.1　調査した農業入植地

本調査は，東北伯四州，正確には，計画移住制度下で，日本人移住地を有する州を含んでいる。バイア州，ペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州であり，（表12参照）夫々 78，21，11 及び 5 家族，613 人，家族当り平均 5 人である。(注54)

日本人入植地で採用されている分益小作制度に従い，ブラジル人家族も，同じ条件で，移住者家族に割当てられた区画の傍らに土地の割当を得ている。区画は，大きさが色々あり，ある場合には10乃至20ヘクタールあり，他の場合には10ヘクタールにも達しない。

混合入植制度の採用は，一方では，農村地帯に於て，ブラジル人とのより大きな接触を通じて，ブラジル社会に於ける日本人グループの同化を容易にし，他方ではブラジル人の側で，農村経済及び都市部，特に大都市の食糧供給にとり有益であることを示した農業あるいは養鶏の技術及び経験を知り，学ぶことを容易にすることが目的であった。

州別家族比率



第12表　州・郡・援護機関別日本人家族分布

州	郡	家族数	%	援護機関
バイア	マタ・デ・サン・ジョアン（J. K. 植民地）	47	60.2	州農務・商工局（SAIC）
	イツベラ	6	7.7	INDA，現在INCRA
	ウナ	25	32.1	〃　〃
	計	78	100.0	
ペルナンブコ	リオ・ボニート	16	72.2	INDA，現在INCRA
	カーボ	5	32.5	C. R. C.
	計	21	100.0	
リオ・グランデ・ド・ノルテ	ニジア・フロレスタ（ピウン植民地）	8	72.7	INDA，現在INCRA
	マシャランガーペ（トーロス）（プナウ植民地）	3	27.3	ピオ12世財団
	計	11	100.0	
セアラ	パカツーバ（グアイウーバ）（ピオ12世植民地）	5	100.0	INIC，INDA，IBRA，廃止後INCRA，1971年以後，独立採算
	計	5	100.0	
	総計	115		

日本人とブラジル人は，同じ土地に住み，同じ生態影響の下にあり，ブラジル当局から同じ条件で援護を受けた。金融上のみならず技術的な援助，教育上のみならず社会及び医療・衛生上の援護，また娯楽及びスポーツの面の助力，可能な範囲内で，また宗教上の援助も行われた。

最近ペルナンブコ州パーラ・デ・グァビラーバに3家族，合計8人の小さな日本人移住地が生れた。この最後の入植地を含めると調査した東北伯の農業入植地の日本人は621人，118家族の合計に達した。

東北伯に於ける日本人移住者の定着は，バイア州ウナ郡に日本人コロノが到着するとともに始まった。ここで注意をして置くことが重要なのは次の点である。この報告に使われた入植する（COLONIZAR），植民（COLONIZAÇÃO），入植地（COLONIA），コロノ（COLONO）という用語は，マリオ・ラセルダ・デ・メーロ(注55)が明晰な研究で用いたと同じ意味で使い，伝統的な意味での新しい地域を占有する（OCUPAR），占拠（OCUPAÇÃO），占有者（OCUPANTES）または占有者のグループ（GRUPO DE OCUPANTES）または高度の技術的・文化的機具を備えた人達による土着人の居住地域の開発と解釈してはならないということである。ブラジルの場合，正に最初インディオが住み，後からポルトガル人開拓者が占領したのである。それ故，1945年9月18日付法令第4，976号第46条の語義を採用することとした。それによると「入植する」とは「土地に人的要素を定着させ，地域の経済的利用及び農村地帯の住民の生活，保健，教育並びに技術的能力の水準の向上を計る」ことである。(注56)

日本人入植については，その非凡な労働能力，証明済の適応傾向，同化しようとする日本人の積極的心構え一或る場合には，外来文化の要素，価値，標準がブラジル文化のそれ等と色々な程度の複雑さで混合したものとなって一のお陰で，主として狙った目的，即ち，東北伯農民の生活水準を，経済的観点のみならず社会的にも向上させ，同時に生産を基礎とした人口不均衡を減少し，単に空らの区域を埋めるだけではない，を達成できるとの印象を持った。

地理学者マリオ・ラセルダ・デ・メーロは，日本人が働くリオ・グランデ・ド・ノルテ州のピウン及びペルナンブコ州のボニートの入植地の名を挙げ「地域の農業の一般的変化の胚種となり得る」と述べている。(注57) 上記研究家が指摘しているよ

うに，幼稚な伝統的農業制度を考慮すると，奇跡を期待することはできないことは明らかである。しかしながら，与えられなければならない援助に言及して，次の通り付言している。この援助により「各入植地の技術的波及力は，農業技術援助，教育，農業融資の分野での措置を通じて，周辺地域の受入条件を良くする。」(注58)

日本人が，計画統制と援護の制度下で働くピウン入植地に言及した有能な地理学者の意見は，日本の人的要素は，調査中に確かめることができたその才能からして，東北伯農村地帯の住民を苦しめる多くの問題を解決しあるいは緩和する手段としての植民の挑戦に明確に答えることができるという見解を維持するよう私を勇気付けてくれる。特に，リオ・グランデ・ド・ノルテ州ニジア・フロレスタ郡のピウン入植地は，東北伯の日本人農業入植地の全ての中で多分，気候，土壌及び広い意味での援護，特に技術的援助の最も劣悪な状態を示すものであるという特殊な事情を忘れなければである。

マリオ・ラセルダ・デ・メーロの見解では，他の入植地，例えば，ペルナンブコ州のカーボ，バイア州のマタ・デ・サン・ジョアン，イツベラ，ウナの如きを，身近に知れば，一層楽観的になるにちがいない。これ等では，市場への生産物の出荷の業務は直接または，農業協同組合を通じて，まあまあ妥当な状態で行われている。ブラジル当局は，日本と協定して，既存の入植地に対する援護の状態を発展させ，既知の且つ成功した経験の補強として新しい入植地の造成を促進し，外国人及びブラジル人コロノに自由に働ける可能性を与え，賃金労働関係を離れて，土地の所有及び使用の権利を持ち，土壌，気候，地域の植物及び動物の知識を含め農業技術において指導を受け，教育を受け，病気の手当を受け，予防医学的に保護され，社会生活に於て適正に指導されるならば，少なくとも，東北伯農村地帯の大部分の住民が苦しんでいる遅れ，貧困，文盲及び疾病の状態を軽減するであろう。

植民に伴う諸問題を考慮に入れても，東北伯農業が呈する諸困難を解決するためのより効果的な方式の一つであることは否定できない。この諸困難は，その色々な面に於て且つ物理的空間，経済地理的条件，天然資源，医療・衛生状況，一般的な教育及び生活水準，農業上の特殊性その他と関連付けて認識されなければならない。

古くなった一つの文化体制全体は，文化を整然と構成する各分野が個別にではなく，全体として改善されるときにのみ適切に改革されることができる。

東北伯の日本人農業植民地（1964年）

州別，移住者並びに子孫（都市，農村，性）別日本人分布

州	総数	移住者	子孫	都市	農村	男子	女子
セアラ	3	1	2	3		3	
リオ・グランデ・ド・ノルテ	58	52	6	2	56	35	23
ペルナンブコ	109	69	40	31	78	56	53
バイア	256	164	92	12	244	138	118
計	426	284	140	48	378	232	194

出所：ブラジルに於ける日本移民，1964，東京大学出版会

1964年から1967年の期間に，子孫を含めて187人の日本人の絶対数の増加があった。比較的には30.50％の増加となる。農村部の数字だけを計算に入れると，総数で，子孫を含めて235人の増加があり，38.34％の増加となることが判る。

3.3.2 調査した地域 歴史・地理的特徴

セアラ州バカツーバ郡（グアイウーバ）ピオ12世植民地

郡は，1869年10月8日付州法第1,284号で創設され，1873年4月26日定住が開始された。この郡のグアイウーバ区に「ピオ12世植民地」がある。地域は，第4小地域に属するバトゥリテ市の地文学地帯に属し，アスファルト舗装道路で州都から42キロの距離にある。健康的で爽やかな気候で，平均温度29度，年10.32ミリの降雨量がある。高度59メートル，起伏のある地形である。水利は三つの堰と一つの小川がある。電力，粘土及び木材を有している。その経緯度は，南緯3度59分7秒，西経38度37分15秒である。(注59) ピオ12世植民地の地域は，山麓台地の上にあり，全体で1,392ヘクタールである。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州ニジア・フロレスタ郡ピウン植民地

ピウン日本人入植地は，ニジア・フロレスタ郡一同地で生れたリオ・グランデ・ド・ノルテ州出身の作家に敬意を表し，1938年3月29日付政令第457号で以前のパパリに代り名付けられた一に在る。

日本人入植地は，海岸森林の地文学地帯，より正確には第6小地域に相当してい

る。

日本人入植地の経緯度は，南緯6度5分26秒，西経35度12分33秒である。土地はあまり高くなく，海抜30メートルで，気候は夏は健康的で乾燥して居り，冬は寒く湿気がある。(注60)

マシャラングアベ（トーロス郡）

この部落は，トーロス郡に属している。海岸森林の地文学地帯に在る。乾燥したしのぎよい気候の小地域で，健康的であることで知られている。経緯度は，南緯5度11分59秒，西経35度27分26秒である。高度は5メートルである。

ペルナンブコ州カーボ

カーボ日本人入植地は，1877年7月9日付州法第1,267号で創設されたカーボ郡の土地にある。正確には，レシフェーマセイオ間の国道101号線の右側6キロ，人造ゴム工場（COPERBO）の近く，海岸森林地帯の真中，ブラジルの新しい地理区分(注61)による第11小地域にある。同郡は，8郡で構成する所謂大レシフェ圏の地域に含まれている。

1968年，州統計局，ブラジル地理統計院及びペルナンブコ州に在るその他の機関の職員の連携努力により，州は，自然，教育，社会，政治行政，宗教，医療衛生，教育の様なものの外，興味ある人口態様を考慮した住民の人口推計を得ることができた。(注62) 農村地域が圧倒的で，都市郡と対比して，約70%の割合を保持していた。

日本人入植地は，かなり起伏の多い土地にある。近くをピラパーマ河が流れている。他の小さな河や細流も遠くないところを通っている。それにも拘らず，土地は乾燥し，栄養分が消耗していて，灌漑と肥料を必要としている。入植地は，南緯8度10分，西経35度8分の地域にある。

ボニート

ボニートまたはリオ・ボニート郡は，サン・ジョゼー・デ・ベゼーロスの集落から山脈に居る猿を追って来た猟師が河に感じた魅力に由来している。山から流れる透き通る水が見え，その場所に心地よい，画のような美しい景観を与えていた。

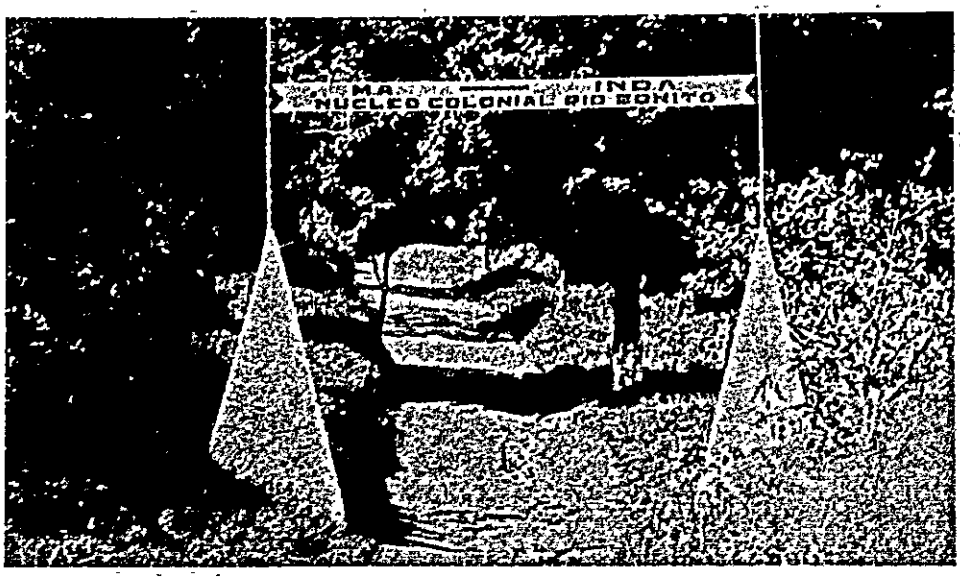
渓流を含めた自然の魅力を前にして，景色の美しさと詩に魅せられた猟師の一人は「何と美しい川（リオ・ボニート）だ」と叫ぶのを抑えることができなかった。名前は定着した。それ以後，皆がその名前を使い始め，最近は省略して単にボニー

トと呼ぶようになり，1796年か1798年に創設された集落の名前となるに至った。

最初は，この地域全体が，有名なパルマーレスのキロンボ（逃亡奴隷の潜伏地）の一部をなす森林に覆われていた。土地は，腐植土で肥沃であったし，今日もなおそうである。1893年1月16日法律第52号により自治郡となった。

入植地は，最初農業振興院（INDA）が，現在は植民農地改革院（INCRA）が援助し，ボニートの現在の町から1グレア（訳注6キロ）以上の地点にあり，第9小地域に属している。場所は，農業活動にとり素晴しいところであり，密生した草木に覆われた山の多い土地，川の水にしても雨の水にしても水の足りなくなることがない大きな谷を形成し，土壌は常に湿っている。(注63)

ボニート植民地は，海岸森林の地文学地帯に在り，比較的裕福に見える。気候は冬の雨，夏の高温で，暑く湿気が多い。



ペルナンブコ州リオ・ボニート入植地（当時農業振興院の管理下にあった）の入口。

経緯度は，南緯8度29分40秒，西経35度41分45秒である。高度は450メートルである。(注64)

バイア州

マタ・デ・サン・ジョアン（J．K植民地）

J．K植民地は，1846年4月15日付州法第241号により創設されたマタ・デ・

サン・ジョアン郡内に設けられている。

レコンカボ地文学地帯，第20小地域の真只中に位置している。その経緯度は，南緯12度31分46秒，西経38度17分59秒である。サルバドール市から，直線距離にして51キロ離れている。

高度は，海抜37メートル，気候は温和であるが急変することがある。平均気温は23度，土地は起伏が少なく，小川が流れている。(注65)

ウナ

植民地は，1890年8月2日付政令で創設され，カナビエイラスに再編入され，1924年8月2日付法律第1,718号で再度自治体となったサント・アントニオ・ダ・バーラ・ド・ウナ郡にある。第24小地域に当るバイア州のカカオ栽培地域の内にある。サルバドール市から直線距離で253キロ離れている。経緯度は，南緯15度17分47秒，西経39度9分28秒である。高度は，僅かに海抜6メートルである。

気候は，夏は暑く，冬は寒く湿気が多い。平均気温は，23度，記録された最高気温は28度，最低気温は18度である。(注66)

イツベラ

イツベラ郡は，インディオの小さは集落から始まった。言伝えによると，18世紀後半より前の時期に部落には100以下の草葺家があり，300人程のインディオと若干のポルトガル人及びマメルーコ（訳注白人男とインディオ女の混血児）が住んでいた。最初はサンタレンと名付けられていた。ポルトガルの土地に敬意を表したものにちがいない。サンタレン村はポンバル侯爵の命により1758年12月27日創設された。最初は，インディオの労働のお蔭で，マンジョカを栽培していた。後に，ポルトガル人と共にコーヒー及びカカオ栽培が始まった。

1909年8月14日州法第759号はサンタレン村を市に昇格させた。1911年中央区だけからなる郡が生れた。

1944年6月1日州令第12,798号により，サンタレン郡はイツベラ郡と呼ぶようになった。

郡は，カカオ栽培の地文学地帯にある，その領域は海岸まで延びている。第22小地域に属している。日本人入植地は，南緯13度43分55秒，西経39度8分50秒の地にある。直線距離にして，サルバドール市から105キロ離れている。高度は20メート

ル附近を上下している。シリニャエン河の外にいくつかの小川が植民地の近くにある。セーラ・ド・マール（海岸山脈）山系に連なる若干の丘がある。

気候は，夏は暑く湿気が多い。冬は，健康的ではあるが，湿度は非常に高い。最高気温は30度，最低気温は16度，平均気温は22度から23度の間である。

一般的にいって，生態気候条件は農作業に好都合である。(注67)

3.4　調査対象家族の特徴

3.4.1　家族の数的構成

バイア州に於ては，最多数の家族は，４人（17家族），５人（14家族），６人（15家族）である。その他の家族は，子供３人の７家族と子供８人の６家族の例外を除き，１人から３人で構成されている。平均はほぼ５人である。

ペルナンブコ州に於ては，現象は殆んど同じであり，４人及び５人の家族（６家族が４人，６家族が５人）が最も多く，平均もまた５人である。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州に於ては，４人の６家族及び２人の２家族を除き残りの３家族は夫々５人，６人及び７人である。全平均は４（4.18）に相当する。

セアラ州に於ては，２家族は３人であり，その他の３家族は夫々１人，６人及び９人で，平均は４（4.4）に傾いている。

後の２州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州では，家族当り平均数は事実上４である。

東北伯に於ては，日本人移住者の入植地のある４州に於て,家族当り平均数は５人に相当する。(注68) 厳密には 5.5 である。（表13参照）　この平均は，産児制限をしていないものも避妊用具を使用しているものも計算に入れて，ブラジル人口の家族当り人数のほとんど一定して変らない平均と一致している。従って，地方または小地域の各住民の生態条件，社会，経済的影響，特に宗教，道徳及び一般的文化の影響に応じて修正する必要のある算術的平均である。変化の図表（頻度多角形）において，３つの最大頻度は４人，５人及び６人の家族と合致し，より人数の多い家族の傍により低い頻度の大きな数字があり明白に非対称の曲線を示している。

第13表　家　族　数　構　成

摘　要	バ　イ　ア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セ　ア　ラ		合　　計	
家族数	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1	2	0.46	−	−	−	−	−	−	2	0.33
2	2	0.46	−	−	4	8.70	−	−	6	0.97
3	21	4.94	9	8.61	−	−	2	8.69	32	5.22
4	68	15.70	24	21.62	24	52.18	6	26.09	122	19.90
5	70	16.17	30	27.03	5	10.86	−	−	105	17.13
6	90	20.70	−	−	6	13.04	6	26.09	102	16.64
7	63	14.55	14	12.61	7	52.22	−	−	84	13.70
8	48	11.09	24	21.62	−	−	−	−	72	11.75
9	27	6.23	−	−	−	−	9	39.13	36	5.87
10	20	4.62	10	9.01	−	−	−	−	30	4.90
11	22	5.08	−	−	−	−	−	−	22	3.59
計	433	100.00	111	100.00	46	100.00	23	100.00	613	100.00

家族別人数平均　5（厳密には 5.5）

3.4.2　人種的類型

原日本住民は，先史時代にアジア大陸東岸から渡来した蒙古系が重要な地位を占めて，色々な人種グループが混合した結果である。蒙古系一若干の人類学者は基礎と見做している一に，南方から移動して来て琉球の島々に達した原マレー人及びポリネシア人が後から加った。現代では，他の要素，アイヌ人も日本人の人種構成に加わるようになった。アイヌ人は，一部の日本の民族及び土地の研究家により，日本列島の原始住人であったとされ，北海道がこの人種グループの現在の代表者達の砦となる責任を持たされている。(注69) 同様の責任が千島列島及び樺太にもある。アイヌ人グループは，主として日本列島全体に広がっていたが，蒙古系分子の重なる人波の衝撃によって前記の島々に徐徐に逃避していったように思われる。(注70)

形態人類学の観点からすると，現代日本人は，極めて目につき易いある共通の特徴により，また肉体的形質の相対的均一性によって一般的にいって識別されるとは

いえ，容易に認め得る二つの人種的型，即ち繊細型と粗野型に分類することができる。繊細型は，白人種により近く，コーカサス地方に遠い起源を持ち，アイヌ人住民の系統を引き，コーカソイド人またはヨーロッパ系（白色人）的肉体特徴を有し，他方粗野型は，古い蒙古系住民(注71)と結び付いた東北アジア地方から来ている。これ等は皮膚の色が著しく黄色に傾いている人種で成っている。ここで，我々の見るところでは，ジルベルト・フレイレが発展させ，主張する所謂目標人種または超人種という命題は，相当の補強を受けるように思われる。即ち小麦色の繊細型の日本人及び黄色い皮膚の粗野型の日本人が，ブラジルの人種的モザイクと色々な程度の混血で混り合い，ブラジルで起りつつある黄褐色化の過程に寄与している。

活発に混血し同化する日本人の積極的な存在により，ジルベルト・フレイレが見事な論文で主張しているブラジル人の黄褐色性は益々現実となりつつある。(注72)黄褐色性は，白色，黒色または黄色要素のより典型的なタイプまたは既に稀薄になったタイプまでの参加の大小に応じ，濃厚な黒色により近い色合いから，より明るい白色に近い，いろいろ異なった色調を多分に示すであろう。しかし，いずれにしても黄褐色性である。異なった人種的起源の人間の型の不断の溶融の結実としての黄褐色性は，ブラジルが色々な地域に於て坩堝の様に機能し，本質的に混合物でなく色々な割合の化合物として，現われて来ている。

繊細型は，比較的背が高く，いくらか弱々しく見え，丸顔よりやや面長の顔面は細面で，眼はかすかに目尻が上っている。粗野型は，背が低く，がっしりとして頑健に見え，丸顔，頬骨の部分が出っ張って居り，皮膚は黄色味が濃く，眼は典型的に蒙古的である。身体的特徴からして，繊細型は，ヨーロッパ系白人を思わせ，しばしば混同される。

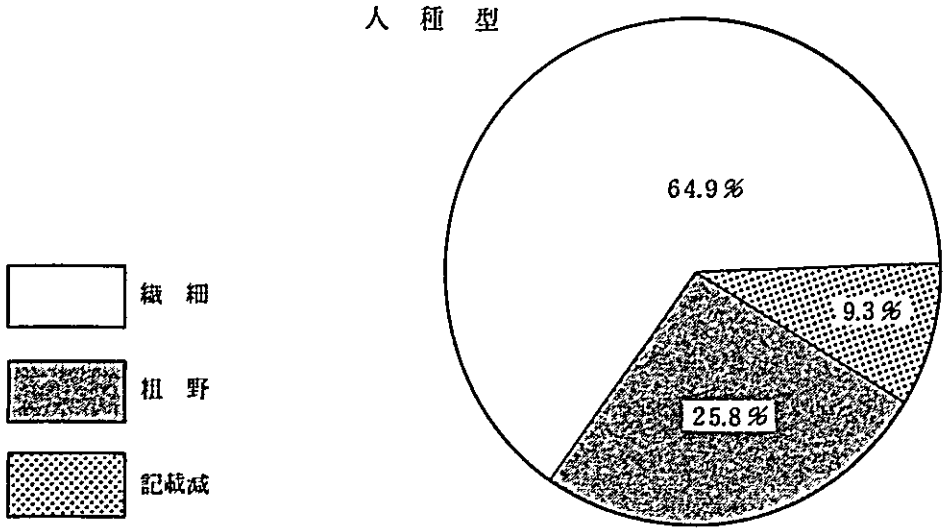
繊細型が数的優勢の傾向を示していることは，日本人人口の構成にアイヌの要素が加っているのみならず，二つの型，即ち粗野型とコーカソイド系種の人種的要素を持つもの間の結婚によるもので不思議ではない。混血は蒙古系の影響を減少するのに役立っている。（第14表参照）(注73)

調査した4州に於て，繊細型の人間の数が，総数のみならず，各州夫々多いことを示した。記載洩れの57人を計算に入れないと，全体で，繊細型の人間は398人，72％，他方粗野型は158人，28％であった。（第14表参照）粗野型ー短躯ーの人は

農業労働に，他方繊細型ー長頭ーは控え目ではあるが知的活動に向う傾向があるように見える。(注74)

人種的構成に関するブラジルの国勢調査の結果は不完全であるとの印象を持っている。日本人については，欠陥は一層目立っている。資料は，国籍に従って整えられている。問題の場合，例えば，子供や孫ー二世や三世ーは，ブラジルで生れたので，人種的に日本人として計算されず，他方，日本人以外の黄色の人間またはその子孫，多分インディオをより直接的に祖先としている者も黄色人と見做されている。

日本人入植地の人種的構成の正確な評価は，我々が行ったような形での組織的調査，即ち情報提供者を知るだけではなく，その他の家族構成員についても主要な肉体的特徴を直接観察することによってのみできる。肉体的特徴の内では，人類学上



「粗野」及び「繊細」と呼ばれる二つの主要な人種的型を皮膚の色，髪の形，モンゴロイド性の程度の多い少ないという特徴により，区別することが可能である。ここにいうモンゴロイド性は，病理学的状態を意味するのではなく，「蒙古的眼」，即ち眼瞼の傾斜度がより大きいか小さいかということである。(注75)

眼を開いた時，上眼瞼が襞の形に折重なり，普通は眼孔の縁に見えなくなる。この襞は，眼瞼の自由な辺と平行に現れる代りに，弧形に折重なり，側の角度を眼瞼の辺から外へ突き出すような形に越える。蒙古的眼は，この襞の特殊な位置から生

ずる。例えば，日本人の場合，例の二次的襞は，上眼瞼の自由な縁を再び蔽うように，より低い位置に現れ，眼の内側の角の上を通って，鼻の側面の半月状の襞の形の内に消えてなくなる。涙丘は，この解剖学的位置のため，見えにくい。他方，眼瞼の割目の上限は，眼瞼の縁でなく，襞の縁にたよっており，そこに睫毛が植っているように見える。

各州ごとに，日本人の人種的型は，形態人類学が名付ける名称により，第14表の百分比表に示されている。

第14表　人種型（地域別分布）

摘　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
繊細型	290	66.97	63	56.75	25	54.34	20	86.95	398	64.92
粗野型	113	26.09	31	27.92	11	23.91	3	13.04	158	25.77
調査洩	30	6.92	17	15.31	10	21.73	−	−	57	9.29
計	433	99.98	111	99.98	46	99.98	23	99.99	613	99.98

3.4.3　性　別

男性が女性より僅かに数的に多く，その比率は53.67％対46.32％である。この優位は，僅かなものとはいえ，女性の数が世界の何処ででも常に多いという昔からの観念に反して居り，しかもこれは最近の統計で否定されて来ている。

性別分布については，男性の優勢が看取され，約15.84％に相当している。この不均衡は，アメリカ合衆国で起きている例のように子供達のせいであり，米国では男性の日本人の比率は75.16％である。北米に於ては，ハワイ諸島を含め，移住の初期における日本人社会は，独身者，それも全て男性，の優勢が特徴であった。(注76)

ペルナンブコ州に於ては，日本人入植地の調査が行われたその他の東北伯諸州に於ても同様であるが，ブラジルと日本間で取極めた規範に従って行われた計画移住は，1940年代に始まったが，1953年以降増加した。従って，約35年前になる。その当時，既にブラジルに於て，アマゾンに於て，南部の地域，主としてサン・パウロ州に於て経験があった。東北伯に来る日本人は家族を連れて来て居り，ブラジル

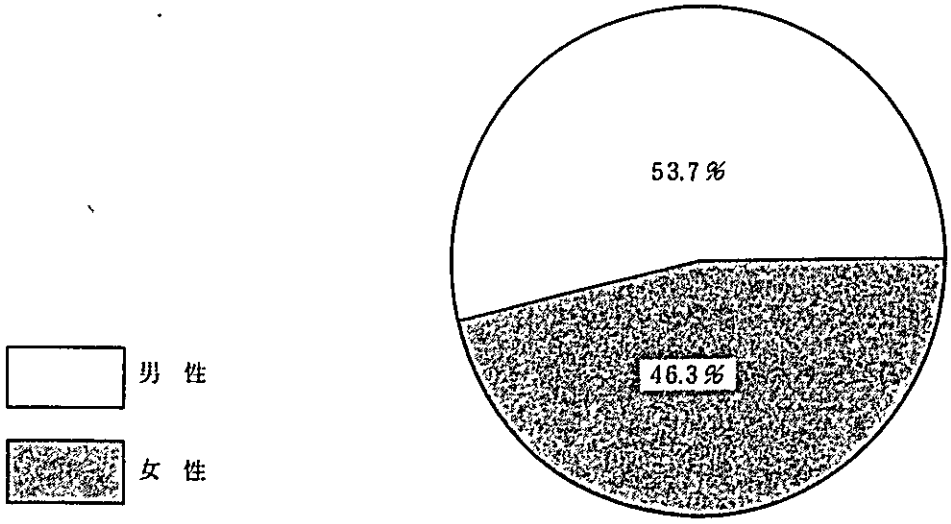
人女性と結婚する独身男性は少なかった。これは家長の場合である。子供達については，何人もブラジル女性と結婚した。また，逆に日本人女性がブラジル人男性と結婚した。

東北伯に於ては，マリア・アントニア・ローペス・コウレス(注77) がサン・パウロ州で観察したと同じに，一般的にいって，日本人移住者の男性の割合は，子孫の男性の割合を上廻っている。理由は，同じではないと我々には思われる。ブラジルに来るのは，富を築き，そして祖国に帰るという意図に動かされる代りに，東北伯では日本人はその大部分が男性であり，事態は異なった形で起った。経済的理由が優位を占めていることは否定できない。日本人は，富を築く―それはまた起り得たことである―ためではないにしても，金を稼ぎ，そして快適で安楽な状態で生活する志を持って来た。しかし，明らかに留まる意志を示した。何れにしても，移住者送出国と移住者受入国間の取極は，長期滞在―適応と文化的同化の優れた能力を要求していた。

3.4.4　家長への経済的依存度

全ての州に於て，日本人入植地に於ては，扶養家族の数は極めて高く，特にペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州に於ては，独立しているものは事実上居ない。このような現象は，主として東北伯に日本人が居る期間が比較的短いためである。期間は，大体，31年から35年の間を上下して居り，経済的に独立する年令に達した子供達に大きな機会が無かった。バイア州に於ては，独立した者の数は比較的多いが，日本人の在住期間がより長い結果である。それから，他の3州と比較して，農作業に対する幼少からの参加がある。（第16表参照） それにしても，農作業に子供の協力をあてにすることを強調するのは意味がある。子供の協力は，普通8歳から10歳位から始まり，生産性が低いにしても，家族の出来高は何等かの形で，補助的労働で得た収益で補強され，経済的依存の重みを軽減している。事実，皆幼い時から働き，同時に勉学するが，それには一般的に起るように，犠牲ともいえるような努力を払うのである。特に，ペルナンブコ州及びバイア州では，居住する郡内に中等教育の学校がないため，若者達は，隣りの郡か，時には州都に中等教育の学校を求めなければならなかった。この2州では，学校の夜間のク

性　別



第15表　　性　　別

摘　要	バ　イ　ア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セ　ア　ラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
男　性	233	53.81	64	57.65	21	45.65	11	47.82	329	53.67
女　性	200	46 18	47	42.34	25	54.34	12	52.17	284	46.32
計	433	99.99	111	99.99	46	99.99	23	99.99	613	99.99

第16表　家長への経済的依存度

摘　要	バ　イ　ア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セ　ア　ラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
家　長	78	18.01	21	18.91	11	23.91	5	21.73	115	18.76
扶養家族	300	62.28	88	79.27	33	71.73	18	78.26	439	71.61
独　立	55	12.70	2	1.80	2	4.34	—	—	59	9.62
計	433	99.99	111	99.99	46	99.99	23	99.99	613	99.99

ラスまで運んでくれるバスをつかまえるため，森から出て舗装道路まで歩くのである。家に帰るのは，夜半前になることはなく，舗装された道路から，輸送手段もなく，森の中を淋しい暗い道を通るのである。

3.4.5 年 齢

15歳から35歳の年齢層に最も人口の密度が高いことは，若い人口が優勢であり，従って，労働力との関係においてより良い状態にあることを示している。同様に高い比率を示している10歳から14歳の年齢層において，両親及び年上の兄弟達の傍らで，より軽い仕事ではあるが，農作業に参加する者の数は大きい。(注78)

各州に於ける35歳以上の人間の数は減少したり，増加したりしている。(第17表参照)

東北伯に於ても，斉藤が，日本起源の人口の構成に関する論文に於て，サン・パウロ州で観察したと同様の現象が起きている。そのため，本研究調査員は，日本人及びその子孫を３つの層に分けた。

(a) 40歳以上

(b) 25歳乃至40歳

(c) 25歳以下 (注79)

第１の層は，17.70％を占め，その全部が日本生れの者で構成している。「限界」または「中間」と呼ぶ第２の層は，第１と第３の層を結ぶ環として現れ，日本生れ―多数を占めている―とブラジル生れの者で成立っている。しかしながら，日本で生れた者は，未だ幼児でブラジルに到着し，ブラジルで教育を受けたということを指摘する価値がある。

第３の層は，多数のブラジル生れの者で構成される。(教育に関する項で，各層の文化的変形について分析する。)

調査した東北伯農業入植地には，336 人，54.81％が25歳以下の年齢層にある。122 人，19.90％が25歳から39歳の層にあり，148 人，24.14％が 40 歳以上であり，その外，申告洩れが７人，1.14％あった。斉藤が利用した同じ指標―教育と宗教―を使用し，40歳以上を第３，25歳以下を第１，中間を第２と呼ぶことにする。社会学上または文化人類学上軽蔑的な含蓄を避けるため，我々は「限界」という区分名

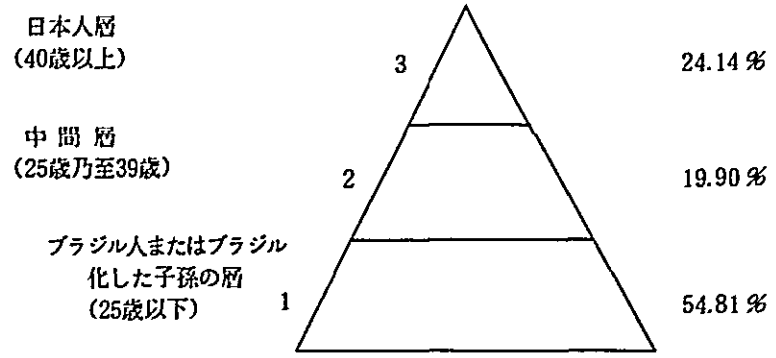
は使わなかった。

教育については，第1層を成す者の大多数はブラジルで教育を受けたか受けつつある。第2層では，大体均衡している。即ち日本で教育を受けた者とブラジルで教育を受けた者がほぼ匹敵している。第3層では，大多数が日本で教育を受けた。

宗教に関しては，カトリック教徒は，その大部分が第1層にあり，年齢が進むに従って減少している。

カトリック教徒と見做される者の間にも，同時に心霊術をも信ずるものも居り，また，アフリカ系の宗派すらも受入れる者がいることを指摘することは興味がある。年齢の高い層に集中している仏教徒自体の内にもアフリカ宗派，主としてウンバンダ信者の浸透が見られる。

日本人人口の年齢層構成を表示する図



＊ 1.14 %，0.7 ミリの申告洩は考慮しなかった。

3.4.6　家族内の地位

家族集団の内での主要な地位は家長が占め，家父長としての地位を目立って行使し，家族の重要な問題の決定は家長が行っている。若干の家族では，家長の側に一種の神権の空気が見受けられ，戦前の神政日本に君臨した神秘主義のかすかな痕跡を示している。二番目に妻が来て，家庭内の日常の問題，これには子供の訓育，教育の指導を含む，の処理は妻の責任である。家長または妻に一緒に住んでいる尊属がある時は，家長の地位よりも高い地位がその尊属に与えられるが，このような地

位は高齢者に対する敬意の一種として，象徴的または名誉的な役割を示すもので，古代ギリシャに於て60歳以上の28人のスパルタ市民を集め，一種の長老制権力を形成した元老院に似たようなものである。（第18表参照）(注80)

家族内の地位に関して最も数が多いのは，直系卑属，即ち子に代表されているもので，孫の代には未だ時間が足りない。家長とその妻が二番目に多く，一般的に比較的若い夫婦である。

3.4.7　配偶関係

バイア州に於てのみ，独身者の数が既婚者の数を上廻って居り，他の州では既婚者の数が多い。結婚の形式については，民法上の結婚が圧倒的である。バイア州とペルナンブコ州で，宗教上及び民法上の結婚を共に行うものがある程度の比率を占

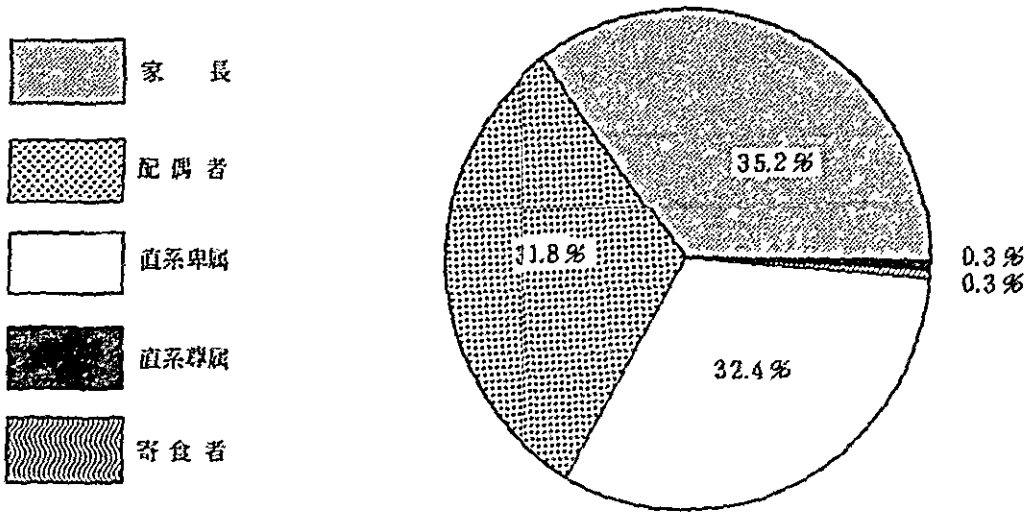
第17表　年　齢

年　齢	バ イ ア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セ ア ラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1 − 4	43	9.93	12	10.80	6	13.04	2	8.69	63	10.27
5 − 9	41	9.46	14	12.61	5	10.87	5	21.73	65	10.60
10 − 14	41	9.46	15	13.51	3	6.52	1	4.34	60	9.78
15 − 19	55	12.70	15	13.51	5	10.87	−	−	75	12.23
20 − 24	60	13.85	8	7.20	3	6.52	2	8.69	73	11.90
25 − 29	39	9.00	7	6.30	5	10.87	2	8.69	53	8.64
30 − 34	33	7.62	7	6.34	4	8.70	1	4.34	45	7.34
35 − 39	15	3.46	4	3.60	3	6.52	2	8.69	24	3.91
40 − 45	21	4.84	8	7.20	1	2.17	1	4.34	31	5.05
46 − 50	24	5.54	5	4.50	3	6.52	3	13.04	35	5.70
51 − 55	33	7.62	9	8.10	1	2.17	−	−	43	7.01
56 − 60	15	3.46	4	3.60	1	2.17	2	8.69	22	3.58
61以上	10	2.30	3	2.70	2	4.35	2	8.69	17	2.77
申告洩	3	0.69	−	−	4	8.70	−	−	7	1.14
計	433	99.93	111	99.94	46	99.99	24	99.93	613	99.99

第18表　家族内の地位

摘要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
家長	78	53.06	21	18.91	11	23.91	5	21.73	115	35.16
配偶者	69	46.93	21	18.91	10	21.73	4	17.39	104	31.80
直系卑属	−	−	67	60.36	25	54.34	14	60.86	106	32.41
直系尊属	−	−	1	0.36	−	−	−	−	1	0.30
寄食者	−	−	1	0.90	−	−	−	−	1	0.30
計	147	99.99	111	99.99	46	99.99	23	99.99	327	99.99

家族内の地位



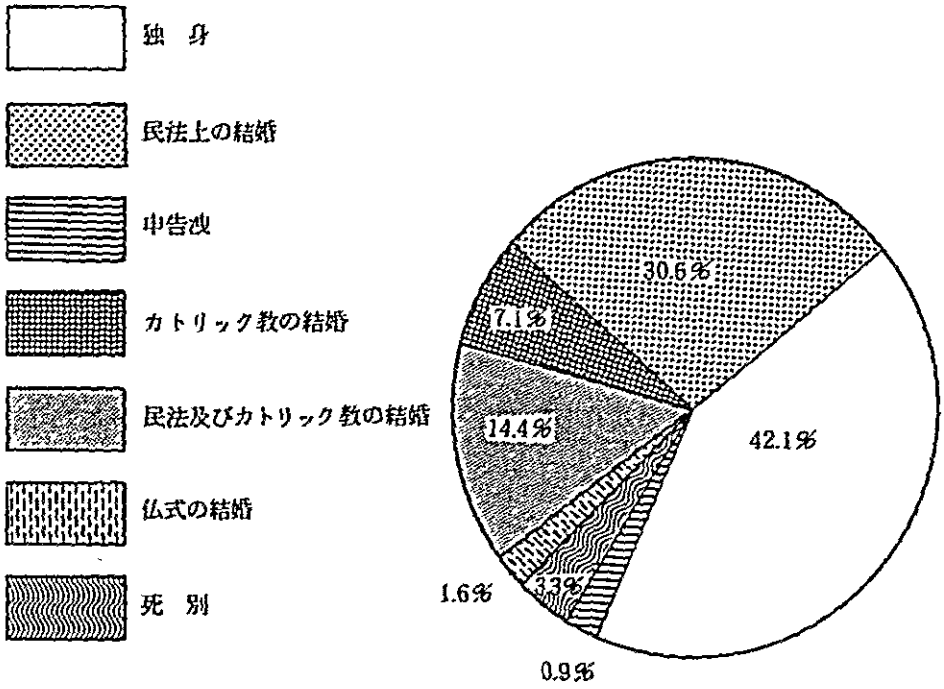
めているが，バイア州に於てのみ，かなり高いパーセントを示している。バイア州で2.27%（7件）の例外を除いては，どの州でも仏式による結婚はなく，カトリック教式に代っている。結婚相手以外との同棲は一つもなかった。（第19表参照）

夫婦間に相互尊敬があり，その尊敬はほとんど神秘的で，日本の伝統文化の家庭的習慣の影響がまだ残っているためであろう。結婚は神聖なものであり，夫婦別れは一般的に不貞に集中している極めて強烈な理由に基づいて，例外的に生ずるに過ぎない。実際上，不貞は夫婦関係解消の唯一の決定要因である。この点については

第19表　配偶関係

摘要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
独身	139	45.12	27	38.57	8	25.00	5	33.33	179	42.12
既婚										
民法上の結婚	90	29.22	30	42.85	2	6.25	8	53.33	130	30.59
宗教上の結婚（カトリック）	21	6.81	9	12.85	−	−	−	−	30	7.06
民法及び宗教上の結婚（カトリック）	38	12.33	2	2.85	21	65.62	−	−	61	14.35
仏式結婚	7	2.27	−	−	−	−	−	−	7	1.65
死別	9	2.92	2	2.85	1	3.12	2	13.33	14	3.29
同棲	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
申告洩	4	1.29	−	−	−	−	−	−	4	0.94
計	308	99.99	70	99.99	32	100.00	15	99.99	425	100.00

配偶関係（東北伯）



ブラジル人夫婦にとり優れた道徳的模範である。夫婦の間での喧嘩または口論はまれに嫉妬を口実にして起きる。相互尊敬とならんで，既婚者の態度及び行状に対する深い信頼がまた目立っている。子供の次に仕事が強力な結合の縁となっている。夫婦が一緒に，明方から夕暮まで，子供を連れて，普通10歳以上だが，時にはもっと小さい年齢の子供と働いている。(注81)

3.4.8　出生地

日本人移住者の都市別出生地は，日本列島の原始人口に於て，アイヌ人の人種グループが到達したにちがいない地域とより多く合致していることを示している。この事例に当るのが東京，長野，浜松，京都，鹿児島，ナガマケ，シアラ，北海道，タカマタである。その他は，蒙古人種の系統の要素が占拠した地域から由来している。そこに，比率の大きい繊細型が出生地と合致している理由と思われる。ヨーロッパ及びアジアの原始住民の研究の専門家ヂョージ・モンタンドン級の人類学者が認める如く，アイヌ人がコーカソイド型の起源となる人種系統である。(注82)
アイヌ起源の外，蒙古系統の粗野型が，白色人種と，正確にすることはできない割合で，混血することにより，ブラジル及び世界に於ける繊細型日本人の比率を増大したということはあり得ることである。(第20表参照)(注83)（訳注　判読不能の地名はそのままカナ書きした。）

3.4.9　話す言語

家庭外では，日本人の20%はポルトガル語を，14%は日本語を，64%は両語を話す。実際，84%は家庭外でポルトガル語を話すが，日本語も使っている訳である。東北伯の農業入植地の日本人移住者は，ポルトガル語を話さない割合は比較的少ない。このような事実は，土地に同化し，定着しようとする傾向の良き兆候である。(注84)
ここに，10年以上ブラジルに居住しているにかかわらず，ポルトガル語を話すことを知らない二人の家長がいたが，それは明らかに反同化態度であり，日本人である通訳を通しての質問に対し往々挑戦的になった。一例はペルナンブコ州で，他の例はバイア州であった。戦争による神経症患者，朝鮮での元戦斗員で一通訳は挑戦的態度を和らげようと努めたが一ブラジルに対する公然たる反感を示し，ブラジルは

第20表　出　生　地

摘　要	バ　イ　ア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セ　ア　ラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
ブラジル生	142	32.79	27	24.32	15	32.61	4	17.39	188	30.66
帰　化　人	12	2.77	−	−	1	2.17	−	−	13	2.12
福　　岡	10	2.31	−	−	7	15.22	−	−	17	2.77
クナマタ	10	2.31	−	−	1	2.17	−	−	11	1.79
台　　湾	14	3.23	−	−	1	2.17	−	−	15	2.44
東　　京	19	4.39	2	1.80	6	13.04	2	8.69	29	4.73
タコラザタ	2	0.46	−	−	3	6.52	−	−	5	0.81
ナガノイ	15	3.46	2	1.80	1	2.17	−	−	18	2.94
栃　　木	4	0.92	−	−	6	13.04	−	−	10	1.63
浜　　松	12	2.77	−	−	1	2.17	−	−	13	2.12
カマガナ	7	1.62	−	−	2	4.35	−	−	9	1.47
京　　都	11	1.54	−	−	−	−	6	26.08	17	2.77
鹿 児 島	15	3.46	−	−	−	−	2	8.69	17	2.77
広　　島	2	0.46	−	−	−	−	1	4.34	3	0.49
ナガノケ	16	3.70	−	−	−	−	5	21.73	21	3.42
シ　ア　ラ	18	4.16	−	−	−	−	1	4.34	19	3.10
日　　本	70	16.17	72	64.86	−	−	−	−	142	23.16
ニガロケン	7	1.62	3	2.70	−	−	−	−	10	1.64
北 海 道	30	6.93	1	0.90	−	−	−	−	31	5.06
タカナト	17	3.93	3	2.70	−	−	−	−	20	3.26
米　　沢	−	−	1	0.90	−	−	−	−	1	0.16
申 告 洩	−	−	−	−	2	4.35	2	8.69	4	0.65
計	433	99.99	111	99.98	46	99.98	23	99.95	613	99.95

訳注　判読不能の地名はそのままカナ書きした。

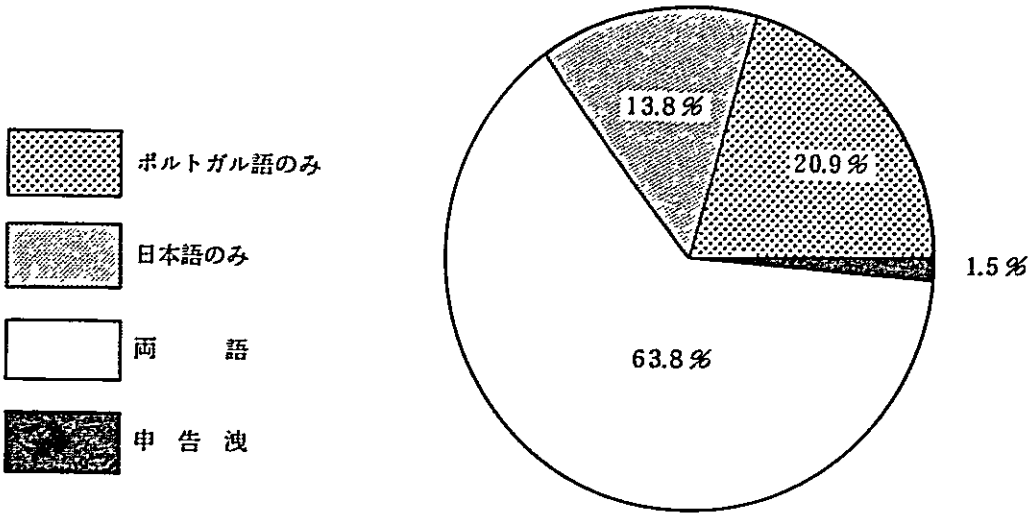
遅れた国であり，誰れも農業を知らず，全て彼等から習っていると云った。会話の過程に於て，身振り，特に顔の動きを通して，重大な事が語られていることが感知された。この二つの例外の外は，5歳までの子供達及び極く少数のもう少し年取った者一色々な理由により一が僅かにポルトガル語を話すことを知らなかった。

家庭内では66%が日本語を使い，僅かに3%がポルトガル語，31%が両語を話した。実際的には，東北伯の農業入植地の日本人の34%が家庭内でポルトガル語を話しているのである。

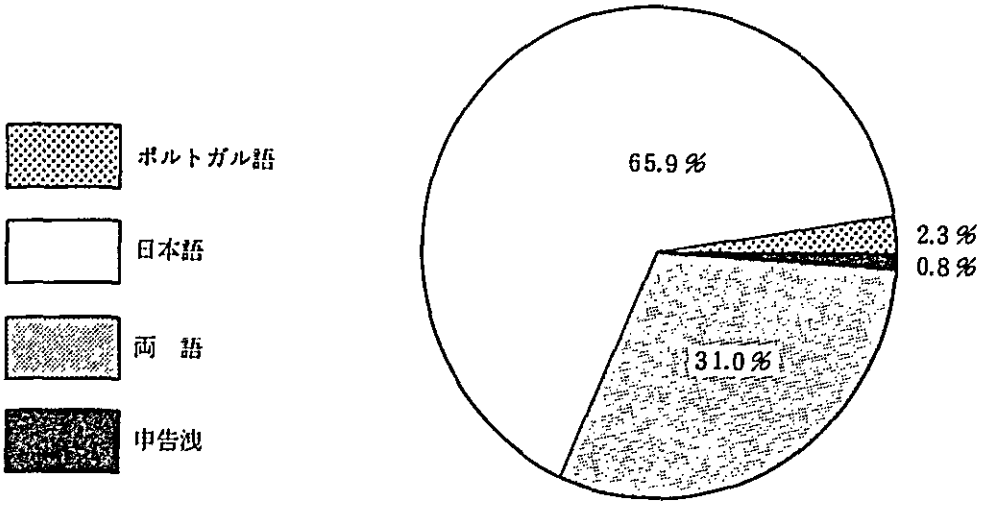
ポルトガル語を話そうとする関心を考えると，同化への傾向は好ましい状態にあり，知られる通り，移住国の言葉を知ることは，民衆間の対話を容易にし，相互に好感を生み，外国人の文化的同化のために重要な一歩である。特に，その母国語が学ぶのが難かしい国民の場合，そうである。(第21表参照)

ベリシモ・デ・メーロがピウン農業入植地（リオ・グランデ・ド・ノルテ州ニジア・フロレスタ郡）で，また，エミリオ・ウイレンスが，南部の移住地で行った若干の観察は，東北伯の日本人農業入植地に於ては極めて例外的にしか確認できなかった。このように，移住者社会の団結が加える強制，特に個人に対する家族の強制が目立っていることはもはや事実上無くなっている。異人種との結婚は保守的な年老いた親の激しい反応をもはや引き起さない。最も顕著な型にはまったような日本人はほとんど全面的に消え去っている。一つの文化が少しずつ他の文化により吸収されるのを感ずるときの一種の防衛手段として現れる反応は，日本人移住者の場合

家庭外で話す言語



家庭内で話す言語



第21表　話す言語（5歳以上）

摘　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	％	数	％	数	％	数	％	数	％
家庭外										
ポルトガル語	60	13.85	27	24.32	17	42.50	23	100.00	127	20.92
日本語	68	15.70	14	12.61	2	5.00	−	−	84	13.83
両　語	305	70.43	61	59.95	21	52.50	−	−	387	63.75
申告洩	−	−	9	8.10	−	−	−	−	9	1.48
計	433	99.99	111	99.99	40	100.00	23	100.00	607	99.99
家庭内										
ポルトガル語	9	2.07	1	0.90	4	10.00	−	−	14	2.30
日本語	284	65.58	78	70.27	18	45.00	20	86.95	400	65.89
両　語	140	32.33	27	24.32	18	45.00	3	13.04	188	30.97
申告洩	−	−	5	4.50	−	−	−	−	5	0.82
計	433	99.99	111	99.99	40	100.00	23	99.99	607	99.99

ほとんど存在しない。極めてまれに振舞いの態度に現れる病的な例があるだけに過ぎない。このような状態において，調査員を粗野な挑戦的ですらある態度で迎え，10年以上もブラジルに住んでいながらポルトガル語を話さずに通訳を通じて対話した二人の日本人を思い出すことができる。既に言及する機会があったように，戦争のショックとノイローゼの所有者である。

3.4.10　教育程度及び教育状態

5歳以上の550人の人口の内，僅かに1％が文盲に相当する。微々たるパーセンテージで，ほとんど皆無であり，全日本人口は識字化されていると見做すことができる。初等教育4年まで不完了が20％，完了が14％強，5年乃至8年不完了が32％，完了が26％，農業学校3％，技術学校2％である。

全般的に眺めて見ると，日本人は教育水準が比較的高く，ほとんど文盲がいないことに気付く。全員が，少なくとも読み，書き，計算することを知っている。

ここで，学ぶための努力を特筆する価値がある。

初等教育（初級の最初の4学年）については，努力は僅かである。何故ならば，一般的にいって，附近に，時には入植地内に，例えばリオ・ボニートの場合のように州が維持する学校があり，教材について良い援助を受け，農村師範と呼ばれる学校を卒業した初級教育卒業水準の教員を一般的に有している。時には，中等教育卒業水準の師範卒教員も居り，我々も出会う機会があった。入植地に付設された学校は良く組織され，健康的な給食を含め衛生的に管理されている。混合入植地であるので，即ち日本人入植者のみならずブラジル人入植者をも一緒にしているので，学校一何よりも文化順応の優れた手段である一に於ては，日本人児童がブラジル人児童と混じっている。日本人児童達は，休み時間の遊び，遊戯，競技，学校祭りに嬉々として参加し，あるものは愛国的性格を持っているものもあり，ブラジル人の学友とともに国歌及び州歌を歌っている。(注85)

日本人児童は，行儀良く行動する。一寸見たところでは，疑い深く遠慮深いように見えるが，先生が質ねることには普通に応え，比較的容易に覚える。

中等教育水準一即ち，初級5年から中級まで一については，費やされる努力は確かに大変なものである。10歳から18歳の間の少年及び青年であって，朝働き，時に

は午後働き一青年の場合には親を助けて，また，女も男と同じように働くことを強調して置く必要がある一朝の5時から18時まで，時には夜の19時，20時まで，食事に必要なだけの間隔を置いて働き一林野の内にある家を出て，寂しい道を歩いて普通舗装されている幹線道路まで出て，町へ行くバスをつかまえ，町にある公立学校で学ぶのである。夜間部で学ぶ者は，22時か，それ以後に学校を出て，幹線道路から家まで4キロから6キロも歩いて，真夜中かそれ以後に家に着くのである。

勉学を課する家庭の躾は厳しい。大部分の場合，体罰は見受けられない。児童及び青年は自発的に勉強する。勉強するというのは日本自体から持って来た伝統である。

5歳以上の年齢一従って，高等教育を考える場合考慮する必要のない年齢層を含んでいる一の550人の人口の内で，15人，約3％の割合が，農学を学んでいることを指摘するのは興味あることである。ほとんど全ての家で，時に本棚に，時に小さなテーブルの上に，日本の雑誌，本の傍にブラジルの本，雑誌が見出される。日本の雑誌は，ほとんど常に技術または何かの問題を専門にしたものであり，ブラジルの雑誌もまた技術，スポーツまたは文芸，ラジオ・テレビに関するものである。

東北伯の農業入植地に住む日本人の内，39％は子供を教育するのに困難に出会っていない。約14％がある程度の困難にぶつかっている。

諸困難の内で，次のものが指摘されている。交通手段の不足，40％。初等教育の第2部（第5学年から第8学年）から中等教育の学校の不足，10％。高等教育に於ては，3％が条件の不足を訴えている。金銭的困難は4.5％である。

また，適応の困難を訴えるものが4.5％あった。これ等は，日本から直接且つより最近到着したもので，未だポルトガル語を正しく話し，理解することを学んでいないものである。相互現解の不足が学習を妨げている。

これは，中等教育（初級の第5学年から中級を含む）及び大学教育に関連してである。その他の理由による困難が極く僅かなパーセントで現われている。

入植地自体内での初等教育については一特記したように一資格のある教員のいる郡または州が維持する学校がある。女教員は，ある場合には，入植地に住んで居り，教員達と生徒達の関係はより親密になり，特に日本人生徒はポルトガル語を話すこ

とをより速く学び，適応の努力を軽くする利益を得て居り，そのため先生達とより緊密な附合いを受入れる容易さが役立っている。風俗，習慣，食物の種類，生活様式，カトリック教ー未だ信仰していない場合ーへの改宗のより良い促進方法ですらある。このような状態の下で，周囲に順応の形で受け入れ，次いで同化へと進んで行くのである。祈りの言葉，宗教儀式，礼拝の歌，ある聖人に対する信心を学んで行くことにより，宗教的抵抗は少しずつカトリック教への改宗へと弱まって行くのである。

3.4.11　主要な職業

職業の内では，農業が，予想される通り，第1位を占め，専業農家が42%と目立ち，養鶏家は2.5%であり，牧畜は皆無である。若干の牛が，移住者援護担当機関，その内には土地分譲・植民会社（CRC）を含む，により，供与されたが，移住者が同時に農業と牧畜に従事することができないとして返却された。家事18%，学生28%である。厳密にいうと，家事及び学業の傍ら，圧倒的に農作業に参加していることを指摘して置く価値がある。それ故，農業労働は，養鶏家をも含めると90%（厳密には90.59%）に達する。その他の職業は微々たる比率である。特に約3%の申告洩れを考慮すると取るに足りない。

この種の計画移住において，ブラジルにとり興味のあるのは，農業入植者であったということを強調するのは行きすぎではない。農作業に慣れていたのは日本人であった。東北伯の森林地帯の空間を占め，単にブラジルの人口数を増加させるのみならず，特に食料を生産し，その供給の状態を改善するのに役立つのに充分な程度に農業を知っていた。更に，農業に使われた経験や技術を一ブラジルの農業・生態の現実により適合するものを主として一ブラジル人が吸収し活用することができればである。

日本人移住者は，日伯間の計画移住協定に定める規範に従い，ブラジルに到着するに当り，審査が行われ，肉体的・精神的健康状態，教育，農業知識が考慮される。それだけでなく，原居住地に従って，生態地理的特徴，特に土壌及び気候条件が原居住地に最も近い地域に配置された。

ブラジルに於ては，このような移住者は，良い，ある場合には優れた農業者であ

バナナ苗の広大な植付。リオ・グランデ・ド・ノルテ州ビウン入植地。

ることを示した。ブラジルの農業方式で有効と認めるものを学び，ブラジルでそれまで知られていない価値ある経験及び技術を教えた。（第22表参照）

植民は一地理学者マリオ・ラセルダ・デ・メーロと全く同感である。(注86)一引き起す可能性のある問題にも拘らず，東北伯農業に関連する諸困難の解決のため使える状態にある適切且つ有効な手段の一つであることは現在もなお変りない。ここで，一つの示唆をしたい。即ち，未開発または開発途上にある地域一東北伯の場合の如く一に於て，既存の農業入植地を適切に再組織し，また，新規の入植地を創設し，植民方式の内で，日本人労働力を何故利用しないのか。新しい入植地を創設することが可能な既存の他の入植地が所在する地域の生態状況を，天然資源，土壌の特殊

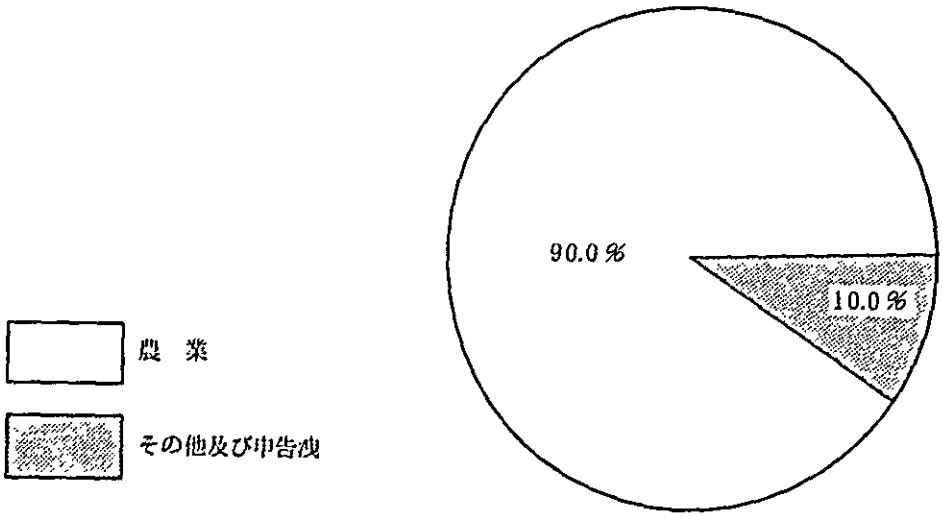
第22表　職　業

摘要	パイア(1)		ペルナンブコ(2)		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
農業	133	38.10	41	48.23	17	48.57	12	70.58	203	41.77
養鶏業	8	2.29	4	4.70	−	−	−	−	12	2.47
家事	74	21.20	12	14.11	4	11.42	1	5.88	91	18.72
学業	101	28.93	16	18.82	13	37.14	4	23.52	134	27.57
商業	−	−	1	1.17	−	−	−	−	1	0.20
職工	1	0.28	1	1.17	−	−	−	−	2	0.41
書記	−	−	2	2.35	−	−	−	−	2	0.41
軍人	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
家庭使用人	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
技手	2	0.57	−	−	−	−	−	−	2	0.41
看護婦	1	0.28	−	−	−	−	−	−	1	0.20
自由職業	10	2.86	−	−	−	−	−	−	10	2.05
商店員	6	1.71	−	−	−	−	−	−	6	1.23
針子	1	0.28	−	−	−	−	−	−	1	0.20
洗濯女	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
野天市商人	4	1.14	−	−	−	−	−	−	4	0.82
銀行員	1	0.28	−	−	−	−	−	−	1	0.20
教員	−	−	−	−	1	2.85	−	−	1	0.20
無職	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
申告洩	7	2.00	8	9.41	−	−	−	−	15	3.08
計	349	99.92	85	99.96	35	99.98	17	99.98	486	99.94

注 (1) 10歳以上
(2) 2人は2職業を申告

性，住民の健康状態，生活及び教育水準を含め，忘れてはならない。この示唆は，本件調査で集めた資料から生れたものである。資料は，一般的に東北伯農業に於ける日本人の存在は積極的な面を示している。しかも，日本人の存在は南部一主として，サン・パウロ州及びパラナ州一及びアマゾン地方で見られるように，もっと重要な状況下での，明らかに意味のある経験である。

仕　事



3.4.12　宗教　仏教正統派，カトリック教及び混合主義形態

最も低い文化水準の民族から最も高い文化水準の民族まで，全ての民族で起きるように，日本人の間でも，聖なるものと邪なるものとの対照が，(注87)神罰と社会的強制を伴い，重要な位置を占めざるを得ず，そこから人間と超自然物を近づけ，結びつける縁が生ずる。この結び目が，宗教的構造及び原動力の創造の基礎となるものである。宗教は，社会学的または人類学的観点からすれば，満足させる必要がある精神の必需品にしか過ぎない。この必要を満たすことは，あらゆる段階の聖なるものの概念，最も単純な形，粗野ですらあるものから，最も洗練された宗教組織，その概念，原理，象徴，複雑且つ卓越した儀式及び教理までを含んでいる。日本人もこの原則から逃れることはできない。宗教面では，一般的に，他の民族や国に及んでいる影響を受けて来たことを強調しなければならない。しばしば高い文化水準にある国や民族ですらも影響を受けている。

カトリック教徒は，一部は日本から直接来たもの一宣教活動及び一般的文化接触の結果である一一部はブラジルのカトリック教の影響の結果であり，30.5％で，少しずつ増加している。(注88)カトリック教は，大きくなりつつあり，若干の入植地では，セアラ州パカツーバのピオ12世植民地の如く，1969年頃建てられたカトリ

ック礼拝堂がかる。

日本の伝統的な宗教，神道・仏教(注89)あるいは単に仏教は，調査の時点で，44%であったが，カトリック教に譲りつつあり，カルデック派心霊術（訳者注：フランスの心霊術師アラン・カルデック（1804年－1869年）の始めた宗派），あるいはアフリカ的拝物教を基礎とした宗教の浸透すらも許している。時には，別々に，時には同時にである。心霊術・ウンバンダ教及びより正統的なアフリカ宗教の影響が目につく状態である。それは，ナゴ，ヴードゥー(訳者注：何れもアフリカのダオメの地方）及びコンゴ・アンゴラ地方の宗教である。

無宗教と言明した者は約23%であるが，聖堂，礼拝儀式及び僧侶を備えた組織された宗教を信じてはいないが，実際は，信じ易く迷信深いのである。不可知論者，無神論者または唯物論者である代りに，超自然現象を信じている。物理的，化学的または生物学的法則に従って説明することの出来ない事象や出来事を超経験的または超自然的原因と結びつける。文化人類学または社会学の観点からすれば，宗教は人間を超自然的存在または動因に結びつける全ての縁である。厳密にいえば，この概念に照らせば，無宗教と見做すことのできる人間または人間群は存在しない。(注90)

ブラジルの大衆的なカトリック教を通じて直接的に，また，アフリカ・ブラジルの宗教ーシャンゴー，カンドンブレー，トレー，ウンバンダーの影響を受けて間接的に神道・仏教あるいは単に仏教自身が，よりキリスト教的特徴の基盤を持った影響の傍で，奇妙な且つ複雑な重層信仰に混淆しつつある。はっきりした進化の過程にある重層信仰で，各種の宗教の要素ー聖者，神霊，旗章及び色彩の形態による象徴，概念，思想，礼式，聖歌，舞踊ーの混合が特徴であり，既に，ある場合には，新しい形態の宗教であることを示し始めて居り，その形成に入った宗教的要素と体系及び原動力で異なるが，カルデック派，ウンバンダまたは厳にアフリカ黒人の特徴が点在しているにも拘らず，仏教がしばしば識別し得る宗教であった。しばしば，仏教が受けた影響の力の大小により，宗派に細分するような印象を与える。(注91)

前2世紀頃，仏陀の宗教に一つの裂目が開かれ，二つの流れまたは傾向の発端となった。小乗仏教，伝統的に反知識で，仏陀及び古い宗規に密接に結びついているもの及び大乗仏教，進歩的で，接触に入らなければならない民族を通じて，時代と場所に応じ，師の教義を適合させ，譲歩することができるものであるが，二派は次

の要素を含む共通点で一致している。

(1) 昔からの婆羅門教の原理である霊魂の輪廻を受入ること。

(2) 至高の返報の物理的法の存在を認めるカルマ（因果応報），そのお蔭で自動的に善は報われ，悪は罰せられる，の教義の存続。

(3) 生存は悪を齎すことを認めること。何故ならば，限界を意味し，そこから不足と欲が生ずるからである。

(4) 全ての欲望の除去を達成した時のみ，幸福と完全を享受すること。この場合ニルヴァーナ（涅槃）に入ることができる。これは説明困難な状態であり，この世につきものの不完全さを特徴としているその初に於ても，未来を決定する「輪廻」の期間に於てはより一層困難である。いずれにしても，平穏と平和の状態である。キリスト教徒の天国または極楽に相当する。

第２の傾向―大乗―が，日本人一般に受入れられたように見える。

ブラジルに於て，少なくとも農業入植地の日本人との打ち解けた会話で，直接集めた情報から推論することができたものである。自由移住で，各種の職業に従事している他の日本人とでも同じである。

これと同じ見解を秋谷栄之助(注92)が採用して居り，彼はキリスト教徒の宗教的信念の不足，キリスト教徒と称し，礼拝儀礼，例えばミサに参列している者すらの信念不足を論評した後，次の通り書いている。

「同じことがアジアで起きており，小乗仏教あるいは大乗仏教が世界的規模の宗教となるに到るであろうという徴候はない。いずれにしても，宗教は不必要なものとなりつつあると推論してはならない。民衆は真剣に宗教を求めているという証拠がある。」(注93)

物質文明の非常な発展により，人間は，地球外の空間への旅行という長年育んだ夢の実現を可能ならしめる万能の科学の映像を創り出したが，高度に機械化した社会が創り出しつつある社会問題を見くびってはならない。この傍ら，世界に於ける動乱は，人間をして人間性を恢復する方向で反省させる。より人間的になることである。宗教あるいは単なる信仰を受入れることは避けられなくなる。北米自体に於て，すばらしい繁栄と物質的進歩があるように見える社会が，人種差別から逃れることができないでいる。自然な自由が如何なる力も勝つことのできない人間的必要

であるので，人間は風変りなイデオロギーの合図に振り向き，このようなイデオロギーに求めている解決を見出したと判断する。しかし，求めていたものを獲得できず失敗する。人は堅実な哲学に基礎を置いた新しい型の人道主義が必要と感じている。それは，次の世紀を指導し，人類の将来の方向を示す哲学であるべきである。(注94)

この人道主義を求める日本人は，日蓮大聖人の仏教にこれを見いだしたと判断した。それは，秋谷が強調する如く，日本人が人間哲学の精髄そのものと見做すものである。人間性に一層尊敬を起させ，人間生活の真の面を解明する哲学である。21世紀は，人間の歴史の新しい段階の責任を負い，新しい宗教の世紀と呼ばれることができるかも知れない。ハドソン研究所の著名な未来学者ヘルマン・カーン教授は人権の自由と原爆戦争の脅威の遠ざかった新時代の出現を信じている。(注95)

未来学一人類の将来を先き取りする新しい科学一は余暇の問題に対する解決策を予見することができるであろう。新しい科学がより直接的に狙っている21世紀に於ては，労働時間は確実に削減され，余暇の時間が長くなっている。そこで，起きる問題は，この時間を如何に活用するかである。今の人間が熱心に求める一時的な快楽は，将来，人間を煩わしがらせ，退屈させる恐れがある。東北伯農村に於て，移住者が大部分採用している近代仏教の哲学に従えば，人間に充実感のみならず希望の感じを与えるのは宗教の任務である。瞑想と純化を。満足のみならず人生が生きる価値のあるものになるように未だ到達していない何かを獲得したい願望，期待を。この場合，ラダクリスナンが(注96) 1955年に書いた次の言葉は現在においても価値がある。「我々は人類の歴史の決定的時機の一つに在る。人間の生活の歴史の他の如何なる時期にも，かくも過度の負担をあるいは迫害，またかくも痛ましい挫折を耐え忍んでいる人がかくも多いことはかつてなかった。悲劇的事件が普遍的な時代に我々は生きている。伝統，規律，法律，公共秩序の恐るべき弛緩が感ぜられる。社会的品位及び正義と不可分と従来見做されていた思想が一掃された。何世紀もの間，人間の行為を指導して来た思想である。怨恨と競争が世の中を分割している。諸民族を引き離している。世の雰囲気は，未来に対する猜疑，不安，恐怖で満ちている。それ故，善意の人達は，その中には人類自体の運命に関心を持つ科学者や哲学者が含まれるが，恐ろしい破滅から人類を救う目的をもって，未来に目を向けている。」(注97)この点について，ジルベルト・フレイレの適切な言葉を忘れること

はできない。人類の未来の問題に注意深く目を向けている社会学者の言葉である。

「明確に社会学的題材で且つできる限り，無差別に社会的なものと分離した研究」と社会学の性格付けについて適切な論評を行った後，ジルベルト・フレイレは見事な論文の内で，社会学者は「社会学的特性にこだわるあまり，社会研究が，専門家の相対的独立の内で，その研究との関係に於て全ての社会科学者が従うかまたは注意を払う必要がますますある相互依存性」を見失なってはならないと述べている。(注98)「社会研究の銀河」と呼ばれるものの中に未来学を置き，この社会的特殊分野は，「単に近代的なものを超えて」(ALÉM DO APENAS MODERNO)の著者に，他の文化的専門と維持しなければならない相互関係を見失なわずにいる最も正統な研究者の一人を見つけた。この点，いつものように人類学が負うべき総体的意味を自覚している人類学者であることを示した。

無為の時間，「仕事の機械化，特に近年に於ては，始まりつつある自動化が生み出した」ますます用のない時間から生ずる問題について語るに当り，「増加しつつある自由な時間の問題，暇対仕事」(注99)の筆者は，「用のないまたは自由な時間を様々に，明敏に，快楽的に，時には創造的または純化的に満たす，即ち芸術的創造，科学的発明，哲学的性格の瞑想，スポーツ活動の多様化，これ等多様化した活動に個人の最大限の参加，個人であると親族関係で結ばれた集団であるとを問わず瞑想または宗教的陶酔による閑暇の純化」(注100)という未来学者の関心に注意を喚起した。「主人の家と黒奴の家」(CASA GRANDE E SENZALA)の著者が，「仕事のない者の時間の将来を，多様化の観点から，個人及び集団を，体質，性，年齢，育ち方，願望で区別し，夫々の風に無為な個人または集団に対し，共同体の中で，その好みに応じて用のない時間を使う最大限可能な数の機会を与えるよう考える必要がある」という時もっともである。

ジルベルト・フレイレのこれ等の考察は，人類一般及び特にブラジル人の将来に関心を持つ全ての人が考え熟慮する価値がある。ブラジル化する外国人を忘れてはならない。問題となっている事例では，特に，日本人である。

秋谷栄之助(注101)は，次のように述べている。過去においては，宗教は，病気や余暇の問題を解決するために求められた。将来に於ては，物質的に満されている生活に新しい意義をつけ加えることを引受けることになる。宗教は，物質的な面でも

精神的な面でも，幸福な生活を保証するであろう。仏教は，その幸福の概念を理解することをどのように教えているであろうか。人間は，新しい熱望の満足を常に求めている。一つの欲望が満された時，決してそれで足れりとしない。例えば一つの病気が治る。他の欲望が現われる。仕事に対するより良い報酬。人間の不満足感はとどまるところを知らない。仏教では，一つ一つの欲望の充足は，相対的幸福と考えられている。健康な人も突然病気になることもあり，あるいは思わぬ事故に合うこともある。金持であっても，一瞬にして貧乏になることもある。このような状態では，人間は，完全なまたは絶対的幸福に出会うことはない。

日本人仏教徒との打ち解けた会話で，その宗教的行状を観察する機会があったので，現に実践されている仏教は，相対的幸福に対し絶対的幸福を対置することができると結論することが可能であった。どのようにか。幸福を作り出す力を備えていて，日本人仏教徒は不運を好ましいものに変える。不幸なものを幸福に変える。仏教は，どのようにこの力を使うかを示す。この力は，人そのものの内部から出て来る。個人の幸福は，社会の福祉と関連していなければならない。両者の間には相互依存関係がある。仏教は，前述の通り，他の宗教でも生じなければならない如く，強い社会的掛り合いがある。

望んだとしても，如何なる人も孤立して幸福になることはできない。仏教を信仰する日本人は，自分の幸福を社会的幸福から切離すことができないことを自覚し，確信している。特に，家族の者が不幸であるのを見ていて，自分が幸福に感ずることができないからである。多分，他の宗教よりは，より厳格に，仏教は一東北伯全体で観察できたことである一彼が幸福であるためには，社会的福祉が不可欠であると見做している。多くの日本人が一個人的にまた家族的に幸福に生活していたとはいえ一第二次大戦の際苦悩を示した。ここで，宗教が大量伝達の優れた手段として果たす役割を強調することは価値がある。

折伏一日蓮大聖人の教を通して全ての人が生命の意味に到達し，永遠の幸福に導かれるという真の願望の普及一を実践するこの仏教は，ブラジルに於ける仏陀の信徒のかなりの部分を占めるものである。未来の幸福のみならず世界平和主義国家を通じて現世の幸福を説く仏教である。ある点では，仏教はキリスト教に近づいている。キリスト教では，人は己を愛するごとく隣人を愛さなければならない。そこか

ら，仏教徒がある種のキリスト教の原理を比較的容易に受入れたことが説明される。東北伯農村地帯で観察されて来たことである。日本人入植者は，ブラジルに於て，東北伯農村住民の中に於て，単にその物理的存在をもってのみならず文化交流の色々な面に於ける要素として存在を示して来た。文化変容をしながら，ブラジル文化及びその地方的下位文化の習慣，風俗及び色々な慣行を吸収するのみならず，あれをやりこれを取るという交換の内で影響を与え，その結果時としてモザイクの様な混合を特色とした文化複合体を形成する。柔道，生花，絵画，園芸，食物，日本着物，日本語自体，既述した農業実技は勿論，この例である。日本文化のこれ等の面の全ては，ポルトガル語に翻訳された本で少しずつ普及している。それは，例えば，宗教に関して，起きていることである。数的に優勢な宗教は仏教，正確には現代仏教，ではあるが，カトリック教以外に，色々な宗教の要素が日本人に入り込んでいる。カルデック派系，黒人・アフリカ系，ウンバンダ系，多神教系，アメリカ・インディ系，ペンテコスタ派系の要素である。ペンテコスタ派は，神学的に養成された聖職者の存在を必要としないという改宗勧告の運動に採用された方法のお蔭で，広布が容易な新教教団である。

日本人及びその子孫，2世，3世が，仏教徒，神道信者，キリスト教徒及び所謂「新宗教」信者と宣言して，宗教的に自分を示す仕方に時としてある種の複雑さがある。(注102)

東北伯に於ては一日本人人口は，サン・パウロ州よりは少なく且つ居住する期間も短いということを忘れてはならない一南部の日本人集団地で起きたように，宗教的現象は，社会学的及び統計的面から研究すると非常に複雑であって，時間及び人口指数という二つの角度の下での展望が，この宗教現象につき持たなければならない正確な視覚化を損なう歪みを避けるための努力として，より注意深い研究が必要であることが感ぜられる。カトリック教への改宗者の数は増加して来ていると前述した。少なくとも，統計が我々に示すものである。自分の伝統的宗教の内に身を守っている仏教徒の日本人の子供達に起きているのは，現代仏教の傾向自体に導かれて，カトリック教に全面的に改宗したのであろうか。それとも，ブラジルに於ける支配的なカトリック教との関係において，アフリカ人奴隷について起きた如く，ニーナ・ロドリーゲスが名付けた現象である「宗教教理講義の幻想」に過ぎないので

あろうか。個々の面では現象は異なるように見えるが，一般的には似ているように見える。アフリカ人奴隷の場合には，共通する拝物教を特徴とする各種の文化集団の宗教が，強力な宗教，即ちポルトガル・ブラジル人のカトリック教と衝突した。黒人達は，自分の宗教的礼拝を行うことができなかった。主人に，カトリック宣教師に，警察に迫害されていた。しかしながら，ブラジル人達がカトリック教聖徒目録の聖人の像または画を崇めているのを確かめた。そこで何をしたか。その真似を始めたのである。しかしながら，カトリック教の像及び画の背後にアフリカの神を隠していたのである。黒人奴隷達が礼拝していたのは生れた土地の神であった。全ての人が改宗は成し遂げられたと信じていた。実際は，単なる見せかけがあったに過ぎない。このように，改宗者として受入れられていながら，元の宗教を自由に実践することができたのである。

初めの頃に起きたことは，社会学的あるいは人類学的順応の過程であった。化学で起きる混合と対比することのできる過程である。速い，自覚した，表面的な過程で，一瞬の内に作用し，黒人達は，この過程に気はつくが，その精神構造には届かず，アフリカを向いたままであった。即ち，アフリカの拝物教の神々に向いていた。色々な宗教から来た神々の構成は，化学の混合物でのように容易に識別し得るものであった。

日本人の子孫の多くは，同僚や友人と違って見えないための解決策として，カトリック教を受入れたという印象を我々は持っている。社会的圧力に屈して，問題を解決する一方策である。圧力は，知らず知らずの内に，同僚や先生からすら，小学校の時から現れてくる。小学校では，このような圧力はより強く加えられる。カトリック教の儀式に従った結婚式もこの例である。この儀式から逃れる日本人の子孫は，違っている，いささか順応していないものとして，同じように行動するよう圧力をかけられていると感ずるであろう。それ故に，アフリカ人奴隷に起きたと同じにである。時間がたつとともに，文化的適応，ブラジル化が，同化の過程のお蔭で多分起きるであろう。また，文化変容的，混合的過程のお蔭によってもである。

日本文化の西洋化，特にアメリカの包括的影響下の西洋化とともに生じつつある珍らしい現象に注意を喚起することは時機を失していないであろう。ブラジルに於ける日本人移住者及びその子孫で構成されている「るつぼ」は，同種族内結婚によ

る結合力を維持するため充分な力を持たないため,(注103)また，宗教的多様化を考慮すると，二重に，時には3重に，単一でなく，一貫性なしに，現われる。かくて，仏教徒，カトリック教徒及びアフリカ・ウンバンダ・カルデック派集団を見別けることは左程困難ではない。このような事実は，日本人は，ブラジルに於て，他の民族集団で起きている人種的にも文化的にもブラジルの住民と称する一般的な稀薄液の内に溶け込まない異物体を形成するのとは反対に，前世紀の終りまたは今世紀の始め頃まで存在していた文化的距離や西洋人と東洋人の間の肉体的型の差異によって作られたステレオタイプを持たないという，調査に基づいた概念を支持するものである。(注104)

似たようなことが東北伯でも起きているように見える。異なった影響により日本人の子孫は宗教的に順応しているとはいえ，厳密には，改宗は生じていない。改宗とは，カトリック教の価値，象徴，概念を全面的に受入れ，仏教をまた全面的に無視するという意味である。時間がたつに従って，適応化の過程の結果として，改宗することはあり得る。ゆっくりとした，無意識の，深い過程で，その結果，宗教的精神状態の変化が生ずる。この過程は，化学的成分の化合を思わせるものである。一般的に起ることは，最初は防衛の順応過程で，日本人の子供達が共に生活している若い社会により良く適応することができることである。いずれにしても，社会・文化的統合の良い途である。同化への途である。満足すべき且つ深く滲透する文化的吸収で，単に表面的でないという意味ての同化である。

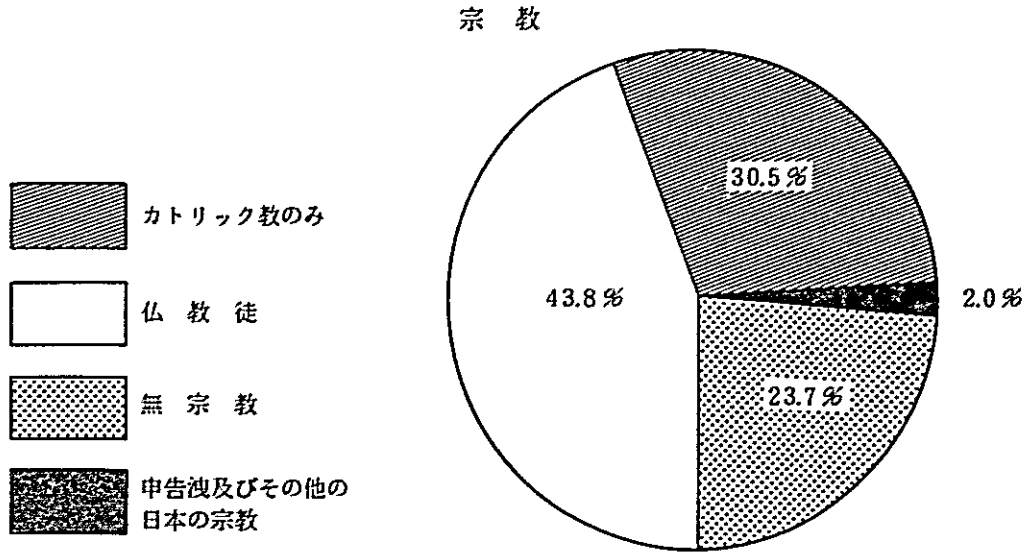
文化関係の問題の宗教分野で若干論評をすることが許されると思う。日本人の宗教心の色々な面の内，東北伯人に特に，そして一般的には全ての民族に起るように一神秘主義は，レビー・ブルール説に従えば，所謂原始的精神構造の特殊性ではなく，程度は異なるが，全ての民族の一般的な傾向である(注105)—日本人移住者は，信じ易く，著しく迷信的ですらあることを示している。特に，狼人間や狐火の如き妖怪を信じている。前者は，やや世界的であるが，一般的にブラジルの，そして特定的に東北伯の話であり，後者は，他の影響もまた含んではいるが，典型的にインディアン的な話である。ペルナンブコ州で一日本人入植者から頭のない騾馬が暗い夜の森を馳けるのを見たという話を聞いたことを思い出す。

東北伯の日本人の典型的に東洋的な屋根をした若干の家では一その入植者達は経

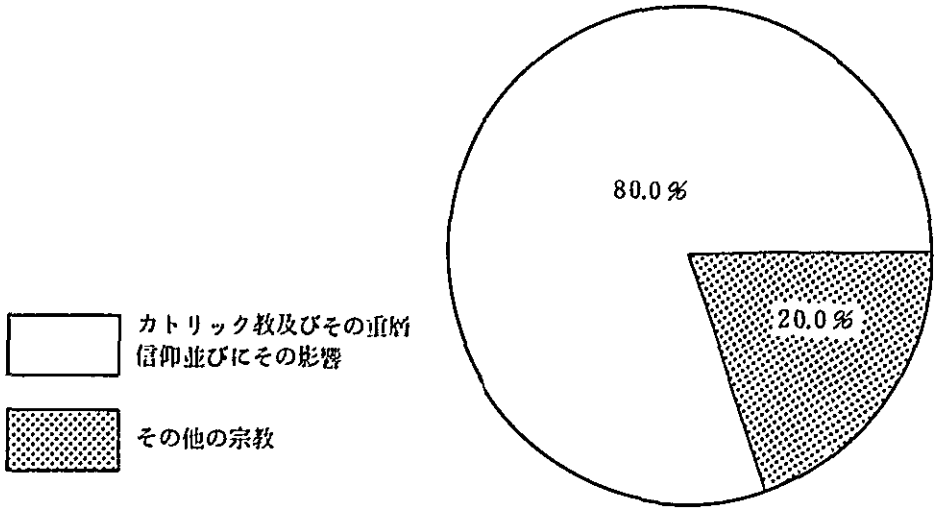
済的により恵まれており，東洋建築の著しい特徴を認めることができる一玄関，即ち，それは小さな寄りつき部屋で，訪問者は履物を脱ぐが，家の内部と区切られており，内部は聖なる場所または宗教的尊厳の場所と見做され，より親密な関係の人または家族の信頼のある人だけが入ることができるのである。一種の清めの儀式であり，清めは，細部に関しては差違があるが，他の宗教の儀式にもある行事である。例えば，アフリカ・ブラジル系拝物諸宗教及びイスラム教がこの事例である。(注106)

東北伯の日本人の家の若干の内部で，床の間，神道の神を収める壁がんの一種を見る機会はなかったが，厨子のみならず本当の仏教の拝壇（仏壇）まで見つけることが出来た。これ等の厨子の近くまたは拝壇の段に跪きまたは立ったままで，日本人は毎日の祈りを行う。明白な祖先崇拝の習慣の続きとして，死亡した親族または友人，彼等にそそいだ愛情から好ましいと思われる人達の名前が厨子の前または拝壇の卓上に置かれた板片に書かれている。

葬式での諸慣例が宗教的含蓄を示すので，東北伯の農業入植地の墓地内の墓が示す体裁に注意を喚起することは不適当なことではない。一般的に仏教の影響を受け，日本人の墓は，木の桂または杭であり，まれにコンクリート製のオベリスク（方尖塔）を思わせるものがある。このような杭は，縦に長さが異なっておりーバルド



宗教—カトリック教またはその顕著な影響との重層信仰を考慮に入れて



ス及びウイレンスがサン・パウロ州レヂストロ市の墓地で観察したように(注107)—一方に死者の名前が，他方に死亡の日付が書かれている。屢々また日本語で「平和に休め」の意味の言葉が書かれている。

東北伯では，カトリック教との重層信仰への傾向に拘らず，レヂストロでバルドス及びウイレンスが見付けたように，板片が横に交叉した杭，キリスト教の十字架を真似たと思われるものを見付け出すことはできなかった。しかし，観察しなかった何処かの墓地にあり得るであろう。

第23表　宗　教

摘要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
カトリック教	92	23.40	36	32.43	32	69.56	14	60.86	174	30.36
仏教	183	46.56	51	45.94	9	19.56	8	34.78	251	43.80
無宗教	107	27.22	24	21.62	5	10.86	—	—	136	23.73
生長の家	2	0.50	—	—	—	—	—	—	2	0.34
日蓮創価	1	0.25	—	—	—	—	—	—	1	0.17
天理教	8	2.03	—	—	—	—	—	—	8	1.39
計	393	99.99	111	99.99	46	99.99	23	99.99	573	99.99

3.5　動機（家長のみ）

3.5.1　移住発生率の高い年

1933年以降，移住の発生率は低く，微々たるものですらある。（第24表参照）東北伯に対する移住者の流れの減少は，南部地域でのより良い労働条件のためである可能性がある。南部では，伝統的に存在する入植地の外，新しい入植地が創設され，夫々に新しい日本人移住者がこの地方へ赴いた。しかも，また，バイア州の南部に新しい農業入植地が日本人の参加を得て創設されたが，本調査の資料蒐集の後であったため，利用されなかった。それ等の中に，イリェウス，カラベラス及びロマント・ジュニオールの入植地がある。

統計資料は，東北伯に対する移住発生率の高かった年は次の通りであることを示している。

1956年	17.5％
1959年	10.5％
1960年	29.0％
1961年	18.5％

3.5.2　「魅力」の理由及び配置

日本人コロノにブラジルに来る気を起させた動機の内，土地入手の容易なこと（53.5％）及び所謂うまい話（22.5％）が特筆する価値がある。

第1の場合，単に生活空間だけでなく，移住者が農業者として活用されるという意味で有利な可能性があることを理解しなければならない。それだけではなく，金融的援助，技術的指導及び農業労働を良い結果を得て営むことができる条件がある。

第2の動機は，ある意味では，第1を補足するものである。即ち，仕事を求め，長く居付く意志があり，単に金を稼いで，さっさと帰ることを目的としていない外国人をブラジル人の側で，心良く受入れてくれることを考慮に入れなければならない。外国人は，農業に関連するものを含め色々な面でのブラジルの習慣及び生活方式を受入れる用意があるのみならず，経験を持込むものである。経験の多くは，ブラジルの問題―特に農業―と両立するので，地元民が利用できるものである。

第24表　移住発生率の年率（15ケ年間）

摘　要	バイア		ペルナンブコ		ルオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1933年	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
1941年	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
1951年	−	−	−	−	1	9.09	−	−	1	0.86
1952年	3	3.84	−	−	−	−	−	−	3	2.60
1953年	8	10.25	−	−	−	−	−	−	8	6.95
1954年	1	1.28	1	4.76	−	−	−	−	2	1.73
1955年	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
1956年	13	16.66	−	−	7	63.63	−	−	20	17.39
1957年	4	5.12	−	−	1	9.09	−	−	5	4.34
1958年	−	−	2	9.52	−	−	−	−	2	1.34
1959年	5	6.41	4	19.04	2	18.18	1	20.00	12	10.43
1960年	24	30.76	4	19.04	−	−	4	80.00	32	27.82
1961年	11	14.10	10	47.61	−	−	−	−	21	18.26
1962年	4	5.12	−	−	−	−	−	−	4	3.47
1963年	2	2.56	−	−	−	−	−	−	2	1.73
申告洩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	78	99.99	21	99.99	11	99.99	5	100.00	115	99.99

その他の動機は，控え目なもので，殆んど取るに足りないものであり，より大きい比率のものの補強として価値がある。その中には，生活のより良い可能性，良好な気候，保証された仕事，適応の過程で助けになってくれることのできるブラジルに居住する親族，人種差別が無いこと，天災地変が存在しないことがある。ここで若干の解説の要がある。生活のより良い可能性は，主として，公的機関の手形保証付売買予約契約で取得した土地を含んで居り，土地は確定的に所有することができるが，一般的にいって，全て労働意欲と能力に依存するものである。気候については，日本の，特に一部の地域の気候と比較すると，例えば奥地では旱魃の激しさがあるとはいえ，苛酷ではないことは明らかである。確実な仕事は，ブラジルと日本間の協定により，計画移住の方法で保証されており，移住者を必ずしも常に成功す

るとは限らない冒険の危険から免かれさせ，最も重要な利益であることは疑いない。この動機は，移住者として他国に入って来る外国人にとって，事実，相当意味の深いものである。受入国に親族が居ることは，社会・文化的適応をより良く且つより容易にする要素として役立つ。既に社会的に周囲に慣れた彼等を通じて，文化的同化の苦労は少ないであろう。

真に重要な他の動機は，人種的差別が存在しないことであるに違いない。特に，粗野型といわれる日本人が一部属して居り且つヨーロッパ人及びブラジル人の大部分が属するコーカソイドの人種集団と非常に異なった特徴を有する蒙古系の如き人種の場合では，そうであろう。過去に在った人種的反感は，日本人とのより大きい接融のためのみならず，ブラジル人が，その先祖の中にインディオが居り，インディオは圧倒的に蒙古人種集団から出ているということを納得したため，一般的に消滅した。

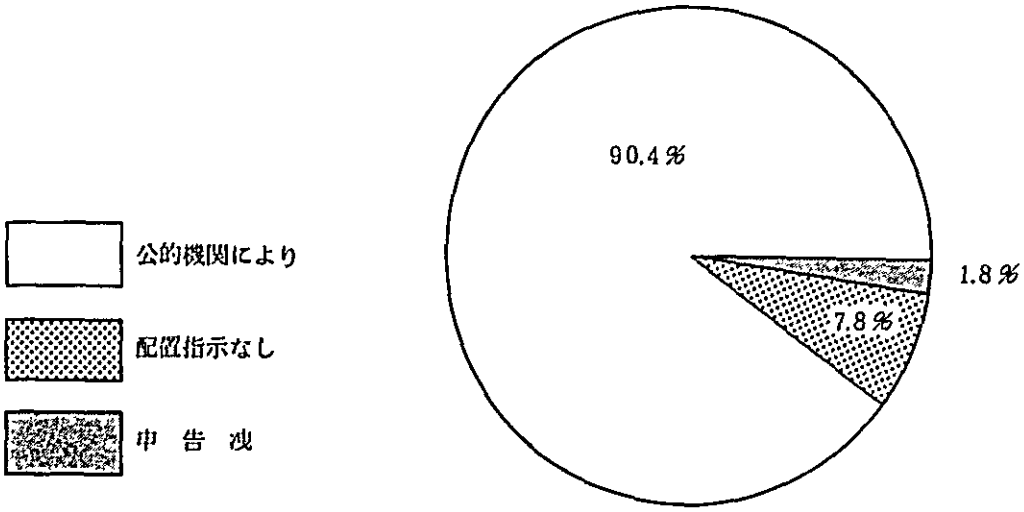
天災地変に関しては，日本人が，ブラジルを恵まれた国と見做すのはもっともである。ここで，日本を非常に悩ませる地震に対し最大の力点が置かれる。事実，ブラジルの若干の地点で記録された，大きな結果もない軽微な土地の震動を除いては，ブラジルは，日本人を含む他の諸国民に，自然が非常な害を加えるこの災厄から免かれている。

しかしながら，他の種類の天災がブラジルでは起きる。旱魃，洪水，降雪である。しかし，それでもその影響は地震とは比較にならない。

従って，ブラジルを選択することは，真に意味のある動機に基づいて行われている。（第25表参照）

東北伯に来た日本人は，南部及びアマゾンに行った者と同様に，日伯協定の重要点である計画移住の利益を受け，農業活動への確実な配置のため公的機関を利用し，教育，娯楽，医療・衛生の外，技術及び金融援助を保証されていた。それ故，東北伯に来た移住者の 90.50 %は公的機関により配置されたことは不思議ではない。（第28表参照）他の国を選ばざるを得ないとしたらどこを選ぶかとの質問に対し，60%は，ブラジルでうまくやっている以上，他の国を選ぶ気持はないと答えている。（第27表参照）

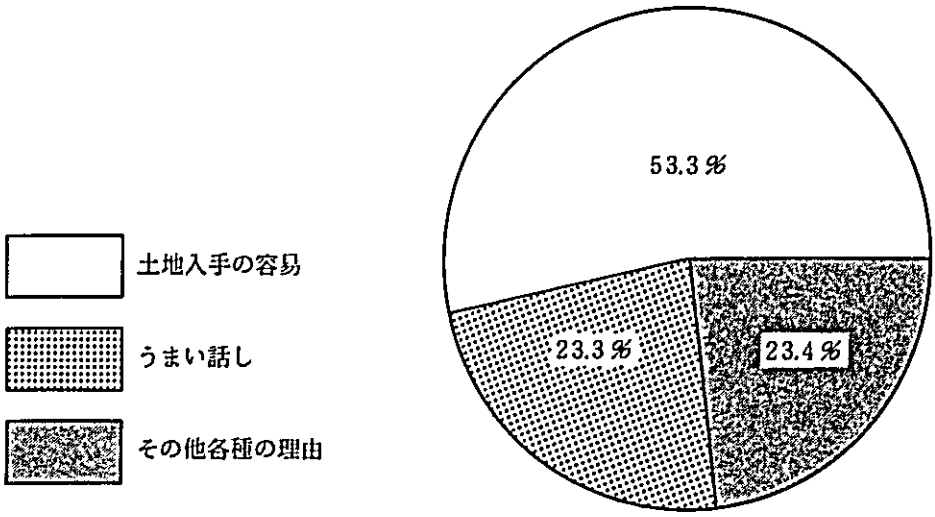
配　置



第25表　「魅力」の動機

摘　　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
土地入手の容易度	52	53.06	13	61.90	6	54.54	2	28.57	73	53.28
ブラジルのよい情報	24	24.48	3	14.28	2	18.18	3	42.85	32	23.35
生活のより良い可能性	4	4.08	−	−	−	−	−	−	4	2.91
良い気候	7	7.14	−	−	1	9.09	−	−	8	2.53
日・伯協定	2	2.04	2	9.52	−	−	−	−	4	2.91
ブラジルに於ける親族の存在	5	5.10	−	−	1	9.09	−	−	6	4.37
ブラジルを助ける	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.72
冒険心	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.72
ブラジル政府の招請	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
人種差別の不存在	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.72
旅費の便宜	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
天災地変	−	−	−	−	−	−	1	14.28	1	0.72
夫に同伴	−	−	−	−	−	−	1	14.28	1	0.72
親に同伴	−	−	−	−	1	9.09	−	−	1	0.72
申告洩	4	4.08	−	−	−	−	−	−	4	2.91
その他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	98	99.99	21	99.99	11	99.99	7	99.98	137	99.99

「魅力」の動機



3.5 3　嫌気の理由

「嫌気の動機」と呼ぶことのできるこれ等の原因は，ブラジルを選んだことと歴然と関係がある。土地の不足及び人口過剰は，夫々58%及び24%であるが，日本出国を決心させた主な動機であった。(注108) その他の動機はほとんど意味のないものである。移住の過程に於て，また作用する「魅力の動機」は，ブラジルの場合，日本との関係に於ては明らかに「嫌気の動機」と合致する。送出国に於ける土地の不足は，対照として受入国に於ける土地の広大さがある。さらに，人口過剰は人口稀薄に対応する。

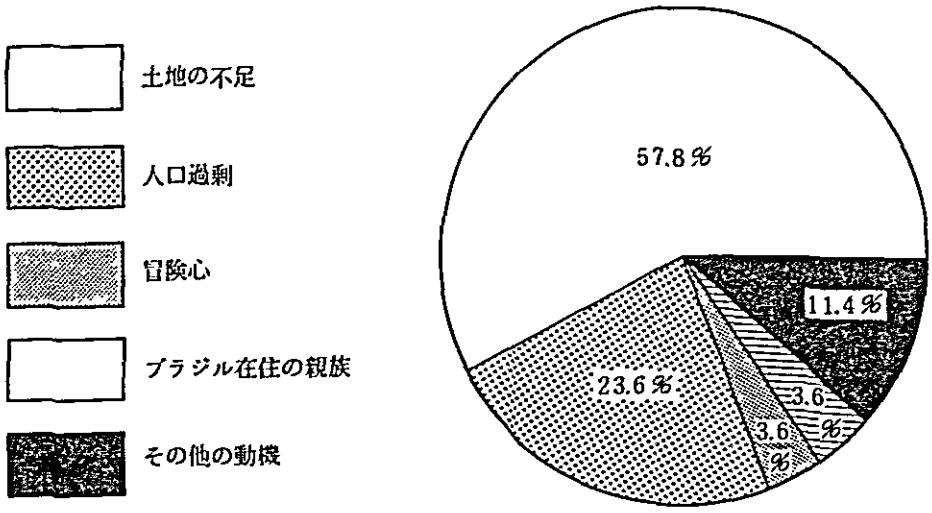
「嫌気の動機」は「魅力の動機」と釣合いがとれ，二種類の諸問題は，相互に反対であるが，解決できるようになっている。単に理論的にのみならず実際的にもである。即ち，日本の高人口密度は，人口の均衡によって安定し，ブラジルの人的実動現員の稀薄は，単なる土地占有の過程によってではなく，生産能力を持つ移住者によって軽減される。ブラジルにとって，その空地を職業的に無能な者や病人で埋めることには興味はなく，健康な人で，望ましい生産を実現できる状態にある労働力を持った人で埋めることに関心がある。

しかしながら，一つの事実を想起する価値がある。第二次大戦までは，日本は古

い且つ深く神秘的な根を持つ文明に執着し，ヨーロッパやアメリカの西洋文明の諸国に於て発展しつつあった進歩や技術のリズムに追随しなかった。それ故，豊富な労働力に対し仕事が不足し，労働者は暇になり，問題を作ることになると我々には思われる。仕事の面では，農業が伝統の国であり，日本は土地の不足のため，遊んでいる労働力を吸収するため，少なくともその一部を利用するため効果のある工業労働市場もなしに，困難に直面していた。戦争終了直後，東北伯に来た日本人の初の頃のグループは，現代テクノロジーの製法や技術になれていない人達に属していた。そのほとんど全員が耕す土地を求める農民であった。

日本文明の西洋化に伴い一日本文化にとり最大の重要性を示していた象徴の粉砕を引き起さないため裕仁天皇を保持し，急速に発達しつつある技術の推進を阻害しなかったアメリカ人の駐留の影響のお蔭で一日本人のものの見方が変り，西洋の文化的価値，象徴及び雛型を受入れた。科学及び技術の分野で色々な仕事が出現し，従前遊んでいた労働力を吸収し，唯一且つ重大な問題は人口過剰であるとの印象を与えたが，その時，我々の見るところでは，他の問題，即ち労働市場の不足が同時に働いていた。後者は，ある面では，多分前者に優っていた。西洋化し，日本は，科学及び技術の色々な分野で発達し一逆説に見えるが一軍事的敗北とともにすばらし

嫌気の動機



第26表　「嫌気」の動機

摘　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
土地の不足	58	58 00	13	61.90	6	54.54	4	50.50	81	57.85
人口過剰	24	24.00	6	28.57	3	27.27	−	−	33	23.57
冒険心	2	2.00	1	4.76	−	−	2	25.00	5	3.57
ブラジル在住の親族	5	5.00	−	−	−	−	−	−	5	3.57
酷寒	3	3.00	−	−	−	−	−	−	3	2.14
低収入	2	2.00	−	−	−	−	−	−	2	1.42
過当競争	1	1.00	−	−	−	−	−	−	1	0.71
原子力攻撃の恐怖	2	2.00	−	−	−	−	−	−	2	1.42
倒産	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.71
子供の教育の困難	−	−	−	−	−	−	1	12.50	1	0.71
天災地変	−	−	−	−	−	−	1	12.50	1	0.71
政治的理由	−	−	−	−	1	9.09	−	−	1	0.71
その他の理由	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
申告洩	3	3.00	−	−	1	9.09	−	−	4	2.58
計	100	100.00	21	99.99	11	99.99	8	100.00	140	99.99

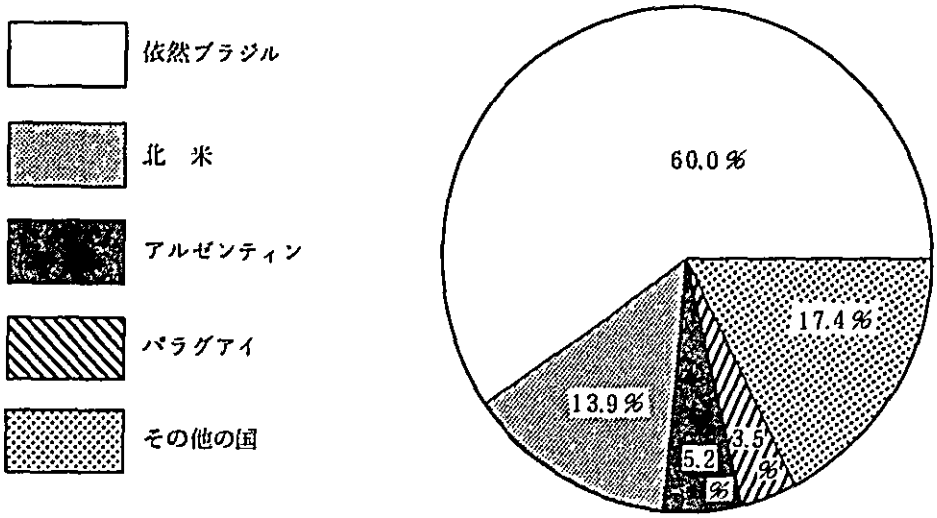
注．セアラ州では，若干の被調査者は1つ以上の動機を挙げた。

い文化的勝利を獲得した。（第26表参照）

日本の民衆及び高官達は敗けたとは思っていない。今日日本は，世界の大国の一つであり，商船のみならず軍艦の建造の如き所謂重工業を含め，特に工業部門に於て，大国である。しかしながら，それは，日本に人口過剰が存在せず，移住が一特に農業分野に於て一ブラジルの如き，移住受入国の政策により統制と協定の制度の下で対処し得る必要なものではないということを意味するものではない。

移住者が日本で営んでいた活動は58%が農業で，その他は，他の職業を営んでいたが，農業に関連した知識をまた持っていた。古い日本の伝統に従い，日本人で，土地を耕し，植え，小学校以来学んで来た技術を採用し，時に個人の創意で改良し実用的に利用し，耕作できないものはいない。（第29表参照）

もし他の国を選ばなければならないとしたらどの国を選ぶか



第27表　もし他の国を選ばなければならないとしたらどの国を選ぶか

摘　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	％	数	％	数	％	数	％	数	％
アメリカ合衆国	14	17.94	1	4.76	1	9.09	−	−	16	13.91
アルゼンティン	5	6.41	1	4.76	−	−	−	−	6	5.21
パラグアイ	3	3.84	1	4.76	−	−	−	−	4	3.47
カナダ	1	1.28	−	−	1	9.09	−	−	2	1.73
ドミニカ共和国	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
南アジア	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
インド	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
中国	1	1.28	1	4.76	−	−	−	−	2	1.73
ジャワ	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.86
香港	−	−	1	4.76	−	−	−	−	1	0.86
日本に残留	−	−	−	−	−	−	4	80.00	4	3.47
選択せず	48	61.53	13	61.90	8	72.72	−	−	69	60.00
その他の国	−	−	−	−	−	−	1	20.00	1	0.86
ブラジルに行かない	1	1.28	−	−	−	−	−	−	1	0.86
申告洩	2	2.56	2	9.52	1	9.09	−	−	5	4.34
計	78	99.99	21	99.99	11	99.99	5	100.00	115	99.99

第28表 配　　置

公的機関を通じて配置	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
然り	74	94 87	16	76 19	9	81.81	5	100.00	104	90 43
否	4	5 12	3	14 28	2	18.18	—	—	9	7.82
申告洩	—	—	2	9 52	—	—	—	—	2	1.73
計	78	99 99	21	100.00	11	99.99	5	100.00	115	99.99

第29表　日本で行っていた活動

摘　要	バイア		ペルナンブコ		リオ・グランデ・ド・ノルテ		セアラ		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
農村にて										
農業者	45	52.94	13	59.09	4	36 36	5	100.00	67	57.47
養鶏者	5	5.88	—	—	—	—	—	—	5	4.06
畜産者	1	1.17	—	—	—	—	—	—	1	0.81
都市にて										
職工	6	7.05	6	27.27	1	9 09	—	—	13	10.56
学生	9	10.58	—	—	3	27.27	—	—	12	9 75
商店員	4	4.70	—	—	—	—	—	—	4	3.25
機械修理工	4	4.70	—	—	—	—	—	—	4	3 25
自動車運転手	4	4.70	—	—	—	—	—	—	4	3 25
船員	2	2.35	—	—	—	—	—	—	2	1.62
電気工	2	2.35	—	—	—	—	—	—	2	1.62
商店主	1	1.17	1	4.54	—	—	—	—	2	1.62
軍人	1	1.17	—	—	—	—	—	—	1	0.81
鉱夫	1	1.17	—	—	1	9 09	—	—	2	1.62
指物師	—	—	1	4.54	—	—	—	—	1	0.81
獣医	—	—	1	4.54	—	—	—	—	1	0.81
家事従業員	—	—	—	—	1	9.09	—	—	1	0.81
事務員	—	—	—	—	1	9.09	—	—	1	0.81
申告洩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	85	99.99	22	99 98	11	99.99	5	100.00	123	99.99

注　ペルナンブコ州では，回答者の1人は2の活動を答えている。

3.6　費やした努力と対比した満足感

一般的に東北伯の日本人移住者は，費やした努力と対比して満足して居り，30%は満足していると，50.5%は普通の状態にあると打明けている。

満足感が，州によって，また，同じ州の内で，入植地によって異なることは明らかである。全ては，土壌や，水入手の容易度や，技術的・金融的援助や，子供の教育の可能性の諸条件次第である。

ペルナンブコ州に於ては，例えば，カーボ入植地は，過去の甘蔗栽培により疲弊した，水利及びその他農業に必要な条件の悪い痩土のところに在る。それが，ボニートでは，入植地は雑木林に蔽われた山に囲まれた素晴しい峡谷に在り，土地は肥沃であり，出来の良い生産物は，レシフェ市サンタ・リタ岸壁にある日本人協同組合に出荷され，そこからレシフェ市は良質の果実，野菜，卵及び鶏の供給を受けている。

しかしながら，植民農地改革院（INCRA）の創設前に，同一の任務を持った二つの機関，農業振興院（INDA）及び農地改革院（IBRA）が活動していた。INCRAが出現する直前，最初噂さの形で，後に確認された形で，INDAが消滅し，IBRAだけになると言うニュースは，ボニートの日本人入植者の間に由々しいパニックを引き起し一入植地はINDAが管理していた一若干の家族が周章して逃出すまでに到った。その当時，混乱は大変なものであった。日本人入植者は，前もって準備した苗床を使う段階にあり，資金が何倍も必要であり，困難な状勢に在って，INDAに援助を求めたが，INDAはもはや権限もなく，行動する状態にもないと言い，IBRAに救いを求めれば，INDAの吸収について何等具体的なものがないので，措置を取る許可を得ていないと言う暗澹たる返事を受取っていた。

入植者達は，数百万旧クルゼイロを費した苗床を救うため，貸付金による融資を必要としていた。融資を獲得できなくて，絶望して，当てもなく，入植地を離れていった。

間もなく問題が解決し，INCRAが出現し，ボニートの入植者の信頼を回復し，それとともに入植地を放棄した者が復帰して来た。

ブラジルに於て費した努力に満足している良い徴候は，永住をしたいという希望の中にある。日本人移住者の家長の90%は残ることを希望すると答えている。申告

洩れの10％は言うに及ばない。同じようなことが子供達についても起きている。80％は，受入れてくれた国に残ることを選択した。更に，10％が申告しなかったことを記録して置く価値がある。（第27表参照）

ブラジルに於ける日本人移住の成功のためには，日本政府の移住政策の考え方が大いに貢献したに違いない。即ち，移住者送出は，人を移動させる単なる行為としてではなく，人を送り出し，受入国を手助けする能力を考慮し，新しい環境に根を下し，自分の生活水準を良くするのみならず，移住者受入国の発展に活発に参加すると言うものである。日本は，国際関係を深め，緊密にする方向で，この移住の概念を使て来ている。この政策により，移住者は経済的，社会的に向上し，利益を受けて居り，送出国は人口過剰から生ずる問題を軽減し，受入国は，厳に経済的観点からのみならず一般的に社会・文化的観点から繁栄し，発展することがより容易になるであろう。(注109)日本人の定着には，日本の移住機関（海外移住事業団）の行政政策が非常に有効であったことは強調し過ぎることはない。

日本人移住者は，受入国に，ブラジルの場合，ブラジルの法律及び規定に従い，ブラジル国内及び国外に設置された代表機関及び代理機関を通じ，確定的に定着するため心理的に用意がなされて居り，ブラジルでは，海外移住事業団に結び付いた二つの機関，ブラジル法人であるJAMIC（移住植民会社）及びJEMIS（金融援助会社）が活動している。前者は，東北伯でも活動している。

3.7　技術的・経済的状態

3.7.1　使用可能な面積及び使用中の面積

耕作可能の面積の約半分は，主として，野菜及び果樹栽培に利用されている。残りは，手入れ及び農業利用を待っている。ペルナンブコ州の場合は特に，遊んでいる地域の一部は，疲弊した土壌であり，養分が乏しく，その養分は，たまに，山焼の結果生じたものであり，そこで，長年月甘蔗栽培が繰返されていたことは事実である。同じ現象が他の州でも，大なり小なり起きている。これ等の場合全てにおいて，土地は肥料を使って人工的に養分の補給を必要としている。この肥料は，高い金を払って買うか或は日本の経験により，買った材料を加えるとは言え，居住地区自体内で容易に入手できる材料でもって，作ったもの（有機肥料）である。日本人並びにブラジル人に渡された土地の大部分は硅酸粘土質であり，そのことが養分の減少を助けて居り，僅かな部分が全面的に粘土質であるに過ぎない。

灌漑可能な面積の内，ほんの一部が，水力システムの中で，時に地表で，時に懸垂式で，重力の力に主として頼って，利用されて来ている。残りでは，灌漑は，雨期の期間中の降雨を頼りとして，自然に行い，殆んど或は全く降雨のない時期のため，大量の水を蓄積して，用心深く，自衛している。

バイア州に於ては，水の問題は，日本人農業入植地が，殆んど一年中，断続的に降雨がある湿森林地帯に所在し，事実上，人工的灌漑を必要としないため，それ程厳しいものではない。この事例に当るものが例えば，マタ・デ・サン・ジョアン，イツベラ及びウナである。

ペルナンブコ州カーボ郡，リオ・グランデ・ド・ノルテ州では特にニジア・フロレスタ郡（ピウン入植地）及びセアラ州パカツーバ郡（ピオ12世入植地）では，水の困難は，往々農作に重大な齟齬を来たすことがある。

東北伯の日本人農業入植地では，農作の外，養鶏が殆んど常に，商業的に行われている。毎月約1万羽の鶏が屠殺用に使われ，4,000個の卵が毎日売られている。鶏舎は，技術的に組織されているが，大規模生産のための精巧な状態には未だ到っていない。セアラ州及びリオ・グランデ・ド・ノルテ州では，養鶏生産は僅かで，良い商業条件には無い。

3.7.2　住居用家屋を含む改良工事

バイア州では，1956年乃至1967年間に73の住居及び3の畜舎が建設された。ペルナンブコ州では，同期間内に，19の住居，12の鶏舎，総延長2,600メートルの12の灌漑水路，10の物置及び倉庫。リオ・グランデ・ド・ノルテ洲では，6の住居，1鶏舎，延長70メートルの1灌漑水路，1キロメートルの柵，1の物置，4のモーター及び4の放ち飼育のための囲い柵。セアラ州では，2の住居，1の鶏舎，1の物置が建設された。最後の2州に於ても，また同期間内である。建設された住居用家屋は全て煉瓦作りで，床は経済力により，寄木細工かタイル張りであることは記録して置く価値がある。建築，特に住居に充てられたもの，に関しては若干の論評を加えることができると思われる。無意識な防衛機構に従い，それはユングの理論に或る程度まで当て嵌まるものであるが，日本人は，新しい環境に心理的により良く適合するために，生態的条件のみならず文化的条件の差違を緩和することのできるプロセスを実行に移し，多くの場合，東北伯全体で，日本の住宅建築の伝統的モデルに従った住宅を計画し，建築した。そのモデルは，同時に宗教的または神秘的であるとともに機能的であり，特に四季の或る時期に屋根から雪の落下を容易にするようなものであった。かくて，調査した農村地帯で，多層の，二重，時には多重で，上に行く程小さい屋根の家屋が常に在るのを見付けるのは困難ではなかった。或るものは，日本風のかすかな徴しがあり，他のものは非常に良く似ていて，森の内に植え込まれ，深い植物の敷物から浮び出るような印象を与え，写真で見ると，不用意な見物人が日本の風景の一部であると考える程紛らわしいものである。日本の古い文明の聖なる塔を思わせるような家である。バイア州のマタ・デ・サン・ジョアンには素晴しい建築見本が在る。

ブラジルに，建築のスタイルからして，出身地に普通にある家と似た家を持込むことにより，日本人，特に老令者は，伝統的な神に対する尊敬を持った著しく宗教的基礎の深く根を下した文化的連繋を未だ保持しているので，より気楽に，よりホームシックにならずに，より困難少なく地理的・文化的に環境に適応し，環境は少しづつ見馴れないものでなくなって行くのである。同じことが食習慣についても起きている。日本人は，ブラジルに食習慣並びに料理の技術，方法を持込んだ。同様に台所道具を持込んだ。時間が経つとともに一人類学的に正常な現象である一外国人

は，ブラジルの習慣を採用して行くのである。少しづつ，ブラジル文化の雛型を受入れて行くのである。住居用の家屋は，ブラジルの住宅と同じになって来る。ブラジル料理の型の食事は，最初は我慢されているに過ぎないが，嬉んで受入れられるようになる。当初の抵抗は減じて行き，譲歩が少しづつ行われて行き，満足すべきものと見做すことのできる水準での物的及び心理社会的同化にまで到るのである。

住居の家屋は，家族の経済的状態により，立派な農園住宅から，粗末な建築の貧しい家屋まで，煉瓦造りではあっても屢々内部の粗漆喰すら無いものまで上下している。若干の入植地では，ペルナンブコ州のカーボ入植地，リオ・グランデ・ド・ノルテ州のニジア・フロレスタ入植地の如く，家屋は殆んど日本伝統の家屋を思い出させないのみならず，ずっと貧弱に建てられている。

バイア州では，例えば，マタ・デ・サン・ジョアンのJK入植地の場合の如く，質素に設備されているが，良質の材料の，住み心地の良い家がある。しかしながら，一般的に，日本人の住宅は衛生的な良い外見をしていると言うことができる。清潔な，良く手入された家である。住宅は，殆んど常に，農園住宅に似て，森を切開いた広い帯で隔離され，動物，特に森のげっ歯類の接近を防ぎ，部屋，窓が一般に二つから五つあり，寝室は風通し良く，健康的である，そのためには，家が建てられている地域が，主として森の内で，時には谷間で，気候は温和か涼しくすらあることが役立っている。他方，書き落してはならないことは，家屋は，屋根瓦むき出し，即ち天井板なしで，そのため，空気の流通をより容易にしていると言うことである。

殆んど常に，食事と応接用に同時に使われる唯一の広間があるが，経済的状態の良い人達の住宅の若干に例外があり，そのような住宅にはテラスもある。

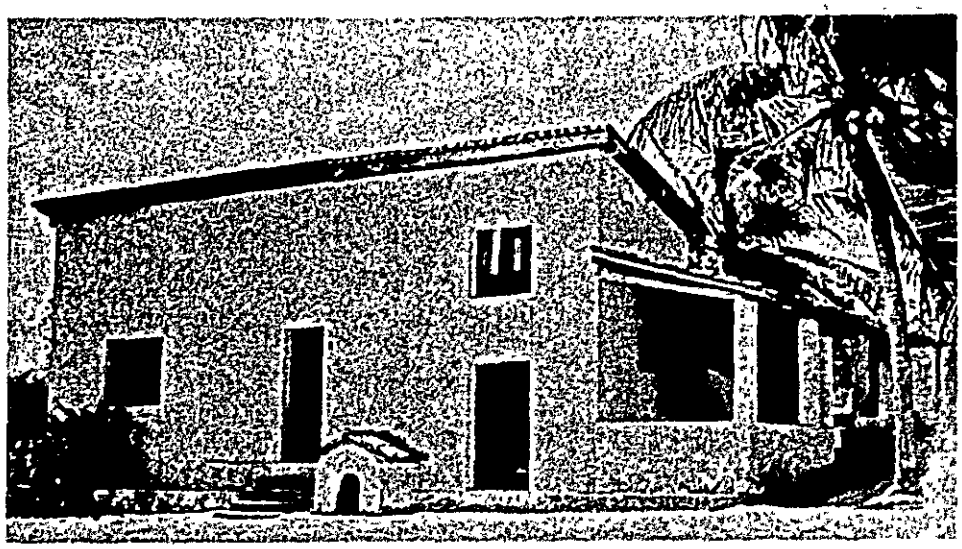
部屋は寝台を備えて居り，寝台は殆んど常に「パテント」型で，時に，ばね入りのマットレスを，また，整形マットレスをすら備えている。不整頓，整理または清潔の不足を示している家は稀れである。

貯水タンクを備えた若干の家では，給水は懸垂式導管網により行われ，屢々遠くから運んで来て，農園の灌漑にもまた利用されている。

他の家では，水はタンクに溜められ，そこから内部的に浴室を含めて配水されている。

同時に応接間であり，食堂である広間には，一つのテーブルと幾つかの椅子があ

る。大きな家では，この広間に長椅子一つと安楽椅子二つから成るセットが置いてあり，時には小さな書斉がある。書斉には本棚と引出し付の机があり，そこには書籍や雑誌，主として日本のものであるが，ブラジルのものもまたあり，殆んど常に勉学のためのものがある。世俗的な雑誌や小間絵小説は稀れである。小さな家では，本や雑誌が一杯置いてあるテーブルが常に見られ，時には広間そのものに本棚が置いてある。携帯用ラジオ，録音器，これはかなり少なく，写真機，これまたそれ程多くなく，タイプライター及び計算機まで見出された。



質素だが比較的快適な煉瓦造りの日本人の住居。リオ・グランデ・ド・ノルテ州ビウン入植地。

ブラジルの「ムチロン」（収穫時または播種時に農家が相互に協力すること）を思い出させる「組」は，集団的参加が一日本人家族の労働を助けるもので，ペリシモ・デ・メーロ（注110）がパラナ州の入植地で観察する機会があったものは，東北伯で我々は見付け出すことができなかった。或る意味では，小さな協同作業一家族単位での協同作業一を象徴する風習をリオ・グランデ・ド・ノルテ州ニジア・フロレスタ（ビウン入植地）の入植地で観察する機会があった。質素な型の小さな煉瓦造りの家の建設に一家の全ての者，中年の夫婦，1人の老人及び10才を僅かに越す2人の子供が参加していた。蓙は，より貧しく且つ日本の伝統にまたつながっている若干の家で見られ，布団は東北伯の日本人入植地では殆んど存在せず，その代りに前

述の寝台が使われている。

風呂(注111)—小さな浴槽で，1人の人がしゃがんで入れる一種の四角い木の箱で，底を銅の板で保護し，その下で火を焚くものである—は二度，一回はバイア州で，もう一回はペルナンブコ州で見る機会があったが，もはや使われてはいなかった。

この様式の熱い風呂は廃止され，または資力のある者の若干の家では，電気シャワーの灌水に替えられている。

アマゾンでは，風呂は実用されており，浴槽は屋外に据えられ，夕方，人々は全く裸で入浴しに行く。(注112)

一つ特殊なことは，木造の箱の代りに，ガソリンのドラム罐である。

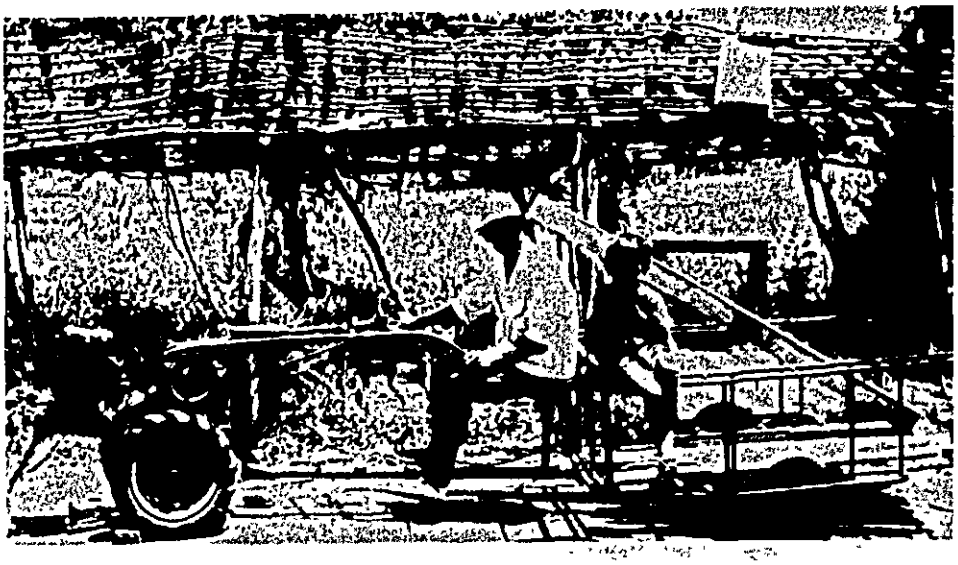
寝るために床に敷く日本の布団は，バイア州のJK入植地の二軒の家でしか見当らなかった。

バイア州に於てのみならずペルナンブコ州に於ても，冷えた夜には，戸外で，炉のように焚火が行われるのを見た。寒さが，特に冬に厳しい南部のサン・パウロ州及びパラナ州の入植地では，炉煙が非常に使われている。(注113)

3.7.3 機　　具

日本人が使用する農機具の表の中では，犂，噴霧器，鍬，鎌，播種機，円匙，小型耕耘機，堀削機，原動機付ポンプ，発動機—これは専らバイア州，特にマタ・デ・サン・ジョアンでは—手車，自動車，ペルナンブコ州及びバイア州では発電機が挙げられる。使用される機具の僅かな部分が日本から持込まれた。この例の中に，噴霧器，円匙，原動機付ポンプ，撒水器，手車，大山刀，斧，堀削機がある。自動車は，大部分「トヨタ」型の小型トラックである。

少数ではあるが，また，ちょっとした装置，とうもろこし碾機，秤，荷車，脱穀機があった。作業用動物は，バイア州及びセアラ州の入植地で出会った。最後に言及した農機具は，殆んど専らバイア州で出会ったが，バイア州では，日本人の経済的状態は，特にマタ・デ・サン・ジョアンのJK入植地では，他州より良好である。一般的に，バイア州に居住する外国人入植者は，以前に南部諸州，特にサン・パウロ州及び北部，アマゾナス州及びパラ州に居住し，そこから可成の金を持って来たが，その金により農業労働により良い条件を得た。金ばかりでなく，技術及び実



トバタ型小型耕転機。ディーゼル燃料油で動かし，5－10馬力。水を吸み上げるのにもまた使われる。セアラ州ピオ12世入植地。

地での広範な経験が，農園，特に蔬菜栽培及び果樹栽培を有利に発展させるために役立った。ブラジルの地方的生態学，その色々な面の内で，気候，植物誌，動物誌，寄生種属及び病原種属を含め，より正確な知識である。農業者にとり非常に有用な知識で，かく植物病理学の経験を備え，植物を襲う病害との斗いにより良く能力を振えることになる。より身近に関心があるのは，莢果，葉野菜，球根，果実である。生活習慣，教育，訓育にしろ，文化のより高い水準を感ずる。

記録する価値のある一つの事実に注意を喚起することは興味あることである。即ち，日本人が使用する機具は大部分，初歩的な，殆んどすたれたもので，現代農業技術と著しい対照をなしている。南部の大きな進歩的な入植地で使われている精巧な機具と非常な差がある。厳密に言うと，トラクターはなく，その代りを牽引動物で，そして屡々人間自身が動かす犂または鋤がしている。このような不利な条件を埋合せるため，東北伯の日本人は著しい労働力，必ずしも温和でない，多くの場合，苛酷で，攻撃的な地理的環境に対抗する気構えを示し，困難を克服し，常に強い意志と打勝うと言う非常な意欲をもって粘り強く斗っている。仕事を容易にする適当な道具も無しに，土地との苛酷な付合いに於て，肉体的抵抗力の素晴しい例として，日本人は，性別，年令の区別なしに労働している。誰れも働かないでいるものはい

ない。皆が活動に入っている。若い人及び成年の者の外，屢々10才以下の子供達や60才以上の高令者もである。

3.7.4　労働力及び就労可能人口

バイア州の入植地では，15才以上で，66人が活発に働いており，48人が男性，18人が女性で，夫々73%及び27%である。同じ州で，15才以下は総計21人，16人が男子，5人が女子で，夫々76%及び24%であった。ここでは，働くための最低年令は10才，最高年令は60才である。このような条件で，87人が就労可能人口を代表している。しかしながら，問題をより注意深く検討すると，単に理論的にのみ就労可能人口は87人に相当すると言う明白な証拠に行き当る。実際には，60才以上の者も，また，10才以下の子供達も労働に参加して居る。7才，8才の子供が或る種のより軽度の作業，例えば収穫作業に従事して居り，また，殆んど70才またはそれ以上の健康で，頑健で，調子の良い男が活潑に働いているのを見る機会があった。リオ・グランデ・ド・ノルテ州で観察したように，既に高令に達した身体障害者一1人は骨盤（腸骨），もう1人は腿（大腿骨）が自動車事故による骨折の結果跛行する2人の男すら働いている。

ペルナンブコ州では，15才以上の男子の88%が働いており，他方女子は僅かに12%である。15才以下では，男子62%，女子38%である。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州では両性間に均衡があり，15才以上の男子の50%，同年令層の女子の50%が働いている。15才以下の子供で農作業に従事する者はいない。

セアラ州では，リオ・グランデ・ド・ノルテ州と同じ現象である。

実際，バイア州に関して行った注釈は他の州にも当はまり，特に60才以上の者の事例においてそうである。

3.7.5　金融的援助，生産及び販売

バイア州に於ては，各入植地に於て,1966年に，異なる期限の融資が行われた。500クルゼイロから5,500クルゼイロの22件の融資が10ケ月から14ケ月の期限で行われた。この期限が，最大数の融資が数えられた期間であった。このような期限は，4ケ月から24ケ月に及ぶ融資の大凡の平均に相当する。

ペルナンブコ州では，同じ年に，融資は，銀行を通じて5－9ケ月から24ケ月に及び，500クルゼイロから15,500クルゼイロの間を上下した。

500クルゼイロから12,500クルゼイロの同じ融資が5－9年の期限で行われた。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州では，同じ年に，同じ期限で，融資は少額で且つ少数であった。

セアラ州では，1966年には融資は行われなかった。

日本人達は，土地の所有者となり，INCRAの保護から解放され，技術的にはANCAR（EMATERCE）（セアラ農業試験公社）の農業技師の指導を受け，農業者組合に加盟した。

社会援護は，地元自治体の責任となり，小学校校舎及び協同組合が活動している建物の不動産を正式に引渡す任務を引受けた。これらの家族は，均衡のとれた財政状態で生活して居り，良好な生産を達成し，自家用車輌を所有し，それでセアラ卸売市場（CEASA DO CEARA）に果物や野菜を届けている。

1967年には，バイア州では，少数の融資に頼ったのみだが，そのことは前年に生産が良く，収益が良く，貯蓄の余地があったことを示している。

ペルナンブコ州に於ても同じような現象が起きた。融資は少数であり，大きなものの中で，1件は13,000クルゼイロ，他は15,500クルゼイロで，期限は最大24ケ月であった。ペルナンブコ州の入植地でもまた貯蓄があった可能性がある。前記の融資は，リオ・ボニート入植地に援護を行っていた農業振興院が農地改革院に合併するため，正に消滅しようとしていた時期に，2人の日本人家長が陥った困難な状勢に因るものであった。既述した通り，日本人入植者達にパニックと損害を斉し，或る者は入植地を脱出し，危機が去った後，復帰した時期であった。(注114)

1967年には，リオ・グランデ・ド・ノルテ州では，6件の融資が1,000クルゼイロから2,500クルゼイロの巾で行われ，内3件は10年乃至14年の期限であった。セアラ州では，1967年に僅かに3件の融資が，1,000クルゼイロから3,000クルゼイロの間で，3年の期限で行われた。

1968年には，バイア州だけで，47件の融資が行われた。最大数（17件）は10ケ月—14ケ月の期限であった。500クルゼイロから8,500クルゼイロ間の融資であった。

セアラ州では，僅かに1件，500クルゼイロが，10—14ケ月の期限で行われた。

バイア州では，最大の生産は，ピーマンによって生じ，栽培面積25ヘクタール，計19,272箱に達し，1箱50クルゼイロで，963,600クルゼイロの金額に達した。

第2位はトマトで，栽培面積16.5ヘクタール，計13,545箱，29,000クルゼイロの金額に達した。

第3位には，シュシュー瓜が来て，4.6ヘクタール，113,000箱，17,450クルゼイロの金額に達した。

日本人が栽培するピーマンは混成種である。大きさは甚だ大きく，長さ15センチ，直径10センチ以上になり，丸みがかった形をし，種子が少なく，舌を刺す辛味も少ないが，これは在来種のピーマンには生じないことである。主婦や料理人から大変好まれるが，それは割りが良く，胸焼や胃炎を起させる危険なしに喰べることができ，挽き肉や馬鈴薯のピューレを詰めて料理するのに利用したりできるからである。トマト樹は，生産性が高く，収益性が良い。（後述の「農業技術及び実践」の項参照）

農業実践，特に蔬菜栽培に於て，日本人は後で移植をするため苗床に大量に種子を播くことを好む。このようにして，栽培地を殖やし，その結果生産を増加することができた。日本人のシュシュー瓜は，ブラジルのものよりづつと大きく，異なった型及び種の交配を繰り返した結果の混成種である。

莢豌豆，胡瓜，長葱，小胡瓜，サラダ菜，キャベツ，アブラナ，オクラ，南瓜，人参，茄子，パセリ及びその他の野菜は，殆んど常に異種交配または接木の方法の改良を受け，バイア州ではかなりの割合で見出された。

果実の内では，生産量及び品質からして，マラクジャ（11ヘクタール），360箱，14,400クルゼイロの売上，バナナ（19ヘクタール），1,170箱，18,400クルゼイロの収益，オレンジ（6ヘクタール），71,600個，3,548クルゼイロ，西瓜（7ヘクタール），2,600個，2,070クルゼイロであった。これに次いで，ココア，南部で（8ヘクタール），40アローバ（訳者注1アローバは14,888グラム），1,200クルゼイロ，パイナップル（3.5ヘクタール），42,000個，1,200クルゼイロ，少量で，アボカード，レモン，密柑，椰子の実，メロン及びマモン（パパィア）があった。

球根類では，最大の生産量と収益率があったのは，馬鈴薯（2.82ヘクタール），330箱，1,350クルゼイロで売却，マンジョカ（48ヘクタール），1,500袋，8,600クルゼイロであった。

穀類は，僅かな生産量であり，少ない面積であった。

その他の産物で取上げる価値のあるのは，甘蔗（0.5ヘクタール），500本，2,000クルゼイロの収入，薬用植物であるアルニカ（1.49ヘクタール），17.315キロ，36,960クルゼイロの収入であった。更に，胡椒は，アマゾン地方の生産量とは全然比較にならないが，0.5ヘクタールの面積で，1,600キロを生産し，6,697.50クルゼイロの価格で売れた。胡椒は，東北伯の料理では多く使用される香料である。少ない生産量ではあるが，バイア州の日本人入植地の経済に参与したのは花卉栽培であった。

セアラ州では，野菜，その内ではピーマン，トマト，胡瓜が目立て居る。また，果物，その内ではメロン及び西瓜が栽培されている。また，マラクジャー（0.2ヘクタール），33,000個，価格13,200クルゼイロ及びマモン（0.1ヘクタール），2,792キロ，3,852.96クルゼイロの生産があった。

球根類では，マカシェイラ及びマンジョカ（2ヘクタール），10,500キロ，262,500クルゼイロの生産があった。

穀類では，米（4.1ヘクタール），16,615キロ，9,969クルゼイロ及び玉蜀黍（1.8ヘクタール），4,200キロ，1,050クルゼイロであった。

1967年，リオ・グランデ・ド・ノルテ州の二入植地，ニジア・フロレスタ（ピウン）及びマシャラングアペ（プナウ）は，相応の野菜生産があり，その内では，トマト（13.75ヘクタール），89.46トン，19,423.36クルゼイロ，次いで，キャベツ，7,280クルゼイロ，南瓜，6,750クルゼイロ，人参，3,150クルゼイロ，胡瓜，225クルゼイロであった。

米が，栽培された穀物で，3,106.50クルゼイロの売上のあった生産があった。

ペルナンブコ州は，二つの日本人入植地，カーボ入植地及びボニート入植地で，1967年に相応の収入のある生産を示した。生産量及び収益の順に挙げると，トマト（18ヘクタール），273箱，48,870クルゼイロ，人参（7ヘクタール），38箱，16,454クルゼイロ，キャベツ（8ヘクタール），46箱，10,580クルゼイロ，南瓜（7,25ヘクタール），27箱，7,128クルゼイロ，胡瓜（面積調査洩），35箱，4,500クルゼイロ，ピーマン（2.25ヘクタール），63箱，360クルゼイロであった。

果物については，西瓜が第1位で，13,125クルゼイロの収入があり，マラクジャーが12,000クルゼイロ，メロン及びバナナは単に自家消費用であった。

穀類では，僅かにフェジョン豆があったが，自家消費で消えてしまった。

東北伯の日本人入植者は，農業生産，特に野菜及び果物の生産に貢献して来ていると言うことができる。経済的数字での貢献では，コーヒー栽培に特に従事しているサン・パウロ州はもとより，ミナス・ゼラエス州，パラナ州，リオ・デ・ジャネイロ州及びマット・グロッソ州での貢献とは比較にならないことは明白である。

T・リン・スミスが「ブラジルはこの移住で得した」と述べたことは正当であった。(注115)

東北伯に於ても，日本人入植地は，小規模農業組織の拡大に寄与し，農業に協同組合を導入するのにかなり貢献したことは疑い無いことである。サン・パウロ州首府近郊地域に於て，その影響は優れた実例で目立っている。

販売は，直接消費者に対しまたは仲買人及び協同組合を通じて行われている。

ペルナンブコ州では，日本人17家族は，81%の割合で，一協同組合に参加している。直接消費者に対しては，4.50%である。仲買人を使うのは9.50%である。日本人家長の1人は二方式を使い，直接生産物を消費者に渡すのが80%，仲買人を通すのが20%である。

バイア州では，2家族が生産の全部を2.56%の割合で，1家族が生産の半分を1.28%の割合で，入植地の協同組合に引渡している。

消費者に直接販売は，32家族が41%の割合で，仲買人には，11家族が14%の割合で，29家族が生産の半分を37%の割合で売っている。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州では，日本人協同組合に対し，2家族の全生産が引渡され，18%に達し，2家族の生産の7%が引渡され，18%になっている。仲買人とは，4家族が生産の93%を取引し，36%の割合となっている。直接消費者へは，3家族が生産の10%を売り，27%の割合になっている。

セアラ州では，2家族がその生産の全部を直接消費者に売り，40%の割合に達している。仲買人に，2家族は全生産を引渡し，40%に達し，1家族は，生産の80%を売っている。

東北伯全般で見ると，日本人の農業生産物の販売は，第1に日本人協同組合と，第2に消費者に，第3に仲買人に対し行われていることが観察される。消費者は，ペルナンブコ州で特に起きている様に，協同組合で買うことに慣れて来ている。

いろいろな州に，日本人の協同組合が存在し，特にペルナンブコ州に於ては，現在まで移住者自身が組織し，運営する協同組合が正常に活動しているに拘らず，その何れもが組織及び運営面に於ては，1927年頃コチア郡モイニョ・ベーリョ区に設立されたコチア産業組合に近よれるものは無い。最初の核は，殆んど全員が田舎出身の日本人30家族で構成して，1916年に形成された。この核が成長して，1927年には既に80家族以上の共同体を構成し，今日，日本人のみならずブラジル人に対し模範となる協同組合の起源となった。全ては，「組合の所有者と地域住民との接触」に依存した日本人ならびにブラジル人の栽培上の標準に文化的原型の変化を引き起すことに依存した。協同組合主義の経験を日本人は日本から持込んだ。日本では協同組合は真の発展を達成していた。同じモデルを東北伯諸州に，その機構及び原動力を保持しつつ地域の状況に適合させて植付けることができるであろう。地域の状況には，土壌，気候，植生及び最も広い意味での生態的適合の状況，また地形をも含む。更に，地域住民及び入植地の仲間の文化的要素を考慮に入れ，考え，感じ，行動する形式において，共生的混合主義の形の下に調整しながら達成するようにする。コチアの移住者の道を追うと言う示唆は，我々の見るところ，東北伯諸州にとり有益であるが，前述の必要な調整を忘れてはならない。(注116)

獣医の援助は，日本人が鶏以外は飼わないので，僅かである。殆んどの入植地が獣医を使って居らず，バイア州及びペルナンブコ州で，夫々8家族及び2家族が，援助機関の負担で，鶏の病気の予防または治療と言う鶏舎に関連した問題に対処するため利用している。

1家族の場合のみ，犬の病気のため，私営獣医が呼ばれた。

灌漑及び施肥

灌漑には，大きな割合で河の水が使われ，66%に達している。主として，バイア州及びペルナンブコ州である。

灌漑用の水のその他の出所は，僅かなパーセントで，殆んど実際上は取るに足らないものである。

10.5%は，灌漑を行わず，雨水のみを使っている。それは，特にバイア州で起きているが，そこでは農業入植地が，降雨量の多い，湿気の強い地域に所在している。マタ・デ・サン・ジョアン，ウナ及びイツベラはこの条件にある。

家畜，即ち大型の動物，特に牛の飼育が行われないため，水はこの場合大した使用はない。水は，鳥（養鶏）の飼育及び僅かな例であるが，豚の飼育に利用されている。この場合，水は堰，川及び用水溜から来ている。

セアラ州では，4人の農業者が無機及び有機肥料を，5人が混合肥料を，夫々29%，35%及び36%使用した。多くの農業者は一種以上の肥料を，彼等自身が製造した肥料ーその処方には，無機塩類，窒素及び含水炭素物質の混合物が入るーを含めて使用していることに注目する価値がある。肥料は，栄養分の殆んど無い疲弊した土地に於て，相当意味のある結果を生むに至った。

バイア州に於て，類似の現象が起きたが，土地がもともと肥沃であるため，比較的小さい程度であった。

ペルナンブコ州に於ては，日本人が造る混合肥料の使用は満足すべき成果を挙げた。特に，多年に亘る従前の耕作により消耗し，栄養分が貧弱になるかまたは無くなってしまっていた土地に於て成果を挙げた。

リオ・グランデ・ド・ノルテ州では，無機肥料がより好まれ，混合肥料が第2位であった。

日本人達が，施肥の問題の解決に，以前には，いくらかおろそかにしていた或る種の要素を合理的に，考慮に入れ始めたーそのことは，主として気候及び土壌に関するブラジルの現実に対応する利口な方法を意味するーことを思い出させることは重要である。それ等の要素の内に，異なる種類の土壌，栽培する植物の種または類の要求，施肥に反応する各種の仕方に影響する気候及びその他の要素がある。これ等全てに生産の収益性が依存していることは予想される通りである。いずれにしても，この仕事は一つの実験として，また，東北伯の農業栽培の状況を改善する一つの試みとして価値がある。心配の一つは，土壌の内の燐及びカリウムの存在であって，土壌のpH（水素イオン濃度）は酸性であってはならないのである。このような状況下で，窒素肥料は望ましい反応が得られる。(注117)

近代的な機具を持たないとは言え，新しい農業技術を持ち込み，異種交配により得た新種子または新種属を作り出す外，日本人は，養鶏の分野でも種類の改良及び新しい飼育法をまた持ち込んだ。飼育法の面では，均衡のとれた飼料，ブラジルの気候には普通な或る種の伝染性の病気に対する予防法，通風，照明及び温度に関連

した注意に配慮した。

東北伯の日本人入植地は，サン・フランシスコ水力電気会社（CHESF）の電力の供給を受けているが，照明のためだけであり，電力で動く農業機具を使用していないので，動力用はない。

バイア州では，入植地の38.5％が州農務局の農業技師による技術援助を受けている。ペルナンブコ州では，土地分譲・植民会社（CRC）及び農業振興院（INDA）を吸収した植民農地改革院（INCRA）を通じて，81％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州では，州農務局を通じ，36.5％，セアラ州では，同様州農務局，後にグアイウーバ郡役所を通じ，技術援助を受けた。バイア州及びペルナンブコ州に於てのみ，夫々4及び1入植地で5％及び4.55％の割合で，個人技師に頼った。

ブラジル人は，日本人と農業知識及び経験の技術交流を平均60.25％と言う相当な割合で維持している。夫々，バイア州48％，ペルナンブコ州38％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州55％，セアラ州100％である。

農業入植地との直接接触に於て，或る場合には日本人と共に生活し，実際に直接観察し，或る面では参加し，各地域の生態的実態に関する情報及び経験の交換に対する相互の関心を評価することができる。ブラジル人は，日本人の経験をブラジルの環境状態自身に適応するように利用することを望み，他方日本人の側は，ブラジル人が土地に付いて知っていること，土壌の状態，栄養分の可能性，従前の引続いた耕作による消耗，気候上の問題，雨，乾燥，寒さ，暑さ，日照及びその継続時間の主要な変動に関連したことを学ぶことに関心を示した。

ブラジル人は，日本人移住者との技術交流で非常に益したが，他方，土着人の経験が語らせた情報なしには，移住者にとり，地域的生態地理の種々の分野に関連した問題を整理し，解決する可能性が遥かに困難となったであろう。

日本人が，ブラジル人に提供する援助は，第1に農業に関するものであり，第2に養鶏が受けるもの，その技術及び機具，特に鶏を屢々犯す病気に対する予防的世話である。予防的のみならず治療的世話である。さらに照明及び暖房の問題，採卵用鶏及び屠殺用若鶏生産の必要に応じた均衡のとれた飼料の使用による給飼の問題に関連して日本人が教えることができるものを忘れてはならない。それだけでなく，遺伝学的経験に従い，産卵期のみならず，短期間に重量をより増加する商業的によ

り生産的な種を得るための交配技術もである。

3.7.6　農業技術及び実践

記録する価値のある農業実践の内で，忘れてならないのは，交配種南瓜の栽培である。交配は日本自体で行われ，日本人の間では鉄兜の名前で知られて居り，東北伯の市場では良い評価を得ている。

実は，円い形をし，やゝ平たく，果顆が突起し，快よい味をし，栄養価が高く，長期間の貯蔵に良く耐え，平均1キロ乃至2キロの重量で，皮は濃緑色で，果肉は橙黄色である。その生産性は大きく，気候不順及び病気に対する抵抗力が大きい。

その栽培は，暑い季節に良く適応し，簡単であり，耕作者に複雑な作業も高額の投資も要求しない。植付の最適の時期は，8月から3月迄に及んでいるが，その地域が霜の害がない限り，1年の何時でも播種はできる。植付は，長さ50センチ，巾50センチ，深さ30センチの穴で，相互の間隔3メートルで行う。1ヘクタールに，1,200の穴を作ることができ，一つの穴に2粒の種子を播く。このような状態で1穴から2本の苗が生え，その1本は播種の後，15日乃至20日に間引かれる。1ヘクタール毎に，500グラムの種子を必要とするが，鉄兜種南瓜は，雄種子を殆んど作らないので，耕作者は授粉用として「モランガ・コロア」または「アボブリーニャ・カゼルタ」の種子約50グラム乃至75グラムを混ぜなければならない。

1ヘクタール当りの生産は平均8トンの実である。収穫は，播種後90日乃至120日に行う。

畑での過度の日射は，斑点，硬結または腐敗の出現を来たすが，耕作者が，収穫前に新聞紙または枯草で実を蔽うと避けることができる。

適当な有機肥料を施すには，各穴ごとに5キロの家畜堆肥を必要とし，鶏糞もまた2キロの基準で極めて良好な結果を得ている。糞は，直接穴に使用しなければならないが，穴を堀るときに取った土と混ぜられる。耕作者が化学肥料を使う場合は，化学肥料は完全な処方によるかまたは各要素ごとによらなければならない。第1の場合は，穴ごとに300グラムである。第2の場合は，1穴当り200グラムの過燐酸，600グラムの塩化カリウム及び30グラムの硝石，硫酸アンモニアまたは硝酸カルシウムである。

間引きの時期に，1穴15グラムの基準で行う窒素化合物散布は15日後に繰返されなければならない。援助する技術者が知らせる土壌の特徴は尊重しなければならない。この種類の南瓜の栽培は，東北伯に於て，一般的に日本人入植地で見られる。(注118)

トマト栽培もまた特別に注目する価値がある。日本人は，ブラジルに於て，在来種のトマト樹に特別の接木の方法を創り出した。日本人は，アマゾンのジュルベバ（茄科の植物），何等有用性はないが，非常に栄養分の多い樹液を備えている植物，の茎の皮の一部を切り，傷口を作り，その上に細い蔦で，在来種のトマト樹から切り取った枝を結び付ける。この枝は，アマゾン・ジュルベバの強力な樹液で養われ，大きな，好ましい味のトマトを一年中生産するが，それは在来種のトマトより遥かに栄養価の高いものである。

この型の接木では，アマゾン・ジュルベバは「台木」の役をし，在来種のトマトは「接ぎ穂」である。

東北伯の，ペルナンブコ州及びバイア州の若干の日本人入植地で，小型の交配種で，若干の人達にカボチャの名で知られている一種の南瓜に出会ったが，全ての徴候は糖尿病患者であった日本人医師ナワ・タイジ博士が研究した北海道南瓜であることを示している。前記の日本人医師が，日本列島の或る島で見付け出したその種の南瓜は，糖尿病患者の血糖値を低減し，正常に戻すことのできる何らかの活力素を備えている。ナワ博士は，彼自身を含め数百人の糖尿病患者を，前掲の南瓜の治療特性のお蔭で治したと言明している。ブラジルでも，エルウィン・ウォルフェンブュテル医師の患者の1人は，治療食の内に，北海道を使ったお蔭で糖尿病を治したか制御した。

栄養の病気の専門家及び栄養問題に従事する研究所に対し，研究室での実験作業を通じて，この題目の調査を行うよう示唆することは時機を得たものであると思う。(注119)

生花　日本の一芸術

農業技術のところで，農作業に関連するものではないが，装飾上の関心に関連するもので，日本語で生花と言う，花を生ける伝統的芸術について述べることは不適当とは思われない。人類学者ベリシモ・デ・メーロが，マツナエ・タケジ一我々も同人を見知った一の家で観察したものと同じようなものを，バイア州及びペルナンブコ州の農業入植地の若干の家で見た。東北伯農村の経済状態の良い家一そこでは，

蔬菜栽培及び果樹栽培の外，花卉栽培の余地があり，それは住居の前及び横の美しい庭で代表されている一で見た生花では，顕著な特徴は線であり，それは一般的に全ての東洋の芸術に目立つものである。線表現に対する愛着は，色彩及び形状に対する関心をも凌駕するに到っている。このような特徴は，日本の生花を他の国で発達しているものと異なったものにしている。

単純な枝で一部構成している生花を組立てる方法に於て，線に関心を払うことは，生花にちょっとした創造性を与え，生花をオリジナルなものにし，大いに装飾的にするのみならず，神秘的に象徴的なものにする。日本の生花では，大切なのは，花が色及び形で美しく見えることができるとは言え，単なる枝一普通の，見たところ何等重要性のない枝一が優美な線に配置されることである。

線の完全性に対する愛着と同じ強さをもって，自然の諸事が教えられ，学ばれているのが感ぜられる。自然主義が驚くべき勢で現れている。

東北伯の日本人は，大部分一特に文化水準のより高い者は一自然な成長過程に関心を示すと同時に自然に対する愛情を隠さない。

最初，約13世紀前，生花は仏教の哲学的原理を象徴していた。時の経過とともに，生花は少しづつ宗教的関連を失なって行き，日本の民衆の創造的精神に益々影響を受け，より本来の意味で美的な意味を獲得して来た。賢明な観察者には，現世の関心を見落すことはない。生花は，天候，季節ならびに使用する材料の成長に従わなければならない。さもなくば，日本の生花の存在意義の一つである真の自然主義的意味を失うことになる。(注120)国家的な祭りでも或は家族の祭りでも，特有の生花は欠くことができない。

例えば，新年の祭りには，生花製作に白菊と松が利用される。あちこちに，稀れに散らばって，蓮の栽培を見ることができるが，疑いもなく日本人の影響である。

3.8　衛生及び医療・保健状態

3.8.1　家庭用水の水源地及び浄水処理

東北伯日本人入植地に於ける水は，第1位に，41%の割合で，川から採っている。特にバイア州及びペルナンブコ州に於て然りである。第2位は，同じ割合（16%）

で，用水溜及び貯水池である。

第3位は，15%の割合で，泉である。家庭用水については，信頼のできる全般的浄水処理のある集中給水の組織はなく，移住者は必ずしも満足すべき状態にあるとは言えない家庭での浄水処理を使用している。水は，或る場合には，直接川から取水し，または用水溜か貯水池から引水される。或る場合には，水を住宅まで送る導水管系が働いている。これは30%以下の割合である。いずれの場合にしても，衛生状態は不完全である。何故なら，水はその源で保護されて居らず，動物の糞または残物及び糟に曝されて，簡単に汚染する状態にある。住血吸虫症風の腸虫病またはアミーバ病の外，細菌性赤痢またはサルモネラ症の類の感染は，川水との接触を通じて，または食事に使われた時起きる。住宅での水の浄水処理は義務的に行われていない。経済的状態の良い家族では，住宅内にブレッケンフェルド型の濾過器が常にあり，時に単独にまたは濾過と同時に煮沸させている。次表は，パーセンテージで，主として食事に使われる水に関する衛生状態の正確な概念を我々に与える。

住宅内の水の処理

濾　　過	45 %
煮　　沸	20 %
濾過及び煮沸	10 %
無　処　理	25 %
計	100 %

3.8.2　排泄物及び塵芥の処理

東北伯の日本人入植地の何れにも，衛生設備及び下水組織は存在しない。

約80%の家には，便所があり，穴につながっているが，必ずしも穴が技術的に良く作られていないので，屢々，特に雨期に，溢水により問題を招いている。このような溢出は，排泄物と混じった水の澱みを生じ，このような場合に，住民の健康に重大な危険を構成することになる。便所には，陶器の便器があるのみならず，貯水槽につながった灌水浴のためのシャワーが在るが，浴室は殆んどがタイル張りではない。若干の場合には，世帯員数に比し，便所の数が足りない。常に一つで，例外的に二つある。

クレゾール入りの消毒剤が，可成の数の住宅で使用されているのを見付けたが，寄生虫の伝染及び蔓延の危険を緩和するのに役立っており，特にDDTを基とした殺虫剤の使用により補足されている。これ等殺虫剤は，また，ムリソカ虫一主として瘧気熱の伝播者であるアノフエレス属の蚊のみならず，夫々フィラリア症の責任を負う線虫及び黄熱病のウイルスの伝達者であるイエカ属の蚊及びシマカ属の蚊一のみならず，シャガス病の起因者である原虫類，トリパノソーマ・クルジの伝達者である「バルベイロ」（トリアトマ）虫のたぐいのその他の昆虫と斗うのである。

食物の残り一一部は家畜，特に猫及び犬に利用される一古紙，木葉，木片及び各種の残物から成る塵芥は，普通，家から或る程度離れたところで燃やされ，煙は昆虫を追払うのに役立っている。

3.8.3　食糧事情及び料理の仕方

一見したところでは，日本人達の蛋白質を基礎とした食品の消費は不充分に見える。特に，動物性蛋白質はである。他方，セアラ州のピオ12世入植地の如く，若干の入植地ではビタミン及びミネラルの消費が充分であるように見えない。換言すれば，数字資料に基いた量的であることができなかった観察に於て得た印象では，東北伯の入植地の日本人は肉を僅かしか，或は少なくとも良好な栄養維持に必要な蛋白質の利用に不適当な量でしか喰べていない。実際は，全て一若干の例外を除いて一上滑りの観察から生ずる誤りに過ぎない。事実，日本人はブラジル人と比較すると僅かしか肉を喰べない。しかし，僅かなのは牛肉である。代りに，魚及び鳥（鶏）を絶えず喰べている。また，牛乳及び卵を消費している。時々消費される山羊の肉は言うまでもない。従って，日本人の食事には，動物性蛋白質は不足していない。他方，果物及び蔬菜の消費は満足すべき状態にある。また，色々な料理法による海草類の消費も同様である。含水炭素（蔗糖及び澱粉質，例えば，マンジョカ，マカシェイラ，イニャメ，とうもろこし及びその他の澱粉の多い食品）及び脂肪，一部動物性，一部植物性一主として椰子の実油一も日本人の食事に含まれているが，脂肪は少量である。

収入の水準が低いため，食事は，或る場合には，含水炭素は豊富だが，蛋白質及びミネラルが必要な率に達していない。

しかしながら，日本人は，前記の食物の不足を，日本の料理法に従い，時にはブラジルの環境及び文化の影響により変えられた料理法に従い調理した海草を，かなりの量使用することで埋合せているように見える。同様に，各種の貝類の外，魚が使われるが，海の魚は少なく，川魚が多い。牛，豚，山羊または羊の肉は一般に僅かな割合で使われている。代りに，前述したような他の動物の肉及び更に鶏の肉が消費されている。卵及び牛乳は言うまでもない。

このように蛋白質の不足は，容易に補われ，満足すべき栄養均衡が保持されている。それ故，蛋白質不足は単に表面的なものである。

他方，日本人でない情報提供者は，ミネラル及びビタミンの使用が少ないと指摘しているが一我々が直接日本人の住宅で観察することができたこと，特に仮作りの物置及び台所に於て，常にトマト，ピーマン，胡瓜，南瓜，豆一時に大豆一の如き蔬菜類，米，マンジォカ粉，とうもろこし，また，メロン，西瓜，バナナ，マモン，オレンジ及びその他の果物を見付けたこと一日本人の食事は，一般的に正常な状態で行われていると言う印象を持っている。蛋白質のみならず脂肪及び含水炭素についてもである。そこから，彼等の強健，良好な健康状態，優れた労働意欲及び労働力が生れている。

東北伯の食物は，日本人婦人が比較的容易に学び，日本人に喜んで取り入れられた。

こうして，とうもろこしを基礎にした料理，カンジカ，クスクス及びアングの如きは多くの家で使われている。コジード（煮物）一煮た肉，葉野菜，じゃがいも及びピロン（マンジォカ粉を湯またはスープで煮たもの）一は若干の家庭では普通である。フェジョアーダ（フェジョン豆に，乾し肉，その他を入れて煮た料理）すら，時たまではあるが，日本人のメニューの一部に既になっている。フランス風海老及びいせ蝦の外，カルル，バタパ，（ともに，バイア料理），魚を基礎にした料理一煮物，ココ椰子，エスカベチェ（酢入り薬味）入り一或はサラダ及びマヨネーズの形でもまた知られている。

四旬節期間に特有の料理，即ちキベベ（南瓜を摺り潰した料理）及びココ椰子実のブレード（惣菜）の如きものや，各種の魚，甲殻類及び貝類を基礎とした色々な料理ですらもである。

いずれにしても，一方で日本人がブラジルの食事に色々な食物及び料理で同化し，大部分の家庭で箸を捨て，西洋のナイフ，フォーク，スプーンで箸に代えているならば，他方では，食物の種類でも，料理法でも，日本人の食事の何れかが東北伯人に利用された。このように，例えば，既述した海草の色々な料理法での使用，皮付きの米一所謂胚芽米一米粒と粉とを問わず，スープの濃厚材として或は粥及びポリッジの調理のため使われる。肥満の予防及び治療に使われ，エネルギーを創り出し，体力の増進及び消耗の回復を可能にする多くの食事療法用製品は言うまでもない。大豆は，東北伯人が既に知ってはいたが，日本人からの直接的影響で，よりよく受入れるに到ったことを指摘する価値がある。同じ例に，筍及び茶の使用があり，芳香ある葉の山茶類の栽培法の伝授を含んでいる。東北伯人が，或る程度受入れた日本原産の飲料は，米を基として作られた酒である。

見て来た通り，文化一般について起るように，日本人は，その文化的状況の内で活動的に動き，消極的要素ではなかったし，またあり得なかった。日本文化の色々な要素及び複合体は，典型的に西洋的なブラジル文化の前に変化し，後退するが，また，活発に振舞い，自らの文化の或る面を相互譲歩及び絡み合いと混合の複雑な作業の内で，押付けることを成し遂げている。この作業は，屢々共棲及び混合主義の強い努力の内で，二つの民族の良き適合に必要なものであり，これなくしては，二つの文化的力は理解し合い，適合し合うことはできない。

食事の習慣については一力説する価値があるのは一日本の料理法や食物が，なお日常の献立に並んで居り，且つ午餐または晩餐に招待する場合，ブラジル人に対する接待の一部をなしていることが稀ではないが，同化がやゝ急速に進んで来ていると言うことである。

東北伯風の料理，特にバイア及びペルナンブコ料理を，その処方及び調理のやり方の面で，益々日本人は学んで来ている。

3.8.4　健康と疾病，治療と予防，呪医と医者

一般的に，日本人の健康状態は，良好と言うことができる。時には，最良の状態にすら至っている。

一般に衛生的，優生学的に優れて，相当の精力と労働能力を有しているように見

える。

出生の場所と如何に似ているとは言え，色々な面で異なっている居住環境に於て生活している一特に日本生れの者一に拘らず，稀にしか病気に罹らない。その優れた適応可能性は，健康の良い指標として役立っている。その自己調節の組織が，常に変り易く，絶えず崩れ，また再び作り直しするとは言え，好調に機能し，生物学的均衡を維持する方向に働いていることを意味する。

日本人の体質は，生命自体の特徴である避け難い不安定性の内で，均衡状態を保持することに成功している。

公衆衛生の教育を受けているので，予防目的のワクチン接種を抵抗なく，満足すらして受ける。接種の内には，天然痘，腸チブス，小児麻痺，破傷風がある。さらに最近は，百日咳，はしか，脳膜炎が入る。(次表参照)

予防接種を受けた者の比率

病名	%
天然痘	85
腸チブス	70
小児麻痺	30
破傷風	40
百日咳	25
はしか	25
脳膜炎	20

原虫類及び腸虫感染率

エントアメーバ・コリ	48 %
赤痢アメーバ	2 %
十二指腸虫	15 %
蛔虫	45 %

前掲の表は，日本人は病源アメーバに殆んど冒されていないことを示しており，そこから排泄物の処理及び生で喰べる食品一果物及び若干の蔬菜一蔬菜等は充分洗

わなければならない一に対する衛生上の注意が取られているにちがいないと言うことが看取される。

腸虫病に関しては，僅かな割合の十二指腸虫及び大きな割合の蛔虫が見られる。十二指腸虫は，所謂「オピラソン」（閉塞）または「アマレロン」（鉤虫症）を起す恐ろしい蠕虫であるが，適切な医療により適当に対処されて来た。同じことが，より有害ではないが，その大きさのため驚かせる蛔虫についても起きている。

衛生当局が，一般的に農村地帯のみならず，日本人が居る農業入植地に於て，特に，この問題に関心を示し，寄生虫検査のための材料の蒐集の組織的調査を実施し，同時に栄養専門家が農村住民一般及び特定的に日本人の栄養状態を客観的に知る目的で，一種の標本調査を行うことを示唆するのは興味あることである。

さりながら，特別の調査による根拠はないが，我々の印象は，日本人は普通の，良好とすら言える栄養状態の保持者であると言うものである。

農業入植地は，医科及び歯科診療部を備えて居り，人々は，或る場合は一週間に一度，他の場合には，毎日診てもらえる。

日本人は，衛生面での教育を受けているので，病気だと感じた時，常に医者を訪ね，或は家族の者を連れて行き，治療法と食事療法をきちょうめんに守っている。

極めて稀にしか，呪医及び（無資格）産婆に頼らない。屢々，病気が軽く，生命に大きな危険が無い時，日本人は，同胞をまたブラジル人すらを訪ね，「ガラファーダ」（呪医が薬として使う飲物）「薬湯」または，ボウシュボク（葉はレモンの香りがある），オレンヂの葉，ケブラ・ペドラ（トウダイグサ科の植物で，利尿，腎臓結石に効く）の如き或る種の葉の煎じたものの使用を教わることがある。しかしながら，そのようなことは時たまにしか起きない。

神霊術及びウンバンダの儀式，即ち聖水，薬湯及び按手に代表される治療に頼る者は，僅かであり，極めて稀である。

3.9　文化的適応と混合主義、適応と同化

3.9.1　組織化過程（直接的相互作用）協同組合，スポーツ・クラブ，娯楽クラブ及び文芸クラブ

東北伯の農村地帯に於ける日本人の文化的適応の問題は，我々の見るところ，好ましい解決に向っている。ブラジルでの滞在期間が比較的短かいのに―ここでは，出生地国から東北伯へ直接渡来した者を主として考慮に入れている―混合主義的な独特の面を持って現われている展望は，一般的に言って，順応段階と呼ぶことのできる段階に在る。ブラジル文化の色々な要素が受入れられ，或る場合には急速にすら受入れられて来ているが，実際には，表面的には西洋化しているが，日本的精神構造を保持しているのである。このような現象は，同化に対する不寛容，特異体質，または無能力を意味するものであってはならない。一つの文化の要素は，短時間に，他の文化の要素により，例えこれがより高い且つより強力な水準のものであっても代替されることができないことを忘れてはならない。殊に，精神文化の要素，即ち，宗教，迷信，神話，伝説，物語，歌謡，美術等に注目すればなおさらである。このような要素は常により抵抗力があり，そして，一般に―全面的に入替えられることができると認めたとしても―他の文化の要素と混ざり，全面的に共生的な混合体を形成するので，少なくとも或る面では，新しい文化的形態を構成するに到り，その内に構成分子は溶け込み，分離することは殆んど不可能である。

東北伯では，日本人は，ブラジル人とともに農業入植地に集められており，両者は権利及び義務，援助及び譲許に於て同等であり，協会またはクラブを有し，その中で二つの民族―日本とブラジル―は文化的適応の効果的な作業の内で相近づいているのである。順応から，既に，或る場合には，同化に進んでいる。

東北伯の農業入植地の日本人の親達の間で最大の頻度を示す団体は，協同組合で，52％の割合であった。

第２位に，スポーツ・クラブがあり，8.5％であった。団体に加入していない者は28％であった。

僅かなパーセントで，娯楽及びロータリー組織があった。

子供達については，状況はやゝ異なって居り，協同組合は僅かに４％に過ぎず，スポーツ・クラブに所属する者12％，娯楽団体 4.5％であった。

色々な型の団体に対して，ブラジルに居る日本人が如何に振舞うかを説明することは困難ではない。日本で生れた親達は―西洋文化にやゝ影響されて来ているとは言え―神秘主義の滲込んだ，古い神政文明の根源に繋がる日本的精神構造のより特

微的な痕跡を依然保持して居り，少しづつこのような根源的影響から解放され，ブラジル人の団体精神を受入れて行くのである。それでも，経済に関しては，協同組合団体に集合する必要を感ずるのである。そして52%と言うかなりの大きさの割合で組合を作っているのである。他方，スポーツ団体に集まった者の割合は，それ程取るに足らないものではなかった。スポーツ団体の中では，ブラジル人の指導下にあっても，柔道は個人を鍛えることのできるスポーツ活動として護身のため，練習されている。

スポーツ・クラブでは，柔道，空手，バスケットボール，サッカー，ピンポン，水泳，バレーボール，その他，色々の運動が実践されている。柔道及び空手では，ブラジル人は日本人から教えを受けている。日本人は，これ等の運動で優れた先生であることを示している。特に柔道は，個人に護身術を教え，スポーツ精神，相手との間，勝者と敗者間の尊敬を発達させ，暴力行為に対する衝動を制御し，その傾向を摘み取るのである。

日本人とブラジル人の間のスポーツ競技を参観し，スポーツが一柔道にせよ，その他の種類の運動にせよ一敵として争う参加者を，敵として不紀律に遠ざける代りに，尊敬し，友好的に融合させ，結び付けるのを確認する機会があった。

スポーツは，東北伯に於ける日本人の心理文化的同化の要素であったし，また，もっと有力な要素となり得ると言うのが私の印象である。

二世を含む，日本人の子供達は，その大部分が6才以下であり，10才に達しているのは少ないので，従って，いかなる種類の団体，例えば日本人の影響下のものであっても，を結成する状態にない。農業入植地は，混合型であるので，その学校は日本人のみならずブラジル人の生徒も通っている。これ等の学校では，二種類の入植者に平等の取扱が与えられており，日本人とブラジル人の間の意志疏通の能力を高く評価することができる。学校では，10才前後の，そして，6才以下の，日本人の子供達は，ブラジル人との共同生活に喜びを表し，遊びごと，競技，歌及び娯楽に，一般的に，自発的に，嬉しそうにすらして，参加している。

特に，学校は，心理社会的同化の優れた手段であることを示し，日本人の子供達または二世達が無意識の内に且つ，ブラジル文化を形成する最も重要な要素を少しづつ受入れるように導いて行っている。この重要な事物の内には，国語，国家的象

徴及び価値，ブラジル歴史の教育的に取りつき易い本を読む喜び，カトリック教を構成する諸要素，それには祈禱書及び最も崇拝される諸聖人に捧げられる記念祭が行われる日または週の教会の行事に結び付いた大衆的な習慣が含まれている。それだけではなく，ブラジルの俚謡を聞き，歌い，或は，ブラジル大衆の想像の世界を構成する神話や伝説，それがインディオ起源であると，アフリカ起源であると，更にはヨーロッパ，特にポルトガル起源であるとを問わず，読むことである。或は，もっと正確には，三つの種類の影響，即ち，インディオ，アフリカ及びヨーロッパ，特にイベリア，主としてポルトガルの影響が合流する伝説及び神話である。

これ等の影響は，混合主義的に，首尾一貫した源を決めることが困難な混合物に合体している。なんといっても，伝説及び神話は，大衆文化のその他の多くの表明とともに，最も真正なブラジル民俗を構成するものである。

3.9.2　ブラジルの伝統的祭り，訪問及び会合

東北伯の農業入植地の日本人の親達は，約26.5％がカーニバルを遊び，28.5％が6月の祭り（サン・ジョアン，サント・アントニオ及びサン・ペドロの祭り）に参加している。

子供達は，カーニバルの祭りに38％，6月の祭りに33％の割合で参加している。

バイア州に於て，日本人家長の約58％が，ブラジル人家庭のレセプションへの招待を受取り，受入れられて居り，ペルナンブコ州では62％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州では100％であった。

子供達は，バイア州で71％，ペルナンブコ州で67％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州で73％，セアラ州で100％であった。

このような比率を考慮すると，日本人とブラジル人との間に良好な関係が存在することが判る。この関係は，日本人の心理社会的同化を容易にして来た。この関係は，適応の苦労を軽減し，同化を助けて来た。それでも，若干の習慣或は活動は，物質的面でも，精神的面でも，日本製の刻印を保存していた。ブラジルでの短い在留期間のため―主として日本から直接来たもの―ブラジル化が完全に行われることはできなかった。同化―民族間の紛争を解決し，または軽減する文化的統合の過程―は除々に，無意識の内に且つ心の底から行われるものであることはたしかである。

換言すれば，時間は重要な要素であることを示している。個人は，気付くことなしに，精神構造を変えて行く。この場合，日本人は少しづつ，時には或る迅速さをもって，予感することなしに，自分の文化の原型―伝統的，宗教的，神政的文化―を忘れ，ブラジルの現在の文化的価値を吸収している。同化の過程が，日本の考え方，概念，慣行，習慣に代表される或る種の要素が，ブラジル文化と混ざりあって，微妙且つ複雑な混合的共生的融合の内に保持されることを妨げるものでないことは明らかである。

外国人の同化に役立つ他の過程は，ブラジル人家族が日本人家族に対し，小さなパーティ或はより重要な儀式，例えば，結婚式，洗礼，誕生日，または会合の名目として単なる昼食または夕食への心のこもった招待をすることであり，一般に招待を受けた者から気持良く受入れられている。ブラジル人は，無骨な農民ではあるが，すばらしい主人役であることを示し，外国人の友人を好感をもってとりこにすることを知ていることに注意を喚起することは興味あることである。

このように，バイア州で35％，ペルナンブコ州で24％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州で46％，セアラ州で60％の日本人がブラジル人家族から招待を受け，これを受諾して，接待の仕方の温かさと思いやりに好印象を常に持って帰っている。平均して，4州で日本人家族の41％が，ブラジル人宅での気持よい会合で，ブラジル人との交歓に参加している。

祭りや家族的集りでのこのような型の交際は，同化を促進する過程を成すことは疑いない。ブラジル人家族の親族や友人で日本人がまだ知らない者が出席し，そこから新しい友情，新しい交際が生れ，中には，若者達の間での交際すら生れ，結婚に至り或は至り得るものもある。結婚は，周知の通り，同化過程での極めて重要な意味のある要素である。

他方，日本人もブラジル人の接待に返礼し，同じ様に，昼食，夕食，会合または何等かの祝宴にブラジル人を招待する。これ等には，農民でない日本人も亦参加する。

このような機会には，日本人は，日本の伝統的な食物，特に海草を基にしたものの外，ブラジル風食物の料理に念を入れる。

日本人が，ブラジルで，海草を料理法に導入したことを強調したい。

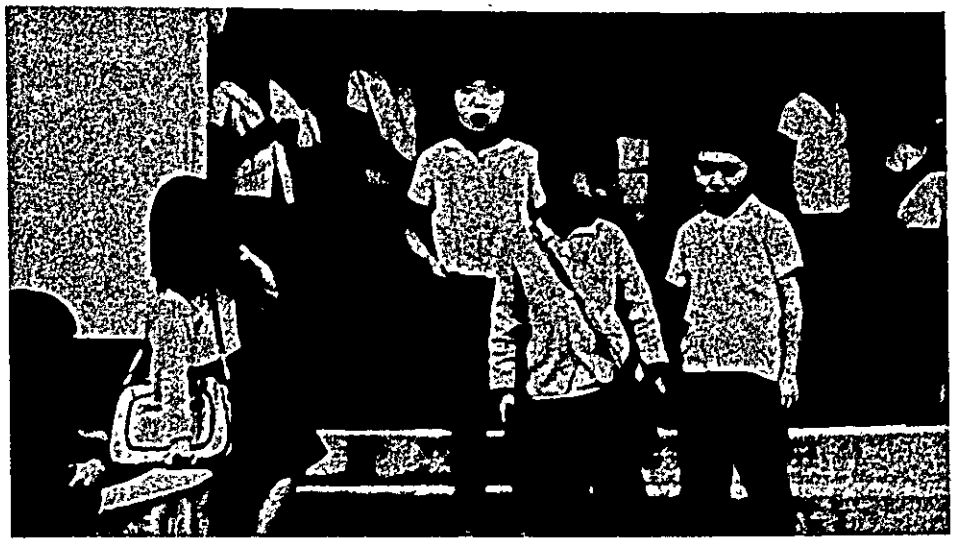
バイア州で30%，ペルナンブコ州で24%，リオ・グランデ・ド・ノルテ州で47%，セアラ州で100%が，色々な型の会合の際，ブラジル人を招待し，接待している。平均して，4州で50%に達する。

このようにして，ブラジル人及び日本人家族は友情の絆で結ばれており，それは文化的統合えの良き道である。

3.9.3 学校，心理文化的統合の要素

学校生活に於て，特に初等教育に於て，休み時間中に，日本人児童達は，遊び事，競技，グループで歌う歌ーその多くは，一般的にブラジルの，特に東北伯の民俗の真正な表現であるーにブラジル人と混じって参加し，新しく到着した日本人の特徴である心理的抑制または引込思案を克服している。他方，試験が近づくと，特に初級及び中級の夫々の最後の第4学年に於て，日本人及びブラジル人生徒は一層親密になり，一緒に勉強し，難かしい問題を解明し或は複雑な問題を解決するため，話し合い意見を交換している。今日全ての水準の学校，所謂初等から大学迄で非常に使われている方法に対し注意を喚起することは興味あることである。それは探索の方法の利用である。生徒の好奇心を目醒めさせ，発達させ且つ同時に，科学的に推理力ならびに創造力を働かせるよう指導することを狙って教師が屢々使うものである。そのためには，チームを作ることが必要となり，チームにはブラジル人も日本人も参加する。かくて，研究は作業グループを構成する者の間で，接近，連帯及び尊敬の素晴らしい手段であることを示している。何故なら，一人一人が全体を構成する一部を分担するのみならず，研究者は，一般的に言って，何かを発見した時常に喜びを感ずるとともに，何等かの形で自分の学習に寄与したと感じ，屢々全く知らなかった或る種の事実或はあまり知られていないその若干の面を明らかにするに至るのである。

これ等全てが，ブラジル人学生と日本人学生を相互信頼と尊敬で結び付け，日本人学生がより急速に且つよりしっかりした心理文化的統合に達するようにする。



ブラジル人と日本人の児童達が，下校の際，人種的偏見なしに混じり合っている。

学校は，事実，文化的適応の優れた手段である。学校は，外国人入植者がブラジルの風習，社会に同化するのを助け，ブラジル化して，ブラジル精神の一部をなすようにする。10才以上の者は，より熱心に娯楽，文芸，スポーツ団体に参加している。彼等―10才以上の者―は気安く話し，参加している小さな組織に容易に溶け込み，フェアプレーの精神で，日本人または日本人の子供達との関係に於てのみならずブラジル人に対しても完全な団体精神をもって，競技に入る。比較的屢々，移住者と土地の者との間にある相互尊敬を観察することができたが，それは通信に使用される手段で説明することができる。彼等は，一緒に居ない時は，手紙，電報及び電話でもって通信し合っている。

一つの特殊性は考慮に入れなければならない。我々の調査の対象である日本人は，市街地区から離れた農村に住み，林野の真只中に住んでおり，市街地区には重要な団体組織がある。しかし，それでも，調査した入植地で確認することができたように，同化の要素として学校の役割は重要である。

児童及び青年間の最善の繋りは学校または大学で行われる。皆が同等と感ずる学校の雰囲気の内に於てである。人種及び文化の諸問題に対する教師の寛容な態度及び問題を解決する在り方での正しい指導が，関係の成功に非常に役立つことは明白

である。教師に人種的偏見，特に皮膚の色に対する偏見或は文化的特異性から来る反感が無いことは，教師自身の実例で目立っているが，ブラジル人と外国人一この場合は日本人一間の良好な理解にとり最大の重要性を有する要素であり，文化的同化及び異人種間通婚の過程を著しく助けている。

事実，これが日本人について起きていることである。先生達は，人種的または文化的反感を示さず，日本人をブラジル人と対等の立場で扱い，いかなる差別もなく，彼等を傷つけるような或は陰に感じさせるような態度，身振りまたは言葉も使わない。私自身，公立高校一その内には，ジナジオ・ペルナンブカーノ及びペルナンブコ師範学校がある一及びペルナンブコ連邦大学及びカトリック大学で，教師として活動し，日本人青年男女と共に生活をする機会があり，彼等と良好な関係を維持したが，それはまた他の教授達及び同僚にも及んでいた。とにかく，ブラジル人は，一般的に，教師にしても生徒にしても，日本人に常に好感と大きな温かい友情をもって対応し，偏見が無く且つ模範的な交歓の証拠を示している。日本人は常に親しみ易く，打ち解けて話をし，懇懃で，懇篤な友人であり，行儀のよい，優れた学生であることを示していたことを言明することは興味あることである。

二つの高校での例は，絶えず色々な他の高校及び大学で繰返されて来て，ブラジル人の受容性と日本人のブラジルの事物及び人に対する良い心構えを示している。このような事実は，日本人の同化過程に於て大きな意味のある要素として価値がある。

3.9.4　間接的相互作用　マスコミ（ラジオ，テレビ，映画），読み物（書籍，雑誌，新聞，書簡）

テレビ視聴率の平均は，親達の間で７％，子供達の間で14％，ラジオ聴取率は，親達の間で60％，子供達の間で69％，親達の76％，子供達の81％は映画を見ている。マスコミの三手段を含めた総平均は約50％である。

子供達だけならば，総平均はほゞ55％（54.66％）である。

親達の９％，子供達の 17.5％が申告洩れであることを想起する価値がある。

上述したところにより，マスコミ手段が，日本人家族の50％をやゝ上廻る割合で使われていることが感知されるが，彼等が奥地に，林野地帯に，農村地帯の真中に

住んでいることを考慮するならば，これは良い数値であることを示している。農村地帯に住んでいることは，機械を設置するのに，いくらか困難があることを意味している。それだけではない。朝の6時，屢々5時から，夜の18時及びそれ以上に及ぶ時間，土を扱う厳しい労働体制，また疲労と睡気を伴う消耗的労働体制。それでも，約50%の人達が，ラジオ，テレビまたは映画を利用する状態に在ると言うことである。

このような伝達手段は，心理社会的統合及び同化の優れた要素を成すものである。これ等を通じて，ブラジルの風俗，習慣，生活様式，法律，象徴，文化的価値が，一般的に繰り返し紹介され，移住者達が好感をもってわが国を眺め，大体において，ゆっくりと，しかし常に漸進的に行われるブラジル化の過程の内で，ブラジルに適合するように努めるのに貢献する。かくして，日本人はブラジルを第二の祖国，養国として選択する。事実，ブラジルは気持良く，日本人移住者が肉体的に適応し，文化的にブラジル社会に一体感を持つことができると確信して，双手を挙て迎え入れるのである。

日本人の農業入植地のある東北伯四州の内で，リオ・グランデ・ド・ノルテ州が，親達の間で82%，バイア州が子供達の間で78.2%と，ラジオ聴取者の最大の割合を示している。テレビの利用では，第1位は，親達の間でバイア州が6.5%，子供達の間でリオ・グランデ・ド・ノルテ州が18.5%である。映画行きでは，第1位の州は，親達の場合も子供達の場合も，セアラ州で，夫々100%である。

東北伯の農業入植地の日本人の親達の約17.5%はブラジルの本を読み，新聞は17%，雑誌は21%が読んでいる。子供達は，ブラジルの本を87%が読み，新聞は78%，雑誌は78%が読んでいる。

気付かれずに過ごす恐れのある一つの特殊なことに注意を喚起することは興味のあることである。経済・文化水準のより高い若干の家の小さな書斉で，英語の色々な本及び雑誌――般に米国のもの――に気付いた。そのことは，同様にブラジル人の読書家，特に大学院または大学生水準の者及び中流水準すらの者の所でも見られる。これは，我々が利用すると類似の源泉で，主として科学及び技術に関連して，情報を得ていることを意味する。科学，技術は心理文化的適合の仕事に有利に間接的に干与する要素である。

3.10 異民族間結婚

混合結婚または異民族間結婚は，東北伯ーバイア州，ペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州の四州ーの日本人の親達に，大部分の場合受入れられており，76%（76.52%）を僅かに上廻る割合である。

事実，農業入植地で日本人と一緒に生活し，親達が，子供達の大部分が結婚適令期ではないが，一般に子供達がブラジル人と結婚することを見詰める寛容な，時には好意的な様子を観察することができる。打ち解けた，時には内輪話しに近い会談で，日本人達は，子供達がブラジル人と結婚するのを阻止する理由が見当らないと漏らしている。それは土着住民も彼等と同じ感情を備えた，文化を発展させ，あらゆる意味において人類の福祉のために働く同じ可能性のある人間と見做しているからである。換言すれば，人種的或は文化的優秀性または劣等性の偏見または神話に迷わされている人種主義者または自民族中心主義者でないことを示している。黄色人種も白色人種も，同じような機会には，同じ事物を創り出し或は発明することができると考えて居り，文化的価値及び基準を，全体として或は個々の要素ごとに，真似し或は受入れることを知って居り，文化的適応または重層信仰を自己の文化に対し有効なものとし，その結果より良い生活条件，より物質的快適性，社会的安寧及び精神の平和を齎すようにすることを知っている。(注121)

異民族間の結婚に関し，東北伯で起きていることをサン・パウロで起きていることと比較すると，移住者の側での態度に大きな差が見られる。(注122)第2次世界大戦前に渡来した日本人の親達ー多くは1908年移住者の第1回集団が，日伯協定に定められた体制の下に，両国に対する保証ー受入国は，無秩序な労働力で農業を損ずることなく，医学的心理的選考を行い，送出国は移住者を失望或は失敗から守り，また費用のかかる送還の混乱を避けるーをもって，渡って来た日本人達は，適応のための容易な条件及び確実な就職先を有し，若干の親達は，神秘的宗教的な深い根源を持ち，容易に克服することのできない神政的伝統により数世紀に亘って狂信化された民族の精神構造を保持していた。

そこから，サン・パウロ州に於てはー数年前までー混合結婚は受入れられず，宗教体系の伝統的神聖性に対する一種の犯罪と見做された。神の怒りと罰を惹きつけかねない真の冒瀆である。これ等全てが，日本の社会的法則が宗教的禁止事項とし

て受入れ且つ厳に尊重して来たものを構成していた。

子供達は，或る者はブラジル生れであり，他の者はブラジル及びブラジル人との共同生活によりブラジル化して，親達の意志に従わず，結婚を強行し，時には警察署で，強制的な形で実現した。ついでに言えば，最初は激怒した親達も少しづつ子供達の態度に対する怒りと神罰に対する恐れを和らげ，既成事実を常に受入れてしまっている。

サン・パウロ大学のルッテ・コレイア・レイティ・カルドーゾが，問題の過程の文化的変化一子供達のブラジル人との結婚に対する日本人親達の行動の緩和または全面的変化一は世代間の衝突を通じて行われたと言う結論に達した時，理由があった。(注123)最初，強く反応し，自分の文化的基準を強制し，次いで，少しづつ譲って行き，衝突の対象の文化的面にとり新しい基準を全面的に受入れるまでに至るのである。

異民族間結婚一同化を促進する素晴しい手段一は，主としてサン・パウロ州に於ては，極度に神秘的・宗教的且つ偏見のある日本文化の価値になお支配された移住者の反発の動機であったが，東北伯では，40年代にそこに移って来たが，米国を通じて西洋文化の影響をかなり受けて居り，同じ障害に出会なかった。第2次世界大戦前に，ブラジルに到着し，アマゾン及び南部の諸州に入り，その後東北伯に移たものは，文化的に再教育されて，バイア州，ペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州に住居を定めたが，そこでは混合結婚は困難なく起きている。少なくとも，積極的な反発はなく，寛容をもって，また，心良く受入れられすらもしている。親達は，年配の者も，一般的に息子達（娘達を含め）がブラジル人と結婚することに反対していない。

バイア州に於ては，異民族間結婚は一サン・パウロ州に於て30年乃至40年前迄に起きていたとは反対に一親の同意を得て，騒ぎなしに71％の比率で平穏裡に行われている。ペルナンブコ州では67％，リオ・グランデ・ド・ノルテ州では73％，セアラ州では100％に達している。平均は75.25％である。

異人種間の障壁を壊す重要な要素は，日本文化が被った変化であり，米国人が及した強い影響力のために西洋に傾いた変化であった。米国人は，上手に，古臭い，長年の文化的態度を，あらゆる技術力を備え且つ人間的，社会的問題を，圧力や暴

力なしに理解するため大きく開かれた近代文化に変換するのに成功した。同時に，裕仁天皇に対する尊敬を維持したが，天皇は新しい文明を受入れるようにと臣下に対し影響力を保持し続けた。そのためには，また，英明な天皇の知識，人文的科学的学識が寄与した。天皇は，戦争の終りに，敗北したと思われる代りに，勝ったと判断された。中世にローマ帝国で起きたのとは反対にである。野蛮人の圧倒的な進撃に敗れたローマは，勝利者のように振舞った。何故なら，文明の活力にとり極めて重要な風俗，習慣，芸術，生活様式を敵を征服する程に強制することに成功し，野蛮人とローマ人との間の接触から最高度の西欧文明，偉大な国家，近代言語が生れたからである。現代の日本人は，他人種との雑婚に同意しない程，人種偏見の虜にはもはやなっていない。ニーチェの説で，ペゼラ・コーチーニョが，その論文「人間の混血と文化の問題」（ペルナンブコ医学雑誌，1933年12月乃至1934年1月，レシフェの抜刷）で，評価を高めた「人種の混血から偉大な文化が生ずる」は日本人が充分受入れているように見える。

3.11　カトリック教への改宗及び大衆宗教の影響

調査票の使用を通じて集めた資料によると，東北伯農業入植地に居住する日本人の親の間で40人，子供の間で41人のカトリック教徒が居ることが認められる。親達の内で10人はブラジルに到着する以前から既にカトリック教徒であり，30人は受入国に定着した後でカトリック教徒になった。従って，夫々次の比率，25%及び75%である。子供達の内では，ブラジル到着前が12人，到着後が29人であり，夫々29.26%及び70.73%である。

日本から既に半ばカトリック化して渡来した日本人にとっては，改宗は困難ではなかった。カトリック布教活動は，日本に於て，多年行われて来たことは知られている。日本人は，正式には長い歴史のある宗教―神道を基盤にした仏教―の保持者であるので，数十年でカトリック教に改宗することはあり得ないように思われる。精神文化が如何に抵抗力があるかは誰れもが知っていることである。特に，これが宗教によって代表される時はである。神道・仏教の如く，深く根を張った，数百年の伝統を持ち，包み込み，熱狂的に帰依させる非常に大きな能力を持っている宗教は短時間に放棄させることはできないことを附言する。ちなみに，同様の現象がト

テム拝物教のアフリカに於て，回教徒がアフリカを回教化しようとした時一黒人の根深い信心に直面し，長期間の後達成したが，それもスーダンのほんの一部にしか過ぎなかった一並びにキューバ及びブラジルに於てもまた根っからの拝物教徒である黒人奴隷が到着し，強力なポルトガル・ブラジル系のカトリック教に直面した時，起きている。これ等全ての場合に於て，全ては見かけだけ，即ち，偽の改宗に過ぎなかった。ポール・マルティ(注124)が，アフリカの回教化について警告した如く，信心を変えることは困難であり，キューバに於て，フェルナンド・オルティス(注125)の評価に従へば，見せかけのカトリックへの教化であり，ニーナ・ロドリーゲス(注126)がブラジルで起きたアフリカ人奴隷が民衆間に流行しているカトリック教の諸聖人の多彩色の像及び聖画を受入れ崇めた文化的，特に宗教的順応の現象に言及し，カトリック教理講義の幻想と言っている。

事実，カトリック教徒と見做される日本人は，一種の家庭内礼拝として，なお仏壇を保有し，仏教の原理及び思想を尊敬していた。

何れにせよ，社会・人類学的用語で全面改宗でないとすれば，他の宗教の価値との妥協であった。妥協とは，カトリック教の価値，原理，象徴，名前，概念を全面的に採用するに至り得るものであり，事実或る場合には既に到達していた。

子供達の場合，ブラジルで生れた者の場合は特に，保持の過程はそれ程の困難を伴うものではない。何故ならば，幼く，少年及び青年としても，一つの宗教に殆んど撤回できない程執着するに至る精神的成熟の時間が無かったためである。更に，第2次世界大戦の結末がもたらした影響は，日本の古臭い文化の核心自体に深く影響を及し一日本人には長い昏睡から強烈な生活及び時の大国に比敵する可能性をもって進歩と文化的発展の将来に満ちた生活に目覚めた様に見えた一大国の内では，米国が一日本に於ける直接の接触から得た経験に鑑み一この点での模範となり，物質文化の要素のみならず精神文化の要素一宗教はこの例である一が困難が少なくなく且つ緩漫でなく，取入れられることが期待された。

ここで，重要な要素を忘れてはならない。それは，初等学校，中等学校であると大学であるとを問わず，学友との常時の共同生活である。そこでの支配的な宗教は，少なくともより社会的な面に於て，ミサ，教会の伝統的祭，著しく宗教礼拝的な結婚の儀式，復活祭の儀式などでの出会いに代表されている。

特に言及したいのは，ブラジルで実現しつつある神道・仏教からカトリック教への改宗である。原宗教たる仏教は確立されて居らず，一種の家族の宗教として示されているに過ぎない。大きな抵抗力のない家庭的宗教である。何故ならば，仏教は，日本の自然の如く，自身の哲学の原理，概念，観念と似合う自然の特殊な様相から大部分が導き出された宗教の様に表面上は見える。(注127)

3.12 反同化

3.12.1 日本人の伝統的祭り及び祝賀会一抵抗の要素或は混合の要素

日本人達は，71.5％の割合で，自国の伝統的祭りを催し，参加する。二つの日が盛んに祝われる。一つは新年で，これは世界的な性格のものであり，他は，クリスマスで，特にキリスト教に属するものである。前者は65％，後者は15％の割合である。祝われるその他の祝祭は，日本のスポーツの祭り，娘達と出会う祭り，政府の周年の祭り，死者の霊魂祭の日，天皇誕生の祝日一これは5％一祖先の霊魂に対する尊崇，農業者の日，領事館の催す祭り，男児の祭り，女児の祭りなど僅かな割合に分けられた合計20％である。

見たところでは，日本の伝統に繋がった祝賀の会及び祭日は，東北伯農業入植地の日本人移住者の多人数の参加を得ていない。新年及びクリスマスの祝い事を例外として，その他の祝い事には僅かの数以外は殆んど参加していない。大きな参加のある二つの祭り，新年及びクリスマスは日本の歴史的または宗教的伝統に本来属するものではないことは力説する価値がある。前者は，文明諸国民全ての，宗教とは無関係な祝祭日であり，後者は，聖なる降誕，イエスの出生に関連した祝祭日，従って典型的なキリスト教の祭りである。両者は，日本に於てもブラジルに於ても日本文化に吸収された。新年の祭りは，古い習慣で，何時から日本で受入れられるようになったか正確には判らない。

いずれにしても，ブラジルに於て，日本人は，日本で国の大きな休日として祝われる新年を祝う習慣を強化した。多分，日本の祭日では最大のものであろう。事実，民衆が人間的連帯の強い精神をもって祝う日である。典型的に民俗的な祭りをさせる日である。

色々な祭り事が所謂新年の祝いに関係する。東北伯の日本人は，新年を1月1日から1月3日の間に祝う。家族全員で祝う日である。殆んど常に，家の入口は両側を，後側に竹の茎のある松一門松一で飾られる。若干の家では，玄関の上部に神聖な縄一注連縄一が下げられている。この縄は，白い紙葉及び細長い紙片で作られている。飾りの内に，しだの葉，だいだい1ケ，小さな伊勢蝦1ケがあり，長く，健康で，繁栄する生命への願を代表するものである。松は，長命の象徴であり，竹は堅忍及び貞節を象徴し，しだは始まろうとする年に於る幸福を思い出し，だいだいはその発音が「世代から世代へ」を意味する日本語の発音を思い出させる。換言すれば，永遠と言いたいことを示している。伊勢蝦もまた象徴的な意味を有している。その背の彎曲は長命を示唆している。即ち，背骨が曲るまでも生きよと言うことである。

ここかしこと，東北伯の日本人入植地の多くの家で，或る所では強く或る所では弱く，新年の祭をその象徴主義とともに発見することができる。一般に，新年の第1日に友人間の，日本人の間のみならず日本人とブラジル人の間の訪問が，屢々相互訪問がある。特に，新年の祭は全ての国民によって且つ宗教的背景をもって，世界的に祝われるからである。拝壇や厨子もまた飾付けられ，照明され，その前に神道信者も仏教徒もまたカトリック教徒も一カトリック教徒は一般に自分の教会で一跪き，祈り，各々の神に，健康，繁栄，長寿及び幸福を下さるよう加護を願うのである。若干の日本人は，このような機会に典型的な衣装を着る。

バイア州の日本人入植地では，新年の日々に男児は凧を上げ，女児は羽根を羽子板で突いて遊んでいる。新年に関連したもう一つの風習である。

クリスマスの時期及び新年に，楽しい記念行事の間，西洋文化に一般的に含まれているブラジル文化の慣習と日本文化の風俗との混合或は組合せを記録することは困難ではない。クリスマスの祭りに関しては，日本に於けるカトリック布教活動の影響一日本人が改宗していないまでも，少なくともローマ・カトリック教の名前，象徴及び価値を好意をもって眺め，受入れている証拠一が積極的に働いたにちがいない。ブラジルに於て，カトリック教との接触は一層密接になり，日本で始まった教義の講義が続けられる可能性はある。

3. 12. 2　日本の典型的衣服　反同化の演出の日常的習慣なのか或は散発的な且つ日伯文化共生の全てに於て或は一部の面に於て参加することが可能なことの表明なのか。

日本人の典型的な衣服は，普通家庭内で親達が18%の割合で使っている。伝統的な祭りの時，典型的衣装ー特に着物と草履ーは，12.5%の割合で使われる。また，結婚式の時4.5%の割合で使われる。

働く時あるいは家庭外では，一般的に言って割合は極めて僅かで，殆んど皆無に近い。殆んど常に日本人は上下続きの作業衣を使い，婦人は，一般に混色の布のズボンを履いている。

子供達は，伝統的な日ーその時は典型的な衣服の使用が11%に達するーを除いて，一般的に西洋風の衣服に取って代られて居り，典型的衣服の使用の割合は殆んど皆無である。

幼児及び青年達が日本風に着る伝統的な祭りの時でも，親の意志で或は親に対する尊敬の印として，親の例に従い，着るのである。

大きな社会の内で，ブラジル人の学友や仲間や友人と接触して生活していて，日本伝統の衣装を使用するならば，環境に適応していない，小さな制裁の対象となっていると感じるであろう。確かに，さわぎを起し或は揄揶の対象であり，或は少なくとも好奇心の対象となり，彼等に羞恥心または気兼ねを起させるであろう。何故なれば，一部には年令からして，宗教的確信を形成するに到って居らず，一部には，学校や大学やクラブや町で，ブラジル人とより長い時間共に生活しているので，日本人の子供達は，自然に西洋風，特にブラジル風に従って着ている方がより気楽に感ずるのである。ついでながら，日本自体でも，特別の場合しか，典型的な衣装は使はない。労働する時，街頭にいる時，散歩する時は殆んど常に西洋風に着ている。戦後，日本の領土に米国人が居り，上手に且つ人間的に行動し，急激な変革で日本文化に衝撃を与えることなく，少しづつ西洋化の方向に変化が平穏に行われるよう，日本国民が伝統的に守って来た或る種の原則を無視することなく，回避することが困難な社会的，宗教的，心理的状勢を作り出す可能性のある精神的傷をもたらす衝撃を起さないようにして来た。これ等全ては，すたれた古臭い，強い神秘主義に執着した文明の国を，進歩的な，政治的，社会的のみならず，特に技術的に世界の最

も強力な国の一つとなる程までに益々発展する国に変化させることを不可能にするものであった。物質文化だけでなく精神文化に於てもであった。例えば，科学的文化，芸術的文化である。

附　　属

混合植民協同組合　J.K. 入植地

1968年12月31日現在　貸借対照表

資産の部		
固定資産		
不動産	90,478,64	
車輌	17,760,03	
農業機械	6,109,60	
製造施設	76,313,29	
孵卵器	25,880,50	
養鶏品種改良用種鶏	96,300,65	
家具什器	9,099,85	
株券及び保証金	6,717,33	
屠殺場	15,416,60	344,076,49
手持資産		
現金	25,916,25	
銀行預金	3,343,07	29,259,32
流動資産		
組合員資本勘定	186,50	
組合員貸付勘定	408,41	
受取手形	25,587,71	
雑借務者	145,218,28	
清算中貸付金	1,945,20	
前払金	128,00	
組合員融資勘定	2,484,14	175,958,24
未決勘定		
仮払経費	7,323,84	7,323,84
相殺勘定		
融資契約	20,000,00	20,000,00
		576,617,89

負債の部		
固定負債		
払込済資本金	511,70	
未払込資本金	186,50	
準備金	47,974,49	
新設備・改良基金	198,785,76	
寄付金	19,790,18	267,248,63
流動負債		
資本金利息	78,55	
未配分利益	94,790,00	
未支払債務	41,600,00	
雑債借者	54,995,38	
銀行融資勘定	5,026,87	
供給業者	92,878,46	289,369,26
相殺勘定		
契約済融資	20,000,00	20,000,00
		576,617,89

損　益　計　算　書

1968年12月31日現在

借方の部		
商品，在庫勘定		8,321,50
養鶏産品，在庫勘定		1,386,40
商品，購入勘定		256,176,62
養鶏産品，生産勘定		
販売用卵及び鶏	77,283,20	
販売用雛	388,902,18	466,185,38
人件費		22,915,91
一般経費		18,106,38
金融経費		10,894,99
鶏勘定		227,497,45
中央孵化場経費		14,107,69
販売経費		11,176,27
車輌経費		16,978,96
採卵用及び屠殺用鶏		2,562,65
事務用品		617,86
屠殺場		869,50
雑費		294,54
		1,058,092,10
	純剰余	112,001,33
		1,170,093,43

貸方の部		
商品，販売勘定		58,681,70
養鶏場消費商品		197,494,92
養鶏産品，生産勘定（販売）		
鶏及び卵	110,450,80	
雛	388,202,72	498,653,52
雑収益		7,070,91
親鶏収益		1,116,00
孵化収益		
雛生産	384,957,48	
排除卵及び破損卵	22,041,70	406,999,18
車輌収入		77,20
		1,170,093,43

分配純剰余計算書

1968年12月31日現在

借方の部	
資本金に対する利息	
払込済資本金に対し6％	30,70
準備金	
資本金に対する利息差引後の剰余金の10％	11,197,06
新設備・改良基金	
資本金に対する利息差引後の剰余金の20％	22,394,12
分配すべき利益	
組合との取引に比例して組合員に分配する残余	78,379,45
	112,001,33
貸方の部	
剰余及び損失	112,001,33

アミンタス・カバルカンチ・ドリベイラ・マシャード
理事長

カスイザ・マエカワ
副理事長

エドガー・エステベス・ダマセーノ
会計士

会計監査役会報告

定款第54条a，b，及びc号に従い，下記署名の，ジュセリーノ・クビチェック入植地入植者混合協同組合会計監査役会正員は，1968年会計年度に関する意見を提出する。

当監査役会は，当組合の全ての会計帳簿，各種記録及び簿記上のその他の書類並びに1968年12月31日締切った貸借対照表及び対応する損益計算書を検査した後，当組合の現運営理事会の行った全ての行為に対し全面的承認を与える。同理事会に対し，組合の業務を遂行して来た仕方に特別賞讃の決議を記録すると同時に，総会に対し，審査の対象である本会計報告の承認を勧告する。

1969年2月28日

マタ・デ・サン・ジョアンに於て会計監査役会

a シンイチ・フルイチ

b エレニト・デ・アラウジョ・ゴエス

c ムネオ・ホリ

不動産登記（ペルナンブコ州カーボ入植地）

不動産一般登記，証書及び書類，抵当登記事務官，当郡第一公証人たるジョアン・ローペス・フィリョは，法律その他により，

利害関係者の口頭申請に基き，次の通り証明する。

所管の登記所の証書，書類その他の文書の全文登記簿b帳第4冊を探索し，その第148葉から第150葉に，次の記録が記載されている。

第397番，5月7日，転写。移住振興信用融資会社。農業融資契約。本私証書により且つ法の最善の形式に於て，一方の貸主として，移住振興信用・融資会社，ペルナンブコ，訂正，ガナバラ州リオ・デ・ジャネイロ市バロン・デ・フラメンゴ街32番3階に本社，サン・パウロ州首府セナドール・フェイジョー街143番8階に事務所を有し，本件に於ては，1963年10月10日サン・パウロ州サン・パウロ市第7公証人役場第452帳簿第12葉の文書で作成された委任状の副委任に基き，適法な代理人イエシンゲ訂正，イエシゲ・タケノ，他方の借主として，リュイチ・ノモト，日本人，既婚，農民及びその妻ヒデコ・ノモト，日本人，既婚，家事従事，ともにペルナンブコ州カーボ入植地に居住。保証人として，(1)キヨシ・ゴトー，日本人，既婚，農民及びその妻ヤスコ・ゴトー，日本人，既婚，家事従事，ともにペルナンブコ州カルピーナ郡レチロ農場に居住，(2)サダオ・カメオカ，日本人，既婚，農民及びその妻ミドリ・カメオカ，日本人，既婚，家事従事，ともにボニート町ジョアキン・ナブーコ街居住。同意者として，土地分譲植民会社社長ジョゼー・フエルナンド・ローボ，同取締役カルロス・デ・アラウジョ・トーレスは，相互に次の通り，取り極め契約する。

（原文欠落あり）

(d) 本契約書を，本日より30日の期間内に，適法な不動産登記に，第1順位且つ同一権利なしに，適法に登記し，貸主に提出しないとき。

(e) 借主に対する何等かの司法手続が行われ，担保として出された財物または貸主の信用に関する権利を害なう恐れのあるとき。

(f) 担保として出された財物を譲渡するとき。

(g) 農民から職業を変えること並びに第1条に特記した目的と異なる目的に借入金を使用するとき。

(h) 貸主に事前に通知することなく，居所を移転したとき。

第7条　借主の全ての義務は，ペルナンブコ州首府レシフエ市ドン・ボスコ街821番所在の貸主の事務所に於て履行するものとする。

第8条　管轄裁判所は，ペルナンブコ州レシフエ司法区とする。

第9条　本契約及び本契約に基き生ずるその他の義務の全てに対する担保として，借主は，貸主に，第1順位の且つ唯一の抵当として，現実にまた税法上の何等の義務または賦課なしに所有すると申立てる，下記に記述し，個別化した財物を差し出す。即ち，本契約及び本契約に基き生ずるその他の義務の全ての担保に，借主は貸主に300万クルゼイロの価値のある鶏1,000羽を差出すものとする。

第10条　前記の財物は，カーボ市第2登記所公証人ビセンティ・メンデス・シルバが作成した第47冊，第131葉裏から第138葉に登記されている1961年12月30日付の公正証書の通り，ペルナンブコ州カーボ郡所在の土地分譲植民会社所有の不動産内に置かれている。同不動産は，北側はサン・カエターノ製糖農園，サン・ジョアン，スクピラ，モンテ及びマタス各農場，南側は，ペルナンブコ開発会社所有地，東側はゲーラ製糖農園及びペルナンブコ開発会社所有地，西側はパボン製糖農園，セバスチアン・フォボル，ブラニェン，サカンバ各農場及びペルナンブコ開発会社所有地と境界を接している。

第11条　保証人及び主支払人は，本契約の効力に拘らず負債の完全な清算まで，借主が負った全ての義務につき連帯して責任を負うものとする。

第12条　借主は，自身，その相続人及び継承人が，本契約を忠実に履行する義務を負うことを明確に言明する。

このように合意し，契約し，同文及び同形の4通で，本契約書に，下記証人の面前で，法的効力を生ぜしめるため署名する。

サン・パウロに於て，1965年12月27日イエシゲ・タケノ，リュイチ・ノモト，ヒデコ・ノモト，キヨシ・ゴトー，ヤスコ・ゴトー，サダオ・カメオカ，ミドリ・カメオカ，証人，署名判読不能，アデルソン・ルーナ，登記事務官ジョアン・ローペス・フィリョ，謄本の申請があった同登記には，以上の外何も含まれて居らず，叙上につき，相違ないことを証明する。　1967年

注

注1. DIÉGUES JÚNIOR, Manuel. *Imigração, urbanização e industrialização (estudo sobre alguns aspectos da contribuição cultural do imigrante no Brasil).* Rio de Janeiro, Instituto Nacional de Estudos Pedagógicos, 1964. 385 p.

注2. RADIN, Paul. *Indians in South America.* New York, Doubleday, 1942. p. 324
MÉTRAUX, Alfred. *La civilisation matérielle des tribus Tupi-Guarani.* Paris, Lib. Orientaliste Paul Geuthner, 1928.

注3. MARINHO, Ilmar Penna. Problemas de imigração e colonização: política imigratória. *R. bras. Geogr.*, Rio de Janeiro, 26(4):524-36, out./dez., 1964. また次を参照

VALVERDE, Orlando. A velha imigração italiana e sua influência na agricultura e na economia do Brasil. *Boletim Geográfico*, 19:145-157, mar./abr., 1961.

WAIBEL, Leo. Princípio de colonização européia no sul do Brasil. *R. bras. Geogr.*, Rio de Janeiro, 11(2):159-222, abr./jun., 1949.
DAVIE In: WORLD IMIGRATION, 特に日本移民にあてられた章

この点に関し，次を読む価値あり。

WILLEMS, Emílio. Problemas de imigração: critério de seleção. *Estado de São Paulo*, 1947年12月24日付

注4. MARINHO, Ilmar Penna, 前掲書
ANDO, Zempati & WAKISAKA, Katsumori. *O japonês em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, 日本国総領事館 1971年

注5. MARINHO, Ilmar Penna, 前掲書 注3
SAITO, Hiroshi. *O japonês no Brasil.* São Paulo, Escola de Sociologia e Política, 1961. p. 21-40.
VIEIRA, Francisca Isabel Schurig. *O japonês na frente da expansão paulista.* São Paulo, Ed. da Universidade de São Paulo, 1973.
OLIVEIRA, Xavier de. O sentido político-militar da colonização japonesa nos países do Novo Mundo. In: *O problema imigratório na América Latina.*
BORGADUS, De Emory. Aspectos ecológicos das migrações. *R. Serv. públl.*, jul./ago., 1948.
VASCONCELOS, Henrique Dória de. Alguns aspectos da imigração no Brasil. *B. Serv. Imigr. Colonização*, (3) mar., 1941.

注6. SAITO, H., 前掲書 注5

注7. MELLO, Mário Lacerda de. *A colonização e os problemas agrários do Nordeste.* Recife IJNPS. (Separata do Boletim do IJNPS, 10:5-37, 1961.
CARNEIRO, Fernando J. *Imigração e colonização no Brasil.* Rio de Janeiro, Universidade do Brasil. Fac. Nac. de Fil., 1950. p. 30

注8. FREYRE, Gilberto. Casa grande &senzala. 15 ed. Recife CEPE, 1966. 無秩序な移住を仮定したとしても，このような現象が日本人について起きるとは思われない。ブルノ・ローボの著書 *De japonês a brasileiro*,1932.は，この点，参照の価値がある。また同著者の *Japoneses no Japão e no Brasil.* Rio de Janeiro, Imprensa Nacional. も同様。この点に関し，次の論文を参照。
ARAÚJO, César Egídio de. Enquistamentos étnicos. *R. Arq. munic. São Paulo*, 6(65):227-246, mar., 1940.
この論文に於て，著者はサン・パウロ市に於ける特定の民族グループの分布を生態学的に分析している。我々の見るところでは，標題は不適当であり，当時の人文主義的関心を反映している。

注9. FREYRE. G. 前掲書

注10. この言葉は，スペインに於て，フランコ独裁が樹立されたとき現れた。そこから，類似性から，ブラジルの如き，他の国々にも広がって来た。わが国の場合，この言葉は，ナチス及びファシストを受入れ，擁護していたドイツまたはイタリア国籍の者に特にぴったり適合した。後に，日本帝国主義的推進に同意する日本人をも含めるに到ったが，彼等は第二次世界大戦に先立ち，また，時を同じくする事件には無関心のように表面的には見えた。第5列の内には，ナチ・ファシストの軍事力の宣伝に熱狂させられ，その共鳴者となり，活動家にすらなったブラジル人をもまた含められる。ひそかに，あらゆる手段を使って，戦争の心理的準備に於て，ドイツ人及びイタリア人を助け，改党者を作り，何らかの形で，ブラジルが戦争に参加した後，既に公然の敵となったものが，その目的を達成するよう協力した。わが国の商船隊の活動について，ナチ・ファシストに情報を送り，ブラジル船の出港の日時並びに航路を示し，ドイツ及びイタリアの潜水艦が犯罪的にこれを魚雷攻撃するようにしたのは，第5列 ― その内にはブラジル人すら含んでいた ― であった。しかも ― 強調する価値があるのは ― 魚雷攻撃が，ブラジルが中立状態を守っていた時ですら行なわれたことである。そこから，外国人が，同化不能の時，わが国の内で，文化的に，特に政治的，思想的に独立した孤立した小さな集団を発達させる危険を避けるための用心と措置が必要となるのである。

注11. MARINHO, I. Penna. 前掲書 注3

注12. KUBITSCHEK, Juscelino et alii. *Imigração sem preconceitos.* Rio de Janeiro, Departamento de Imprensa Nacional, 1958. また，次を参照
REIS, Fidelis & FRANÇA, José de. O problema imigratório e seus aspectos étnicos, *Revista dos Tribunais.* Rio de Janeiro, 1924. 更に次を参照
CARNEIRO, Fernando J. 前掲書 注7

注13. DIÊGUES JÚNIOR, Manuel. Os imigrantes e a sua integração à cultura regional. In: REUNIÃO BRASILEIRA DE ANTROPOLOGIA, 3, Rio de Janeiro, 1956.

注14. 同 上

注15. ÁVILA, José Bastos de. Restrições quantitativas à imigração. *Digesto Econômico*, (123):122-212. Apud DIÊGUES JÚNIOR, Manuel, 前掲書，注13による。更に次を参照

——————. *Le imigration au Brésil contribution a une théorie génerale de l'imigration*. Rio de Janeiro, Liv. Agir Ed., 1958.

——————. *Integration culturelle des immigrants: manuel à l'usage des organisations gouvernementales et des agences benevoles*. Unesco, 1957.（謄写印刷）

注16. PINTO, Roquette. *Ensaios de antropologia brasileira*. São Paulo, Ed. Nacional, 1953.

VIANA, Oliveira. *Populações meridionais do Brasil e raça e assimilação*.

注17. SAITO, Hiroshi. 前掲書 注5 24頁以下 更に次を参照

——————. *O japonês na frente da expansão paulista*. São Paulo. Liv. Pioneira/Universidade de São Paulo, 25頁以下 この著作に於て，著者はマリリア市に於ける日本人の吸収過程を研究している。

注18. 次は，参照の価値あり

BORGADUS, Emory. A Race Relation Cycle. *American Journal of Sociology*, 25 (4) jan., 1930

PIERSON, Donald. *Teoria e pesquisa em sociologia*. São Paulo, ,1953. p. 207-9, Hiroshi Saito, 前掲書 注17による。更に次のものは興味がある。

SAITO, H. 前掲書 注17 また次を参照

O VESTION de l'immigration aux Estats Units, *Etudes*, Paris, 18(16):420-30, 1924

注19. JORNAL DO COMMERCIO, Rio de Janeiro, 1947年4月19日付

注20. SAITO, Hiroshi, 前掲書 注5 25頁 更に

——————. A família do imigrante japonês para o Brasil. *Sociologia*, São Paulo, 22(1):12-28, mar., 1960. 更に次を参照

SMITH, Robert J. & REARDALEY, D *Japanese Culture Development and Characteristics*. Londres, Methuem, 1963.

注21. SMITH, T. Lynn. *Brasil povo e instituições.* Rio de Janeiro, Programa de Publicações Didáticas, Agência Norte-Americana USAID, 1967. p. 156-61
LOBO, Bruno. *Japoneses: no Japão e no Brasil.* Rio de Janeiro, Imprensa Nacional. [s.d.] 著者は2つの状況を比較し，日本人は同化能力ありと論じている。

注22. SAITO, H. 前掲書 注5 23－5頁

注23. SAITO, H 前掲書 注5 次を参照の価値あり
CÂMARA, Aristóteles de Lima &NEIVA, Artur Hehe. Colonização nipônica e germânica no sul do Brasil. *Revista de Imigração e Colonização,* Rio de Janeiro, 2(1) jan., 1941.

注24. SAITO, Hiroshi. O elemento nipônico de uma comunidade brasileira. *Arquivos do Instituto de Antropologia,* Natal, UFRN, 2(1-2):21-38, mar., 1966.
更に次を参照
ANDO, Zempati & WAKISAKA, Katsumori. Sinopse histórica da imigração japonesa no Brasil. In: *O japonés em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971. p. 4-40
WILLEMS, Emílio. Aspectos da aculturação dos japoneses no Estado de São Paulo. *B. Fac. Fil. Ci. Letras,* (82) 1948. (Série Antropologia, 31)

注25. 同上 27－8頁 またSAITO, H. 前掲書 注5

注26. SMITH, T. Lynn, 前掲書 注21

注27. HATTENSHI, Nipongin. Apud. SAITO, H. 前掲書 注5 28－9頁
ACORDO Cultural entre os Estados Unidos do Brasil e o Japão. In: BRASIL. Ministério das Relações Exteriores. *Acordos Culturais.* Rio de Janeiro, 1965. p.69-72.

注28. SAITO, H., 前掲書 注5

注29. 同上
ANDO, Zempati & WAKISAKA, Katsumori, 前掲書 注4

注30. SAITO, H. 前掲書 注5 28－9頁

注31. SAITO, H. 前掲書 注5 29頁

注32. 同上，また ANDO, Z. & WAKISAKA, K. 前掲書 注4参照

注33. SAITO, H. 前掲書 注5 次は参照の価値あり
LIGEIRAS notas sobre o trabalho japonês no Brasil. Rio de Janeiro, Papelaria Brasil, 1929.

注34. ÁVILA, José Bastos de. 前掲書 注15
CARNEIRO, J. Fernando. 前掲書 注7
ANDO, Zempati & WAKISAKA, Katsumori, 前掲書 注4

注35. SAITO, Hiroshi. 前掲書 注5 次のものは参照不可欠である。
AB'SABER, Aziz Nacib. O habitat rural dos japoneses de Santa Isabel: suas características e seu exemplo. *B. Paulista Geogr.*, São Paulo, 10 mar., 1952. Também:
WILLEMS, Emílio. Assimilação e populações marginais no Estado de São Paulo. *B. Fac. Fil. Ci. Letras*, São Paulo, AFSP, 82 (Série Antropologia, 3)

注36. ANDO, Z. & WAKISAKA, K. 前掲書 注4及び更に
SAITO, H. 前掲書 注5

注37. SAITO, H. 前掲書 注5
SMITH, T. Lynn. 前掲書 注21 わが国に対する日本人移住の増加は，大部分，日本とブラジルとの間に結ばれた協定によるものである。この点に関しては次を見よ。
ACORDO de migração entre os Estados Unidos do Brasil e o Japão. In: BRASIL. Ministério das Relações Exteriores. *Acordos Culturais.* Rio de Janeiro, 1965. p. 69-72. 匿名の筆者は，特に東京で署名された文化交流協定の正文に言及している。

注38. SAITO, H. 前掲書 注5

注39. ANDO, Z. & WAKISAKA, K. 前掲書 注4

注40. 当然のことながら，同様のことがアメリカ合衆国でも起きた。この点に関しては，次を見よ。
WALTER, Paul A. F. *Race and Culture Relations.* New York, McGrow Hill Book, 1952. p. 367-371.

注41. O LIBERAL, Belém PA. 1973年12月2日付.

注42. ANDO, Z. & WAKISAKA, K. 前掲書 注24 (Relatório do Simpósio em junho de 1968 ao ensejo do 60o. aniversário da imigração japonesa para o Brasil – Centro de Estudos Nipônicos.)

注43. ブラジルに於ける移住問題を分析するに当り，次のものを忘れることはできない。
SHINKOKAI, Kokusai Bunka. *Bibliography of Standard Reference Books for Japanese Studies with Descriptive Notes.* Tokio, s. ed., 1962. 10 v.
日本人を色々な様相及び状況下で観察し，掲載されている著作の内には前掲の題目に関連のあるものがある。

注44. 次のものを参照すると面白い。
El Japón en transición – *Cien anõs de modernización.* Ministério de Assuntos Estrangeiros, Japón, 1968; e The Japan of today. Ministry of Foreign Affairs. Japan, 1971. これら2冊の本の内で，日本人は第2次大戦で敗北したと見做す代りに，「国家的再建の機会」を確保したお蔭で，勝利者であると判断していることを看取できる。両書の内に，今日，大国の中に伍し，例えば米国及びソ連と競争する東洋の国の社会・経済的発展を特に，また文化的発展を広い意味で，全面的に描いたものがある。更に次のものも読む価値がある。O Japão para Indústria e Comércio do Brasil – Câmara de Comércio e Indústria Japonesa do Brasil. São Paulo, 1970.

日本人の外国人 ― この場合，南米人，特にブラジル人 ― に対する行動の見方に関し，対立する傾向の解釈の2つの著作を指摘すれば充分であろう。1つは，Vivaldo Coaracy，の O Perigo Japonês, Rio de Janeiro. Editora José Olympio, 1942. である。同書は，1942年4月乃至7月の間，リオ・デ・ジャネイロ市の JORNAL DO COMMERCIO 紙に掲載された論文を集めたもので，公然と反日的立場のものである。他は，Bruno Lobo の Japoneses no Japão e no Brasil, で日本移民を擁護し，特に日本人の定着に関連して「興味ある特徴を示す」ブラジルの環境的要素に注意を喚気し，「ブラジルの居住環境は，わが国の面積からして，極めて変化に富んで居り，更に山嶽，河川，地質構造，色々な高度，風の体制，これ等はその組合せによって，異なる気候を作り出すことのできる要素であり，それ等から生ずる差違を加えると一層変化に富むことになる。このような地理的雑多性は，日本人の出身地に応じ，適応や文化的統合の過程を容易にしている。」ブルノ・ローボの著書は，1926年リオ・デ・ジャネイロ市で国立印刷局から出版された。

1934年日伯印刷所が，サン・パウロ市で印刷した Nestor Ascoli の O Japonês no Brasil と題する演説を読むことは時宜にかなっている。この演説は，1934年2月国会で行なわれたもので ARTUR NEIVA の反日的見解を反駁したものである。ネイバの見解は，*Revista de Imigração e Colonização.* 2(1) :39-121, jan. 及び 2(2/3) : 892-902 abr./jul. に掲載された Aristóteles de Lima Câmara との共同論文 "Colonização Nipônica e Germânica no Sul do Brasil" に特に現われている。この論文で，著者達は，同化に焦点を置き，民族的異体形成の問題に注意を喚起した。

注45. この点に関し，次の参照不可欠の著作を見よ。
LEHMANN, F. W. Paul. *Geografia del Japon.* Trad. e notas de Carlos de Salas. Barcelona, Labor, 1929. また，次のものが参照の価値がある。

JAPÃO Ministério dos Negócios Estrangeiros do Japão, 12(3), 1974.
KONDER, Alexandre. *História do Japão.* Rio de Janeiro, Ed. Século XX, 1942.
BAIANA, Henrique Paulo. *O grande Japão.* Rio de Janeiro, Renascença Ed. 1932.

注46. NEGRE, Pedro. *Budismo: enigma de um nirvana misterioso.* Barcelona, Labor, 1946.
GLASENAPP, H de. Mystéres bouddhistes. Trad. de Jacques Marty. Paris, Payot, 1944.

注47. MENDES SOBRINHO, Otávio Teixeira. Imigrante japonês e o desenvolvimento agrícola do Brasil. In: *O japonês em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971. サン・パウロ州では，マリリア市のコロニアが，また，パラナ州では，アラポンガス郡のエスペランサのコロニアが目立っている。同じような配分が，DIÉGUES JÚNIOR, Manuel. *Etnias culturais no Brasil.* Rio de Janeiro, Ed. Paralelo, 1972. p. 119-121. でも示されている。

注48. 軽視してはならない事実は，ブラジルの内で，1地域から他地域へ，また，同じ地域内で，1州から他州への，日本人の再配置である。

注49. MELO, Veríssimo. *Assimilação e aculturação de japoneses no Brasil.* Separata do BOLETIM DO INSTITUTO DE ANTROPOLOGIA DA UNIVERSIDADE DO CEARÁ, Fortaleza, 3:17-38,dez. Mario Lacerda de Melo, は Boletim do IJNPS, no. 10, Recife, 1961 に発表された東北伯の植民及び農業問題に関する優れた研究論文の脚注に於て，V. Antônio Campos da Silva, の "Pium o japonês do Rio Grande do Norte". と題する未発表論文に言及している。同論文は引続き未発表のままとの印象を持っている。

ドイツ系人類学者エミリオ・ウイレンス及びブラジル人人類学者ベリシモ・デ・メーロに対し抱く敬意と敬服の念にかかわらず，前者が提案し，後者が受け入れている同化（ *assimilação* ）と文化的適応（ *aculturação* ）の概念化に同意できない。研究の過程で，同化は，文化的適応，文化移植（ transculturação ），融合（ sincretismo ）の過程の一段階 — 最終段階 — に相当することを証明して見たい。社会的分野は，ウイレンスが目指した唯一のものであるが，文化の構成分子の1つであるので，文化的適応の現象（文化移植及び融合もまた）は，暗黙裡に同化の現象を含んでいる。次のものを見よ。

FREYRE, Gilberto. *Sociologia.* Rio de Janeiro, J. Olympio, 1945.
PIERSON, Donald. Estudos de organização social. São Paulo, Martins, 1949. 672 p.
———————. *Teoria e pesquisa em sociologia.* São Paulo, 1945.
VALENTE, Waldemar. *Sincretismo religioso afro-brasileiro.* Pref. Amaro Quintas. São Paulo, Ed. Nacional, 1955. (Col. Brasiliana)

注50. 外国人 ― この場合は日本人 ― が文化力学から，そのより一般的面に於て，逃れられないことは当然である。彼を受入れた国民の文化的影響を受け，風習や生活の規範を取り入れるのみならず，自分の習慣，慣行，及び技術の若干を，その重要性から押し付け，そこから真の共生的，あれを取りこれをやる交換が生れる。文化的に，日本人は，単なる受動的要素として振舞うことはできなかった。また，当然期待されているように，日本人から積極的な且つ受入れるに価する影響を受けることを望むブラジル人の利益のため，活動的な要素であることを示さねばならなかった。この点に関し，経済的展望を狙ったブラジル人著者の労作を参照する価値がある。それは，O JAPONÊS EM SÃO PAULO E NO BRASIL，に含まれている Ruy Aguiar da Silva Leme の "Aspectos da Contribuição de Japoneses para o Desenvolvimento Econômico do Brasil"(ブラジル経済の発展に対する日本人の貢献)である。ついでながら，今日の日本に於ける技術的発展は極めて高く，ノウハウを取得すると云う意味では，極めて多くを日本から期待できると云える。

注51. NOLTINGK, B. F. *The Art of Research*. Amsterdam, Elsevier Publ., 1963.
SELLITZ, Claire et alli. *Métodos de pesquisa nas relações sociais*. Ed. rev. Trad. de Dante Moreira Leite. São Paulo, Ed. Herder/Univ. de São Paulo, 1967.
PHILLIPS, Bernard S. *Pesquisa sócio-estratégias e táticas*. Trad. port. de Vanilda Paiva. Rio de Janeiro, Agir Ed., 1974.
GARRETT, Annette. *A entrevista, seus princípios e métodos*. 4. ed. Rio de Janeiro, Agir Ed., 1964.
FESTINGER, Leon. & KATZ, Daniel. *Les méthodes de recherche dans les sciences sociales*. Trad. francesa de Honoré Lesage. Paris, Presses Universitaires de France, 1959. 2 v.
AGUEDA, Orlando (trad. e adapt.) *Como preparar um relatório*. Rio de Janeiro, Forum Ed., 1973.
NOGUEIRA, Oracy. *Pesquisa Social*. Rio de Janeiro, CBPE, 1967

30年以上前に始めた人類学及び宗教社会学の我々の研究に於て，写真，スライド，図を通ずる，今日視覚人類学と呼ばれるものの使用を等閑にしたことは決してない。更に，機械的方法による音響による資料作成，類推的に音または聴覚社会学と呼ぶことのできる実践の利用もである。双方とも，実際に使われ，資料蒐集から多くの場合見逃される瞬間や情報をより良く知覚するため，補完し合い，直接たると組織的 ― これは調査票や面接調査を通ずる ― たるとを問わず，自由な観察に従って来た。この点に関し，Pinto Ferreiraの Curso de Pesquisa Social, José Konfiron Editora. Rio de Janeiro, 1972. は間違なく有益な本であることを示した。

注52. 土地分譲植民会社（CRC）は，1950年以来，活動し，肉体的及び精神的健康診断を通じ，移住者の農業経験を考慮し ― 移住者は家族を組織していなければならない ― 家族の選考の任に当って来た。3年間，家族は，医科，歯科，社会，技術及び金融上の援護を受けながら，観察される。（立証体制）。カーボ農業入植地では，CRC は積極的な役割を演じた。医者は，週1回やって来る。入植地内に住む社会福祉士は病気の者を医者に差し向ける。医者とならんで，同じ条件で，歯医者が活動し，主として抜歯及び充塡を行う。技術指導をする農業技師は，入植地内に住むか1日中入植地に頑

張っている。農業技師の外，常に2，3人の農業技手が居る。

土地区画は，10年間で支払うCRCの手形保証により，銀行融資で購入される。13年の終りに，移住者は土地の所有者となる。売買予約証書を受取る4年目から，同証書をもって銀行から融資を受けることができる。

CRCは次の規範を定めている。

1. 土地区画に居住すること
2. 管理当局の指針に従うこと
3. 少なくとも，区画の半分以上を耕作すること
4. 約定した債務を払うこと
5. 共同生活をする能力を示すこと
6. 会合に参加すること
7. 農地での労働の慣例的方式を変化させる能力

カーボ農業入植地の全ての家族が，必ずしもCRCと結び付いている訳ではない。日本人は，家族ごとに，1区画，1耕耘機，噴務器及び牛乳生産のため1匹の牝牛を受取った。区画の大きさの平均である10ヘクタール内では，牧畜をする条件は無い。コロノが選考され，耕地を引受けた時，コロノは，融資のため，銀行と直接交渉する条件を有していないので，最初の耕作には融資が行なわれる。この最初の段階はCRCが融資する。コロノが見知られた後は，CRCは手形の裏書をするようになる。

CRCの援護下の入植地は混合，即ち，日本人とブラジル人で構成されている。若干の場合，最初の段階で，移住事業団が融資を受持ち，CRCは免除された。この第1段階で，必要な時，CRCは肥料を供給した。CRCは，日本人の生産高はブラジル人の倍であると言明している。その原因は，個別的にまたは全体として，より良い健康，より良い農業形成，女性が男性と同程度に働くことが考えられる。CRCの援助は，銀行融資のためでない限り養鶏には拡げられていない。日本人は，一般的に，肥料，灌漑及び害虫駆除の技術の知識を有する。CRCは，混合飼料工場を所有している。

（ジョアキン・ナブコ社会研究所人類学部社会学助手エウヂエニア・マリア・セザール・デ・メネゼスがCRC社長カルロス・デ・アラウジに行なったインタビュー）

注53. ジョアキン・ナブコ社会研究所人類学部人類学助手ファテイマ・キンタスが行なったインタビュー。

注54. 最初は，バイア州，ペルナンブコ州，リオ・グランデ・ド・ノルテ州及びセアラ州には，夫々120，34，13及び5家族がいた。バイア州は42，ペルナンゴコ州は13，リオ・グランデ・ド・ノルテ州は2家族を失い，セアラ州は同じ数を維持している。流出ー若干の家族は南部に移住し，その他は自已の勘定で違った場所に住んでいるーの原因の大部分は，入植地が金融的及び技術的に依存する農業振興院（INDA）が無くなり，農地改革院（IBRA）だけになると云う恐れであった。コロノは，植付作物の種類によって期間は異なるが，播種に続く苗の農段階にあり，出費を賄う金を持たないので，INDAに助けを求めたが，INDAは事実上廃止されているので，移住地とはもはや何の関係も無いと云い，IBRAに行くと，これは未だコロノに援護を与える職権を持たないと云う状態であった。コロノ達は，パニック状態で，働いて金を稼ぎ，

生きのびることのできる場所を求めて，当て所もなく脱出したのであった。デイアリオ・デ・ペルナンブコ紙の報道によれば，1968年の6月末から7月初にかけ，ポニート移住地の日本人は，入植地に復帰し，INDAの援助を受けた。この報道は，我々も確認することができた。

注55. MELO, Mário Lacerda de. 前掲書 注7

注56. 同 上

注57. MELO, Mário Lacerda de 前掲書 注5 28頁

注58. 同 上

注59. FUNDAÇÃO IBGE. Enciclopédia dos Municípios Brasileiros – Ceará. Rio de Janeiro, 1960. v. 16
INCRA. Departamento de Recursos Fundiários. Divisão de Recursos Naturais. Núcleo Colonial Pio XII. 1971.
LUNA, Francisco de Assis & BRANDÃO, Iolanda Alves. *Estudo sócio-econômico do núcleo colonial Pio XII.* Fortaleza, M. A. INDA, 1969.

注60. FUNDAÇÃO IBGE. *Enciclopédia dos Municípios Brasileiros – Rio Grande do Norte.* Rio de Janeiro, 1960. v. 17
MELO, Veríssimo de. Assimilação e aculturação de japoneses no Brasil. R Inst. Antrop. Univ. CE., Fortaleza, (3):17-38, dez., 1959.

注61. FUNDAÇÃO IBGE. *Enciclopédia dos Municípios Brasileiros-Pernambuco.* Rio de Janeiro, 1960. v. 18

注62. SERPE. *Anuário estatístico de Pernambuco.* Recife, Secretaria de Coordenação Geral, Departamento Estadual de Estatística, 1969.

注63. FUNDAÇÃO IBGE 前掲書 注61

注64. 同上 また
FUNDAÇÃO IBGE. *Bonito.* Rio de Janeiro (Série Monografia)

注65. FUNDAÇÃO IBGE. *Enciclopédia dos Municípios Brasileiros — Bahia.* Rio de Janeiro, 1958.

注66. 同 上

注67. 小地域別の位置は次の研究による。
NOVA divisão territorial do Brasil em grandes regiões e microrregiões homogêneas. (Separata da *Revista Brasileira de Estatística*, 30(19) jul./set., 1969.

注68. 次を参照 MORTARA, Giorgio. *Pesquisa sobre a natalidade do Brasil* Estudos sobre a natalidade e a mortalidade no Brasil. Rio de Janeiro, 1950 e 1952 IBGE, (Série, 10, 14)

注69. MONTANDON, George. *La civilization ainou.* Paris, Payot, 1934
RAMOS, Arthur. *Introdução à antropologia brasileira.* Rio de Janeiro, Casa do Estudante do Brasil, 1947. (Col. Estudos Brasileiros) v. 2

少なくとも，3つの人種の集団が，原始日本の人種的混合に加わったと考えるものがいる。コーカソイド起源のアイヌ人，やゝ混じっているが，皮膚が白く，髪が豊かで，波うって黒く，眼は色が濃く，蒙古襞が無く，鼻は一般に鷲鼻で，極立って直顎で，白色人種との近似性を示している。モンゴロイド，非常に混血し，満州・朝鮮人，蒙古人，マレー人及びインドネシア人を含んでいる。第3は，メラネシア人とネグリト人との混血の結果である。日本人種の正確な人種的構成については，アルツール・ラーモスが前掲書で正に指摘した如く，見解の一致は実際存在しない。

注70. 同上 次の書を参照することは重要である。
BENAZET, A. *Le Japan avant les japonais: étude ethnographique sur les ainou primitives.* Paris, Payot, 1910.
忘れてならない論文は THE AINOU, or hairy man of Iesso, Saghalin and the Kurile Islands. *Proceed. of the Boston Soc. of Nat. History*, Boston, 1867.

注71. MONTANDON, G. 前掲書 注69

注72. FREYRE, Gilberto. O brasileiro como tipo nacional de homem situado no trópico e, na sua maioria, moreno: comentários em torno de um tema complexo. (Separata da *Revista Brasileira de Cultura*. 2(6): 41-57, out./dez., 1970).

———————. Ainda a propósito de Sonia Braga. *Diario de Pernambuco*, Recife, 14 1977年11月15日付

注73. 第14表の比率は，我々及び協力者が行なった体躯の特徴の直接観察に基いている。

注74. このような人類学的区別は昔からある。1885年に，バエルツは既に，日本人種の2区分に言及していた。かくて，主として社会の上層階級に代表された，やゝ長頭の，細面の顔，一般的に黒い目，細く凸状または真直な鼻，ほっそりした体の繊細型（大名）及び一般民衆に代表され，殆んど常に著しく短頭で，広い顔面，出張った頬骨，吊り上った眼，平べったい鼻，大きな口，ずんぐりした体の粗野型について言及している。

注75. COMAS, Juan. *Manual de antropologia física*. México, Fondo de Cultura Econômica, 1957. p. 265-6.

ÁVILA, José Bastos de. *Antropologia física*. Rio de Janeiro, Liv. Agir Ed., 1958. p. 160-3.

DENIKER, J. *Les races et les peuples de la terre*. Paris, Masson Ed., 1926.

BARRADAS, M. *Manual de antropologia*.

MONTANDON, G. La race les races. Paris, Payot, 1933.

注76. SAITO, H., 前掲書 注5

注77. COWLES, Maria Antonia Lopes. Panorama geral da população japonesa e seus descendentes no Brasil. In: *O japonês em São Paulo e no Brasil*. São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

注78. この点に関し，次を参照

SOARES, Dirce Pestana. Análise de composição etária e o comportamento de imigrantes e seus descendentes. In: *O Japonês em São Paulo e no Brasil*. São Paulo, Consulado Geral do Japão 1971.

注79. SAITO, H. 前掲書 注5 52頁

注80. BURNS, Eduard Mcnall. *História da civilização ocidental.* 英語より Lourival Gomes Machado, Lourdes Santos Machado e Leonel Vallandro 訳. Porto Alegre, Ed. Globo, 1965.
HOLANDA, Sérgio Buarque de. *História da civilização.* São Paulo, Ed. Nacional, 1975.

注81. MORTARA, Giorgio. *Estudo sobre população.* Rio de Janeiro, IBGE
SMITH, T. Lynn. *Introdução à andlise das populações.* Rio de Janeiro, Universidade do Brasil. Faculdade Nacional de Filosofia, 1950. (Publicação avulsa, 1)
GEORGE, Pierre. *Geografia da população.* Trad. de Miguel Urbano Rodrigues. São Paulo, Difusão Européia do Livro, 1969.

注82. MONTANDON, George, 前掲書 注69
——————. *L'ethnié française.* Paris, Payot

注83. フランス人類学の古典の1つ
DENIKER, J. *Les races et les peuples de la terre.* Paris, Masson, 1926.
は，この点に関し忘れることはできない。また，
Ávila, José Bastos de 前掲書 注74

注84. WILLEMS, Emílio. Shindô-Renmei: um problema de aculturação. *Sociologia,* São Paulo, 9(2) 1974
——————. Aspectos da aculturação dos japoneses no Estado de São Paulo. *B. Fac. Fil. Ci. Letras,* São Paulo, (82) 1948.
——————. ——————. *Antropologia,* Rio de Janeiro, (3)

注85. 見知らない人との最初の接触に於て，日本人児童は内気な，疑い深い，固い表情であるように見える。このような現象は，しかし，外国人，特に日本人だけのものではない。ブラジル人の児童もまた，そして大人ですら，農村地帯に住むものは，都市，主として首府の人間の前では，引込み思案で，無口であることをまた示している。一般的に都会人の面前の農村人に起ることである。特に，社会・経済の水準及び一般的に文化の水準の低い人間が，文化的に良い状態にある人間の面前で示すものである。或る時間の交際の後，またはやゝ長い接触の後，表面的に陰気な且つやゝはにかんだ日本人児童は，快活に且つ気安く話すようになって来る。調査員との最初の接触の時とその後の，時には同じ日の後刻の，同じ児童の写真を通じて観察することができるものである。

注86. MELO, Mário Lacerda de. 前掲書 注55

注87. ELIADE, Mircea. *O sagrado e o profano.* ドイツ語からの訳 Rogério Fernandes. Lisboa, Ed. Livros do Brasil, s.d.

注88. 一般に，より年配の者の方が，カトリック教に既に譲歩し，その価値を受入れているとは云え，仏教信仰に忠実であるのに気付くのは，面白いことである。このような人の居る殆んど全ての家に仏壇，一種の小さな厨子で，木でできた，ブラジル人またはポルトガル生れのブラジル人の貧しい工匠が粗末に彫刻したわが国の古い大衆的なオラトリオのようなものがある。

注89. GONÇALVES, Ricardo Mário. Religião do Japão na época da imigração para o Brasil. In: *OJAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.
NAGAI, Hideo. O estabelecimento da constituição Meiji. *Iwanami Koza Nihon Rekishi.* Tokio. 16. 1952.
FANE, Tonsonby. *The vicissitudes of shinto.* Kyoto, 1963.
———. *Studies in Shinto and Shrines.*

注90. KEESING, Felix. *Antropologia cultural.* Rio de Janeiro, Ed. Fundo de Cultura, 1961.
HERSKOVITZ, Melville. *El hombre y sus obras.* Hernnandez Barroso. のスペイン語訳 México, Fondo de Cultura Econômica, 1952.
MONTANDON, George. *Traité d'ethnologie culturelle.* Paris, Payot, 1934
———. *L'ethnie française.* Paris, Payot, 1935.
VALENTE, Waldemar. *Introdução à antropologia cultural.* Recife, Universidade Católica de PE., 1953.
———. *Misticismo e região.* Recife, Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais, 1952
SCHMIDT, Wilhelm. *Manual de história comparada de las religiones.* Madrid, 1941.

注91. 一般的に，類似の例がヒンヅー教にも生じている。この点に関し，次を参照する価値がある。
RENOU, Louis. *Hinduismo.* Afonso Blachyre の訳，Rio de Janeiro, Zahar Ed., 1964.

注92. NEGRE, Pedro. *Budismo.* Barcelona, Ed. Labor, 1946. による。

注93. 同上 また RENOU, Louis, 前掲書参照

注94. EARHART, Byron. The new Religions of Japan. In: *Monumenta Nipponica.* Tokyo, The Voyagers, 1970.

注95. FANE, Tonsonby, 前掲書 注89による。ジルベルト・フレイレの未来の社会工学に関する考え方は，過去及びこの現在 ― 非常に速く動く現在なので過去と一致し，または混同する ― の事実及び出来事に聡明に根拠付けられたもので，あまり遠くない未来に関連した或る種の問題に対する重要な示唆として価値がある。

注96. RHADAKRISHNAM, S. *Religión y sociedad.* Josefa Sartre de Cabot. による英語原文からのスペイン語訳 Buenos Aires, Ed. Sudamericana, 1955

注97. WILSON, Brayan. La religión en la sociedad. Juan Carlos Garcia Barrón. のスペイン語訳 Barcelona, Nueva Colleción Labor, 1969.

注98. FREYRE, Gilberto. *Além do apenas moderno.* Rio de Janeiro, J. Olympio, 1973. p. 67

注99. 同上 108頁～121頁

注100. 同上

注101. GUIDE to Budhism. Tokyo, The Seikyo Press, 1968

注102. GONÇALVES, Ricardo Mário. A religião no Japão na época da imigração para o Brasil e suas repercussões em nosso país. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

注103. MAEYAMA, Takashi. Religião, parentesco e as classes médias dos japoneses no Brasil urbano. In: *ASSIMILAÇÃO e integração dos japoneses no Brasil* Orientação de Hiroshi Saito e Takashi Maeyama. Petrópolis, Vozes, 1973.

注104 KENNEDY, Ruby J. R. Singler or Triple Melting-pot? Inter-Marriage Trends in New Haven, 1870-1940. *American Review of Sociology*, 49(4): 331-339, 1944

——————. Singler or Triple Melting-pot? Inter-Marriage Trends in New Haven, 1870-1950. *American Review of Sociology*, 1952

注105. LÉVY-BRUHL, Lucien. *La mentalité primitive*. Paris, 1922.
BOAS, Franz. *The Mind of Primitive Man*. New York, 1939.
LÉVY-BRUHL, Lucien. *Les carnets*. Pref. de Maurice Leenhardt. Presses Universitaires de France, 1940, 本書で，正直且つ稀れな科学的前言取消に於て，著名な哲学者・社会学者は，原始的精神構造に関する自分の考え方の全てを否認している。

注106. VALENTE, Waldemar. *Sincretismo religioso afro-brasileiro*. São Paulo. Ed. Nacional, 1955. (Col. Brasiliana)
——————. *Islamismo em Pernambuco*. Recife, Imprensa Universitária, 1957.

注107. BALDUS, Herbert & WILLEMS, Emílio. Casas e túmulos de iaponeses no vale da Rivera de Iguape. *R. Arq. Municipal*, São Paulo. 7(77):121-137, 1941
MELO, Veríssimo. 前掲書 注49 は2人の筆者は，ジルベルト・フレイレがその著書 Em torno de alguns túmulos afro-cristãos em Moçâmedes. Salvador. Liv. Progresso Ed., s.d. で採用したと類似の技法または研究準則によったと指摘している。

注108. CASTRO, Josué de. *Ensaios de geografia humana*. São Paulo, Ed. Brasiliense, 1964. p. 63.

注109. Ver: JAPAN EMIGRATION SERVICE, Tokyo, 1959.

注110. MELO, Veríssimo de. 前掲書 26頁

注111. MELO, Veríssimo de. 前掲書 注29 27頁

注112. SAITO, Hiroshi. Alguns aspectos de adaptação de imigrantes japoneses no Brasil. *Sociologia*, (4). 1958. ベリシモ・デ・メーロ前掲書による。

注 113. ブラジル南部の入植地に於ける日本人の住居の詳細については, MELO, Veríssimo de. 前掲書 注 49

注 114. 前掲注 54 参照

注 115. SMITH, T. Lynn. 前掲書 注 21

注 116. SAITO, Hiroshi. O cooperativismo na região de Cutia. *Sociologia*, 12

注 117. この点に関しては, SUGESTÕES PARA ADUBAÇÃO NA BASE DE ANÁLISE DO SOLO. Brasil, 1965. 参照が望ましい。最初の試みである。この論文は, 1969 年の生産を基礎とし, わが国農家にとり有益な資料を含む表がある。

注 118. この話題は, 1977 年 5 月 22 日付 DIÁRIO DE PERNAMBUCO, 紙に「日本の南瓜は貯蔵に耐える」と題する探訪記事で, 関心の的であった。

注 119. WOLFFENBUTTEL, Ervin. A abóbora hokkáido kabotchá no tratamento do diabete. *Revista Brasileira de Medicina*, Rio de Janeiro, 27(4) abr., 1970.

注 120. この点に関し, "IKEBANA, arte japonesa do arranjo floral", in FATOS SOBRE O JAPÃO, dezembro, 1969. Tokyo. 参照の価値がある。日本の花を生ける芸術の研究である。

時間は, 使用される材料及び生け方により象徴される。

(a) 使用される材料

過去 完全に開いた花, 枯れた莢または葉

現在 半開の花または完全な葉

未来 来るべき生長を示唆するものとして, 蕾

(b) 生け方

春 強い湾曲の優越

夏 発展と充実を象徴

秋 繊細と散在する要素

冬 眠りと郷愁を象徴する

注 121. DUARTE, Abelardo. Aspectos da mestiçagem nas Alagoas. Separata da *Revista do Instituto Histórico de Alagoas*, Maceió, 27, 1951, 1952, 1953, 1955.
COUTINHO, Aluisio Bezerra. A mestiçagem humana e o problema das culturas. Separata da *Revista Médica de Pernambuco*, Recife, dez., 1933, jan., 1934.

注 122. ALBUQUERQUE, Eduardo Basto. Informações gerais na sociedade japonesa e imigração para o Brasil. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971

注 123. CARDOSO, Ruth Correia Leite. O agricultor e o profissional liberal entre os japoneses no Brasil. *Revista de Antropologia*, São Paulo, 11:53-60 jun./dez., 1963.

注 124. MARTY, Paul. *Études sur l'Islam au Dahomey*. Paris, E. Leroux, 1926

注 125. ORTIZ, Fernando. *Los negros brujos.* Madrí, 1906

注 126. RODRIGUES, Nina R. *L'animisme fétichiste des négres au Bahîa.* Salvador, 1900.

注 127. AKIYA, Einosuke, 前掲書 注 101

参 考 文 献

1 – AB'SABER, Aziz Nacib. O habitat rural dos japoneses de Santa Isabel: suas características e seu exemplo. *B. Paulista geogr.* São Paulo, (10) mar., 1952.

2 – ACORDO cultural entre os Estados Unidos do Brasil e o Japão. In: BRASIL. Ministério das Relações Exteriores. *Acordos culturais.* Brasília [s.d.]

3 – AGUEDA, Orlando. (trad. e adapt.) *Como preparar um relatório.* Rio de Janeiro, Forum Ed, 1973.

4 – AKIYA, Einosuke. *Guide to Buddhism.* Tokyo, The Seikyo Press, 1968.

5 – ALBUQUERQUE, Eduardo Basto. Informações gerais na sociedade japonesa e imigração para o Brasil. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

6 – ANDO, Zenpati & WAKISAKA, Katsumori. História da imigração japonesa no Brasil. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

7 – ANDO, Zenpati & WAKISAKA, Katsumori. Sinopse histórica da imigração japonesa no Brasil. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

8 – ARAÚJO, César Egídio de. Enquistamentos étnicos. *R. Arq. mun. de São Paulo, 6* (65) mar., 1940.

9 – ASCOLI, Nestor. *O JAPONÊS no Brasil.* São Paulo, Tipografia Nippak, 1934.

10 – ÁVILA, José Bastos de. *Antropologia física.* Rio de Janeiro, Agir Ed. 1958. 324 p. il.

11 – ÁVILA, Bastos de. *Le immigration au Brésil· contribution a une théorie generale de l'immigration.* Rio de Janeiro, Agir Ed., 1958.

12 – ——————. *Integration Culturelle des immigrants: manuel à l'usage des organisations gouvernamentales et des agences benevoles.* UNESCO, 1957.

13 – ——————. Restrições quantitativas à imigração. *Digesto Econômico* (123) maio/jun., 1955

14 – BAIANA, Henrique Paulo. *O grande Japão.* Rio de Janeiro, Renascença Ed., 1932.

15 – BALDUS. Herbert &WILLEMS. Emilio. Casas e túmulos de japoneses no Vale da Riviera de Iguape. *Revista do Arquivo Municipal.* São Paulo, 1 (77), 1941.

16 – BENAZET, A. *Le Japan avant les Japonais: études ethnographique sur les ainou primitives.* Paris, Payot, 1910.

17 – BOAS, Franz. *The Mind of Primitive Man.* New York, Free Press, 1965. 254 p

18 – BOGARDUS, Emory. S. Aspectos ecológicos das migrações. *R. Serv. Públ.*, jul/ago., 1948.

19 – ——————. A Race Relation Cycle. *American Journal of Sociology, 25* (4) jan., 1930.

20 – BURNS, Eduard Mcnall. *História da Civilização Ocidental.* Trad. de Lourival Gomes Machado, Lourdes Santos Machado e Leonel Vallandro. Porto Alegre, Ed. Globo, 1965.

21 – CÂMARA, Aristóteles de Lima & NEIVA, Arthur Hehl. Colonização nipônica e germânica no sul do Brasil. *Revista de Imigração e Colonização.* Rio de Janeiro, 2 (1) jan., 1941.

22 – CARDOSO, Ruth Correia Leite. O agricultor e o profissional liberal entre os japoneses no Brasil. *Revista de Antropologia,* São Paulo, (11) jun./dez., 1963.

23 – CARNEIRO, J. Fernando. *Imigração e colonização no Brasil.* Rio de Janeiro, Universidade do Brasil Fac. Nac. de Filosofia, 1950. (Publ. avulsa, 2).

24 – CASTRO, Josué de. *Ensaios de geografia humana.* São Paulo, Ed. Brasiliense, 1964.

25 – COARACY, Vivaldo. *O perigo Japonês.* Rio de Janeiro, J.Olympio, 1942.

26 – COMAS, Juan. *Manual de antropologia física.* México, Fondo de Cultura Econômica, 1957.

27 – COUTINHO, Aluisio Bezerra, *A mestiçagem humana e o problema das culturas.* Separata da *Revista Médica de Pernambuco,* Recife, dez., 1933, jan., 1934.

28 – COWLES, Maria Antonia. Panorama geral da população japonesa e seus descendentes no Brasil. In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

29 – DENIKER, J. *Les races et les peuples de la terre.* Paris, Masson Ed., 1926.

30 – DIÈGUES JÚNIOR, Manuel. *Etnias culturais no Brasil.* Rio de Janeiro, Ed. Paralelo, 1972.

31 – ——————————. Imigração e industrialização. (estudo sobre alguns aspectos da contribuição cultural do imigrante no Brasil. Rio de Janeiro, Instituto Nacional de Estudos Pedagógicos, 1964. 385 p.

32 – ——————————. Os imigrantes e a sua integração à cultura regional. In: REUNIÃO BRASILEIRA DE ANTROPOLOGIA, 3, Rio de Janeiro, 1956.

33 – DUARTE, Abelardo. *Aspectos da mestiçagem nas Alagoas.* Separata da *Revista do Instituto Histórico das Alagoas,* Maceió (27), 1951-53, 1955.

34 – EARHART, Byron. The New Religion of Japan, in: *MONUMENTA Nipponica. The Voyagers, Japan.* Tokyo, 1970.

35 – ELIADE, Mircea de. *O sagrado e o profano.* Trad. de Rogério Fernandes. Lisboa, Ed. Livro do Brasil [s.d.]

36 – FANE, Tonsonby. *The vicissitudes of Shinto* Kyoto, 1963

37 – ——————. *Studies in Shinto and Shrines.* Kyoto, [s.d.]

38 – FESTINGER, Leon & KATZ, Daniel. *Les méthodes de recherche dans les sciences sociales.* Trad. de Honore Lesage. Paris Universitaires de Frances, 1959. 2v.

39 – FREYRE, Gilberto. Ainda a propósito de Sonia Braga. *Diario de Pernambuco,* 15, nov., 1977

40 – ——————. *Além do apenas moderno.* Rio de Janeiro, J. Olympio, 1973.

41 – ——————. O brasileiro como tipo nacional de homem situado no trópico e na sua maioria, moreno: Comentários em torno de um tema complexo. Separata da *R. bras. Cult.* 2 (6). out./dez., 1970 .

42 – ——————. *Casa Grande & Senzala.* 15 ed. Recife, CEPE, 1966

43 – ——————. *Em torno de alguns túmulos afro-cristãos em Moçâmedes.* São Paulo, Progresso Ed. [s.d.]

44 – ——————. *Sociologia.* Rio de Janeiro, J. Olympio, 1945.

45 – FUNDAÇÃO IBGE. Bahia In: ENCICLOPÉDIA DOS MUNICÍPIOS BRASILEIROS. Rio de Janeiro, 1958. v. 20-21.

46 – FUNDAÇÃO IBGE. *Bonito.* Rio de Janeiro, (Série Monografia)

47 – FUNDAÇÃO IBGE. Ceará. In: ENCICLOPÉDIA DOS MUNICÍPIOS BRASILEIROS. Rio de Janeiro, 1960. v. 16.

48 – FUNDAÇÃO IBGE. Pernambuco In: ENCICLOPÉDIA DOS MUNICÍPIOS BRASILEIROS. Rio de Janeiro. 1960. v. 18.

49 – FUNDAÇÃO IBGE. Rio Grande do Norte. In: ENCICLOPÉDIA DOS MUNICÍPIOS BRASILEIROS. Rio de Janeiro, 1960. v. 17

50 – GARRETT, Annette. *A entrevista, seus princípios e métodos.* 4. ed. Rio de Janeiro, Agir Ed., 1964.

51 – GLASENAPP, Helmuth Von de. *Mystères bhouddhistes.* Trad. Jacques Marty. Paris, Payot, 1944.

52 – GONÇALVES, Ricardo Mário. Religião do Japão na época da imigração para o Brasil. In: O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil São Paulo. Consulado Geral do Japão, 1971.

53 – GEORGE, Pierre. *Geografia da população.* Trad, de Miguel Urbano Rodrigues. São Paulo, Difusão Européia do Livro, 1969.

54 – HERSKOVITS, Melville. *El hombre y sus Obras.* Trad. de Hernandez Barroso. México, Fondo de Cultura Econômica, 1952.

55 – HOLANDA, Sérgio Buarque de. *História da civilização.* São Paulo, Ed. Nacional, 1975.

56 – IKEBANA, arte japonesa do arranjo floral. *Fatos Sobre o Japão.* Tokyo, dez., 1969.

57 – INCRA. Departamento de Recursos Fundiários. Divisão de Recursos Naturais. *Núcleo Colonial Pio XII.* 1971.

58 – JERIMUN japonês aguenta estocagem. *Diario de Pernambuco*, 22, maio, 1977.

59 – JORNAL do Commercio, Rio de Janeiro, 19 abr., 1947.

60 – KEESSING, Felix. *Antropologia cultural.* Rio de Janeiro, Ed. Fundo de Cultura, 1961.

61 – KENNEDY, Ruby J. R. Singler or Triple Multing-pot? Inter-Marriage Trends in New Haven, 1870-1940. *American Review of Sociology, 49* (4) 1944.

62 – ——————. Singler or Triple Multing-pot? Inter-Marriage Trends in New Haven, 1870-1950. *American Review of Sociology*, 1952.

63 – KONDER, Alexandre. *História do Japão.* Rio de Janeiro, Ed. Século XX, 1942.

64 – KUBITSCHEK, Juscelino et alii. *Imigração sem preconceitos.* Rio de Janeiro, Departamento de Imprensa Nacional, 1958.

65 – LEHMANN, F. W. Paul. *Geografia del Japon.* Barcelona, Labor, 1929

66 – LEME, Ruy Aguiar da Silva. Aspectos da contribuição de Japoneses para o desenvolvimento econômico do Brasil. In: JAPONÊS *em São Paulo e no Brasil.* São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

67 – LÉVY-BRUHL, Lucien. *Les carrets.* Pref. de Maurice Lenhardt. Paris, Press Universitaires de France, 1940.

68 – ——————. *La mentalité primitive.* Paris, Press Universitaires de France, 1947. 543 p.

69 – O LIBERAL, Belém, 2 set., 1973

70 – LIGEIRAS notas sobre o trabalho Japonês no Brasil. Rio de Janeiro, Papelaria Brasil, 1929.

71– LOBO, Bruno. *De Japonêz a brasileiro.* Rio de Janeiro. Imprensa Nacional 1932

72 – ——————. *Japonezes, no Japão e no Brasil.* Rio de Janeiro, Imprensa Nacional, 1926. 178 p.il.

73 – LUNA, Francisco de Assis & BRANDÃO, Iolanda Alves. *Estudo sócio-econômico do núcleo colonial Pio XII.* Fortaleza, M. A. INDA, 1969.

74 – MAEYAMA, Takashi. Religião, parentesco e as classes médias dos japoneses no Brasil urbano. In: SAITO, Hiroshi. *Assimilação e interpretação dos japoneses no Brasil.* Petrópolis. Ed. Vozes. 1973.

75 – MARINHO, Ilmar Penna. Problemas de imigração e colonização: política imigratória. *R. bras. Geogr.*, Rio de Janeiro, *26* (4) out. dez., 1964.

76 – MARTY, Paul. *Études sur l'Islam au Dahomey.* Paris, E. Leroux 1926. 295 p. il. Inclui bibliografia.

77 – MELO, Mário Lacerda de. A colonização e os problemas agrários do Nordeste. *Boletim do Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais,* Recife, 10. 1961

78 – MELO, Veríssimo de. Assimilação e aculturação de Japoneses no Brasil. *Separata do Boletim do Instituto de Antropologia da U.C.E.* Fortaleza, (3):17-38, dez. 1959.

79 – MENDES SOBRINHO, Otávio Teixeira. Imigrante Japonês e o desenvolvimento agrícola do Brasil In: *O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil* São Paulo. Consulado Geral do Japão, 1971.

80 – MÉTRAUX, Alfred. *La civilisation matérielle des tribus Tupiguarani* Paris, Librairie Orientaliste 1928. 331. il Inclui bibliografia.

81 – MONTANDON, George. *La civilization ancienne* et les cultures arctiques. Paris, Payot, 1934. 272 p. il. Inclui bibliografia.

82 – ——————. *L'ethnie française.* Paris, Payot, 1935. 239 p. il. Inclui bibliog.

83 – ——————. *La race, les races mise an point d'ethnologie romantique.* Paris, Payot, 1933. 299 p. il. Inclui bibliografia.

84 – ——————. *Traité d'ethnologie culturelle.* Paris, Payot, 1934.

85 – MORTARA, Giorgio. *Estudos brasileiros de demografia; pesquisas sobre população americana.* Rio de Janeiro, Fundação Getúlio Vargas, 1947. (Monografia, 3)

86 – ——————. *Pesquisa sobre a natalidade do Brasil e estudos sobre a natalidade e mortalidade no Brasil.* Rio de Janeiro, IBGE, 1950 e 1952. v. 10 e 14.

87 – NAGAI, Hideo. O estabelecimento da constituição Meiji. *Iwanami Koza Nihon Rekishi*, Tokio, (16) 1952.

88 – NEGRE, Pedro. *Budismo: enigma de um Nirvana misterioso.* Barcelona, Col. Labor, 1946.

89 – NEIVA, Artur & CÂMARA, Aristóteles de Lima. Colonização nipônica e germânica no sul do Brasil. *Revista de Imigração e Colonização*, 2 (1) Jan., 2(2-3), abr/jul.

90 – NINA RODRIGUES, Raymundo. O animismo fetichista dos negros bahianos. Pref. e notas de Artur Ramos. Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1935. 199 p.

91 – NOLTINGK, B. F. *The Art of Research.* Amsterdam, Elsevier Publ., 1963.

92 – NOGUEIRA, Oracy. *Pesquisa Social.* São Paulo. Comp. Ed. Nacional, Ed. da Universidade de São Paulo 1968-209 p.

93 – OLIVEIRA, Xavier de. O sentido político-militar da colonização japonesa nos países do Novo Mundo. In: – O PROBLEMA imigratório na América Latina.

94 – ORTIZ, Fernando. *Los negros brujos.* Madrid, Ed. America, 1917

95 – PHILLIPS, Bernard S. *Pesquisa Social: estratégias e táticas.* Trad. de Vanilda Paiva. Rio de Janeiro, Agir, 1974.

96 – PIERSON, Donald. *Estudos de organização social.* São Paulo, Martins, 1949. 672 p.

97 – ——————. *Teoria e pesquisa em sociologia.* 8 ed. São Paulo, Melhoramentos 1964. 1336 p.

98 – PINTO, Roquette. *Ensaios de antropologia brasileira.* São Paulo, Ed Nacional, 1933. 190 p.

99 – PINTO FERREIRA: *Curso de pesquisa social.* Rio de Janeiro, José Konfino, Ed., 1972. 148 p.

100 – RADAKRISHNAM, S. *Religion y sociedad.* Trad. por Josefa Sartre Cabot. Buenos Aires, Ed. Sudamerica, 1955.

101 – RADIN, Paul. *Indians in South America.* New York, Doubleday, 1942. 324 p. il.

102 – RAMOS, Artur. *Introdução à antropologia brasileira.* Rio de Janeiro, Casa do Estudante do Brasil, 1947. (Col. Estudos Brasileiros,2)

103 – REIS, Fideles & França, José de. *O problema imigratório e seus aspectos étnicos.* Rio de Janeiro, Revista dos Tribunais. 1924

104 – RENOU, Louis. *Hinduismo.* Trad. de Afonso Blacheyre. Rio de Janeiro, Zahar Ed., 1964. 191 p.

105 – SAITO, Hiroshi. Alguns aspectos de adaptação de imigrantes japoneses no Brasil. *Sociologia* (4) 1958.

106 – SAITO, Hiroshi. O cooperativismo na região de Cutia. São Paulo, Ed. Sociologia e Política [s.d.]

107 – SAITO, Hiroshi. O elemento nipônico de uma comunidade brasileira. *Arquivos,* Instituto de Antropologia. Natal, 2(1-2) mar, 1966.

108 – SAITO, Hiroshi. A família do imigrante Japonês para o Brasil. *Sociologia.* São Paulo. 22 (1) mar./ 1960.

109 – SAITO, Hiroshi. *O japonês no Brasil; estudo de mobilidade e fixação.* São Paulo, Sociologia e Política. 1961. 238 p. il. Inclui bibliografia.

110 – SCHMIDT, Wilhelm. *Manual de história comparada de las religiões.* Madrid, 1941.

111 – SELLTIZ, Claire, et alii. *Métodos de pesquisa nas relações sociais.* São Paulo, Ed. Herder, Ed. da Univ. de São Paulo. 1967 687 p.

112 – SERPE. *Anuário estatístico de Pernambuco. 1968.* Recife, 1969.

113 – SHINKOKAI, Kokusai Bunka. *Bibliography of Standard Reference Books for Japanese Studies with Descriptive Notes.* Tokio, [s.d.] 1962. 10 v.

114 – SMITH, Robert J. & *REARDARLEY, D. Japanese Culture Development and Characteristics.* Londres, Methuem, 1963.

115 – SMITH, T. Lynn. *Brasil povo e instituições.* Rio de Janeiro. Programa de Publicações Didáticas, Agência Norte-Americana USAID, 1967.

116 – SOARES, Dirce Pestana. Análise de composição etária e o comportamento de imigrantes e seus descendentes. In: O JAPONÊS em São Paulo e no Brasil. São Paulo, Consulado Geral do Japão, 1971.

117 – VALENTE, Waldemar. *Introdução à antropologia cultural.* Recife Universidade Católica, 1953.

118 – VALENTE, Waldemar. *Islamismo em Pernambuco.* Recife, Imprensa Universitária, 1975.

119 – ——————. *Misticismo e região.* Recife, Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais, 1952.

120 – ——————. *Sincretismo religioso afro-brasileiro.* Pref. Amaro Quintas. São Paulo, Ed. Nacional, 1955. (col. Brasiliana)

121 – VALVERDE, Orlando. A velha imigração italiana e sua influência na agricultura e na economia do Brasil. *Boletim Geográfico, (19) mar./abr. 1961.*

122 – VASCONCELOS, Henrique Doria de. Alguns aspectos da imigração no Brasil. *B. Serv. Imigr. Colonização, (3), mar., 1941.*

123 – O VESTION de l'imigration aux Etats Unis. *Etudes,* Paris, 180 (16), 1924.

124 – VIEIRA, Francisca Isabel Schurig. *O japonês na frente da expansão Paulista.* São Paulo, Universidade de São Paulo, 1973.

125 – WAIBEL, Leo. Princípio de colonização européia no sul do Brasil. *R. bras. Geogr.,* Rio de Janeiro, *11* (2) abr./jun., 1949.

126 – WALTER, Paul A. F. *Race and culture Relations.* New York, Magrav-Hill Book, 1952.

127 – WILLEMS, Emílio. Aspectos da aculturação dos japoneses no Estado de São Paulo. *B. Fac. Fil. Ci. Letras. 82* (31) 1948 (Série Antropologia).

128 – WILLEMS, Emílio, Assimilação e populações marginais no estado de São Paulo. *B. Fac. Fil. Ci. Letras da USP,* 82 (3) (Série Antropologia)

129 – WILLEMS, EMÍLIO. Problemas de imigração: Critério de seleção. *Estado de São Paulo*, 24, dez., 1947.

130 – ——————. Shindô-Renmei um problema de culturação. *Sociologia*, São Paulo, 9 (2) 1947.

131 – WILSON, Brayan. *La religion en la Sociedad.* Trad. de Juan Carlos Garci-Barrou. Barcelona, *Labor* 1969.

132 – WOLFFENBUTTEL, Ervin. A abóbora Hokkáido Kabotchá no tratamento da diabete. *Revista Brasileira de Medicina*, Rio de Janeiro, *27* (4), abr., 1970.

欧 文 索 引(五十音順)

アカラ　Acará

アサイ　Assaí

アノフェレス　anopheles

アボブリーニャ・カゼルタ　abobrinha caserta

アマゾナス　Amazonas

アマレロン　amarelão

アリアンサ　Aliança

アルタ・パウリスタ　Alta Paulista

アルタ・モジアナ　Alta Mogiana

アルニカ　arnica

アローバ　arroba

アング　angu

イツベラ　Itubera

イニャメ　inhame

イリェウス　Ilhéus

イルマール・ペンナ・マリニョ　Ilmar Penna Marinho

ウナ　Una

ウンバンダ　umbanda

ヴードゥー　vodu

エスカベチェ　escabeche

エスプラナーダ　Esplanada

エミリオ・ウィレンス　Emílio Willems

エルウィン・ウォルフェンブュテル　Ervin Wolffenbuttel

オピラソン opilação
オリベイラ・ビアンナ Oliveira Viana

カスタニャル Castanhal
カナアン・デ・サン・マルチーニョ Canaã de São Martinho
カナビエイラス Canavieiras
カーボ Cabo
カラベラス Caravelas
カルデック Kardec
カルル caruru
カルロス・ボテリョ Carlos Botelho
カンジカ canjica
カンドンブレ candomblé
ガラファーダ garrafada

キベベ quibebe
キロンボ quilombo

クスクス cuscuz
グァイウーバ Guaiúba
グァタパラ Guatapará
グァナバラ Guanabara

ケブラ・ペドラ quebra-pedra

コジード cozido
コチア Cotia
コロノ colono

サンバドール Salvador

サン・ジョアン São João

サン・ジョゼー・デ・ベゼーロス São José de Bezerros

サンタ・リタ Santa Rita

サンタレン Santarém

サント・アントニオ Santo Antônio

サント・アントニオ・ダ・バーラ・ド・ウナ Santo Antônio da Barra do Una

サントス Santos

サン・パウロ São Paulo

サン・フランシスコ São Francisco

サン・ペドロ São Pedro

シゼナンド・シルバ Sizenando Silva

シャガス Chagas

シャンゴー xangô

シリニャエン Sirinhaém

ジポラバ Jiporava

ジュケラ Juquerá

ジュセリーノ・クビチェック Juscelino Kubitschek

ジュルベバ jurubeba

ジルベルト・フレイレ Gilberto Freyre

セアラ Ceará

セチ・バーラス Sete Barras

セーラ・ド・マール Serra do Mar

チエテ Tietê

ツピー Tupi

テ・リン・スミス T.Lynn Smith
デュモン Dumont

トリアトマ triatoma
トリパノソーマ・クルジ tripanosoma cruzi
トレー Toré
トレス・バラス Tres Barras
トーロス Touros

ナゴ NAGô

ニジア・フロレスタ Nísia Floresta
ニーナ・ロドリーゲス Nina Rodrigues

ノロエステ Noroeste

パカツーバ Pacatuba
パパリ Paparí
パラ Pará
パラナ Paraná
パリンチンス Parintins
パルマーレス Palmares
バイア Bahia
バイトス Bastos
バストス・デ・アビラ Bastos de Ávila
バタパ vatapá
バトゥリテ Baturité
バーラ・デ・グァビラーバ Barra de Guabiraba
バルドス Baldus
バルベイロ barbeiro

ピウン　Pium

ピカパウ・アマレロ　Pica-Pau Amarelo

ピラパーマ　Pirapama

ピロン　pirão

フェジョアーダ　feijoada

フェジョン　feijão

フェルナンド・オルティス　Fernando Ortiz

フランシスカ・イザベル・シュリグ・ビエイラ　Francisca Isabel Schurig Vieira

フロレスタ　Floresta

プナウ　Punau

プラード・ジョルダン　Prado Jordão

ブレッケンフェルド　Breckenfeld

ブレード　bredo

ヘルマン・カーン　Herman Kahn

ヘンリー・ミラー　Henry Miller

ペルナンブコ　Pernambuco

ペレイラ・バレトス　Pereira Barretos

ベゼラ・コーチーニョ　Bezerra Coutinho

ベリシモ・デ・メーロ　Veríssimo de Melo

ベレン　Belém

ポール・マルティ　Paul Marty

ポンバル　Pombal

ボニート　Bonito

マウエス　Maués

マカシェイラ　macaxeira

マシャランゲァペ Maxaranguape

マセイオ Maceió

マタ・デ・サン・ジョアン Mata de São João

マト・グロッソ Mato Grosso

マヌエル・ディエゲス・ジュニオール Manuel Diêgues Junior

マメルーコ mameluco

マモン mamão

マラクジャー maracujá

マリア・アメリア・グァラシアーバ Maria Amélia Guaraciaba

マリア・アントニア・ローペス・コウレス Maria Antônia Lopes Cowles

マリオ・ラセルダ・デ・メーロ Mário Lacerda de Melo

マンジォカ mandioca

ミナス・ゼラエス Minas Gerais

ミランドポリス Mirandópolis

ムチロン mutirão

ムリソカ muriçoca

モイニョ・ベーリョ Moinho Velho

モランガ・コロア moranga coroa

モンテ・アレグレ Monte Alegre

ユング Yung

ラダクリスナン Rhadakrishnam

リオ・グランデ Rio Grande

リオ・グランデ・ド・ノルテ Rio Grande do Norte

リオ・デ・ジャネイロ　Rio de Janeiro
リオ・ボニート　Rio Bonito
リベイラ・デ・イグアペ　Ribeira de Iguape

ルッテ・コレイア・レイティ・カルドーゾ　Ruth Correia Leite Cardoso

レグア　légua
レコンカボ　Reconcavo
レシフェ　Recife
レジストロ　Registro
レビー・ブルール　Lévy-Bruhl

ロケット・ピント　Roquette Pinto
ロバート・カーサー　Robert Cather
ロマント・ジュニオール　Lomanto Júnior

著者の著作

著作

História da Civilização. São Paulo, Cia. Ed. Nacional, 1937.
O Povoamento Primitivo da América. Recife, Tip. de *A Tribuna, 1939.*

Fundamentos Biotipológicos da Educação. Recife, Tip. do *Jornal do Commercio,* 1941.

Caminha – O primeiro etnógrafo do Brasil. Recife, Edição da Casa do Estudante de Pernambuco, 1944.

Aspectos da Evolução Histórica da Língua Inglesa. Recife, Imprensa Oficial, 1944.

O povoamento primitivo da América e a teoria do Prof. Alês Hrdlicka. Recife, Imprensa Industrial, 1948.

Eutanasia. Recife, Tip. do *Diário da Manhã,* 1948.

Notas à margem de um problema etnográfico. Recife, Tip. do Diário da Manhã, 1948.

O Índice de Manouvrier e sua significação em educação física escolar. Recife, Imprensa Industrial, 1948.

O critério de forma na metodologia etnológica. Recife, Tip. do *Jornal do Commercio,* 1949.

Introdução ao estudo da antropologia cultural. Recife, Tip. da Universidade Católica, 1953.

Índices cranianos. Recife, Tip. da Faculdade de Filosofia Federal, 1954.

Marcas muçulmanas nos xangôs de Pernambuco. Recife, Tip. da Faculdade de Filosofia Federal, 1954.

Sincretismo religioso afro-brasileiro. S. Paulo, Cia. Ed. Nacional, 1955 (Coleção *Brasiliana).*

A função mágica dos tambores. Recife, Arquivo Público Estadual, 1956.

Influências islâmicas nos grupos-de-culto afro-brasileiros de Pernambuco. Recife, IJNPS, 1957.

Islamismo em Pernambuco. Recife, Imprensa Universitária, 1957.

Maria Graham – Uma inglesa em Pernambuco nos começos do século XIX. Recife, Imprensa Oficial, 1957. (Coleção *Concórdia).*

Um ensaio do Prof. Amaro Quintas. Recife, Imprensa Universitária, 1958.

O negro nas crônicas holandesas do século XVII. Recife, Imprensa Universitária, 1958.

Misticismo e região (Aspectos do Sebastianismo Nordestino). Recife, IJNPS, 1963.

Gilberto Freyre: um livro de estréia. Recife, IJNPS, 1964.

Influências daomeanas nos grupos-de-culto afro-nordestinos. Recife, IJNPS, 1966.

Panteísmo em Pernambuco. Recife, Imprensa Universitária, 1966.

O Padre Carapuceiro (Crítica de costumes na primeira metade do século XIX). Recife, Dep. de Cultura da SEEC., *1969.*

Survivances dahomeennes dans les groups-de-culte africains du nord-est du Brésil. Trad. de Melle. Marie-Clotilde Seno, da Univ. de Dakar, 1969.

Serrinha (Aspectos Antropossociais de uma comunidade nordestina). Recife, IJNPS. 1973.

Antecipação de Pernambuco no Movimento da Independência: testemunho de uma inglesa. Recife, IJNPS, 1974.

João Martins de Ataíde: um depoimento. Recife Gráfica Caxangá, 1976.

Sexo e Trópico. Imprensa Universitária. Recife, 1976

Folclore Pernambucano. Campanha de Defesa do Folclore Brasileiro. Rio de Janeiro, 1978.

翻　訳

Síntese etnográfica venezuelana, do original espanhol de Júlio Febres Cordero G. Recife. Imprensa Oficial, 1947.

Os Heróis gêmeos na mitologia sul-americana. do original francês. de Alfredo Métraux. Recife. Faculdade de Filosofia de Pernambuco, 1951.

Vida social do Brasil nos meados do século XIX. Do original inglês de Gilberto Freyre. Recife. IJNPS. 1964.

近　刊

Anchiéta. homem e santo

São Francisco de Olinda (História. Arte. Folclore)

Gesta do Cangaço

Manuel Bandeira, o desenhista

JICA